地域交流研究

2007年度

年報 第4号

目　　次

――――― 第４回地域交流研究フォーラム ―――――

始めの挨拶 …… 西本　勝美・坂田有紀子　2

基調講演（付：質疑応答）
バラはどう呼ばれようとバラだ
―フィールド・ミュージアムの魂の叫び― …… 今泉　吉晴　5

シンポジウム
地域の自然と暮らしと農に学ぶ …… 26
シンポジスト：北垣憲仁・奥　隆行・小宮正廣・杉本　清・小口尚良
司会：加藤大吾

座　談　会 …… 49

終わりの挨拶 …… 畑　　潤　61

――――― 2007（H19）年度活動報告 ―――――

Ⅰ．2007年度の活動について〔概況〕 …… 64
Ⅱ．各部門の活動 …… 65
　Ⅱ－1．フィールド・ミュージアム部門
　Ⅱ－2．発達援助部門
　　Ⅱ－2－1．ＳＡＴ事業
　　Ⅱ－2－2．地域教育相談室
　　Ⅱ－2－3．地域情報教育
　Ⅱ－3．暮らしと仕事部門
Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動 …… 86
　Ⅲ－1．第4回地域交流研究フォーラムの開催
　Ⅲ－2．各種講座の開催
　Ⅲ－3．『地域交流センター通信』の発行
Ⅳ．地域貢献活動 …… 95
　Ⅳ－1．概説
　Ⅳ－2．山梨県地域教育フォーラム南都留集会
　Ⅳ－3．都留市子どもの居場所づくり事業
Ⅴ．地域交流研究教育プロジェクト …… 97

（付）2007（H19）年度地域交流研究センター担当教員 …… 106

第４回地域交流研究フォーラム

つなぐ はぐくむ フィールド・ミュージアム

自然・食・暮らし・文化

2008年２月23日（土）

都留文科大学

始めの挨拶

本学初等教育学科教授　西　本　勝　美
本学初等教育学科准教授　坂　田　有紀子

西　本：　皆様、おはようございます。本日はようこそおいでいただきまして、誠にありがとうございます。地域交流研究センターのセンター長を務めております西本です。第４回地域交流研究フォーラムの開催にあたりまして、主催者を代表して簡単にごあいさつ申し上げます。今日はたまたま富士山の日というようなことで、富士五湖のほうではいろいろなイベントがたくさん催されるようですけれども、こちらもこちらで盛り上がっていきたいと考えております。

都留文科大学の地域交流研究センターといいますのは、都留文科大学と地域をつなぐための拠点として平成15年度に開設されました。以来、この年度末で５年目を終わるということになりますけれども、この間に、センターの運営形態としましては、フィールド・ミュージアム部門、発達援助部門、それから暮らしと仕事部門という三つの部門を柱として活動を展開するかたちを整えてまいりました。今日の資料の中に、センターの紹介のリーフレットが一部入っていたかと思います。これは昨年度末に作ったものですけれども、センターの活動としてご覧いただければと思います。

それで、今回のフォーラムにつながる話ですが、昨年の夏の初めに、当センターのフィールド・ミュージアム部門と発達援助部門のそれぞれの活動が高く評価されまして、全国の大学の模範となるように、さらに力を入れて頑張れという趣旨で、それぞれの部門で文部科学省からGPといわれている補助金があるのですけれども、これはいま全国の大学が獲得しようと躍起になっているものです。それをそれぞれの部門で得られることになりました。その活動二つは、それぞれ力を入れて進めている最中です。

そしてその一方で、当センターでは、開設２年目から毎年の年度末に地域交流研究フォーラムとして、広く皆さんに参加していただけるかたちで、公開のフォーラムというものを開催してきました。すでに過去３回、当センターの活動の趣旨に沿ったテーマを設定して開催してきているわけです。

今回は第４回ということになります。その４回のフォーラムを計画するにあたって、いま紹介しました二つのGPのうち、フィールド・ミュージアム部門の活動を基盤としたGP、私どもは略して環境教育GPと呼んでいますが、そのGP活動の一環ということと、当センターが毎年開催しているフォーラムとを重ねるかたちで開催しようということになって、今日のフォーラムに至ったわけです。

本日のフォーラムの中身につきましては、すでにご案内していますとおり、「つなぐ　はぐくむ　フィールド・ミュージアム　自然・食・暮らし・文化」というテーマですけれども、そのテーマに沿った講演やシンポジウム、それからこれまでにないユニークなかたちで展示休憩の時間がとってあるという工夫がしてあります。当センターのフォーラムはもともと地域の方々と意見を交わし合いながら、協働活動やネットワークづくりのきっかけをつかんでいただく場であるということが大きな趣旨としてあります。

ですので、本日もまずはこの場におられる方々につながっていただいて、闊達にご意見や議論を交わしていただいて、様々なきっかけをつくっていただきたい。それはものを考えるうえでのきっかけということもあるでしょうし、これまで面識のなかった方とつながるきっかけということもあるでしょうし、思い切って新しいことを始めてみようというきっかけかもしれません。そういうきっかけが得られる場になればいいと思います。

そして、この都留の地域から自然と共生する新たな地域社会の展望を、GPの趣旨でもありますけれども、広く全国に向けて発信していければいいと期待しています。それでは、簡単ではありますが、主催者あいさつとさせていただきます。(拍手)

＊　　＊　　＊

坂　田： おはようございます。先ほどご紹介いただきましたフィールド・ミュージアム部門の責任教員であり、先ほど西本先生からご紹介のありました環境教育GPの取り組み責任者をしております坂田と申します。今日は皆様、はるばる遠いところ、遠くは愛知県から、東京からもお見えになっている方がいらっしゃいますが、本当に遠いところからありがとうございます。

私のほうからは、今日のプログラムの内容を簡単にご紹介したあと、少しGPの説明をさせていただいて、そのあと今泉先生にバトンタッチをさせていただきたいと思います。

今日のプログラムの内容ですけれども、お手元の資料にありますように、午前中、このあと今泉先生の基調講演があります。「バラはどう呼ばれようとバラだ」という、一見聞いたときに、いったいどういうことが話されるんだろうと、楽しみと言いますか、不思議なタイトルで、私も先生がどういうことを話してくださるのか、まだよく存じません。わからないので楽しみにしていますが、きっと非常に示唆に富んだ内容になるのではないかと期待しています。

そのあと昼休み、12時から13時に、昼休み前に天然酵母パンの販売があります。お昼ご飯を外で食べないで中で、という方はぜひお買い求めいただければと思います。

午後はシンポジウムで、「地域の自然と暮らしと農に学ぶ」というテーマで、都留を中心に地域で活躍されてきて、これまで私たちの大学やフィールド・ミュージアム部門と一緒に活動をされてきた方に、活動の紹介をしていただいて今後の夢とか希望とかロマンを語っていただきたいと思っています。

そのあと展示・休憩が3時から4時。こちらは今回いろいろな方に協力していただきまして、非常に内容の豊かな、自然を感じさせるとてもすてきな空間になっていますので、ぜひご覧いただきたいと思います。同時に学生たちが心をこめてお茶を用意しております。皆さんマイカップを持ってきていただいたかと思いますけれども、そのカップで飲んでいただきたいと思います。もし忘れた方がいらしても、こちらですてきなカップを用意しておりますので、遠慮なくお茶を楽しんでいただければと思います。

最後に、ちょっと遅くなるのですが、4時から5時に「フィールド・ミュージアムの可能性」ということで、出席者の皆さんと、自然と共生した持続可能な地域とはどういう地域か、どういうことを今後私たちはやっていかなくてはいけないか、意見交換をします。こう言うとちょっと硬いですけれども、どういうこと

をみんなでやっていけばいいか、やっていきたいかということをざっくばらんに意見交換できればと考えています。このようなかたちで今日一日おつきあいいただければと思います。

それから、このフォーラムも実はスポンサーは文部科学省なので、ちょっと退屈かもしれませんが、少し宣伝をさせてください。本学で現在取り組んでおります取り組み、環境教育GPとして取り組んでいる取り組みをご説明申し上げたいと思います。

タイトルが「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み、フィールド・ミュージアムへようこそ」というものです。これはこれまで本学が今泉先生、北垣先生、あるいはそのお仲間の皆さんと一緒にやってきたことをベースに、新たに地域全体をフィールドとして環境教育を行っていこうというものです。この取り組みの目的はこちらに書いてあるようなものなのですけれども、特徴としては、地域全体をフィールドとした実践的な環境教育をおこなうことと、学生と一緒に行うだけではなくて、地域の皆さんと一緒にやっていきたいという思いがあります。ですから、地域の皆さんとの連携・協働を今後さらに強くしていければと思っています。

それからもう一つ、三つの柱とあります。これを少し簡単にご紹介します。どういう内容になっているかということですが、一つ目の柱が「自然に学ぶ」。二つ目の柱が「農に学ぶ」、三つ目が「暮らしに学ぶ」という内容です。それぞれ地域の自然をフィールドとした自然環境教育、それから地域の里山と言われているところで最近農業の担い手がなくなって、休耕地が多くなって荒れてきていると言われています。休耕地が都留市内にもたくさんありまして、そういった休耕地を使って学生と地域の方たちと一緒に農業をやれたらいいのではないかということを考えています。

最後、「暮らしに学ぶ」では、人・町・自然をつなぐ地域研究とありますが、こういう都留の全体、自然だけではなくて、町・里、それぞれで自然とつながった暮らしや文化、人の思いなどを取材に行ったり学生自身が体験して、そういうものを研究していこうという試みです。

それぞれ説明すると長くなるので、あまり詳しくは申し上げませんが、現在こちらに挙げてあるような活動が行われていますし、今後力を入れていきたいと考えているところです。

最後に、私のほうから、気持ちと言いますか、願いと言いますか、このプロジェクトにかける思いをお話しします。これまで、うちの大学の学生が地域に出ていって、地域の方たちからさまざまなことを実際に学んできて成長してきました。自然との関わり方、暮らしの中に生きる知恵や技、それから地域の歴史や文化など、地域から教わることや新しい発見が非常にたくさんあります。

そういう地域の方たちから学ぶことと同時に、私たち大学も地域の皆さんと何か一緒にできることがあったら、ぜひ一緒にやっていきたいと考えております。

これまでも地域交流研究センターを中心に地域の方たち、一部の方たちと共同でいろいろなことをやってまいりましたが、これからも地域の皆さんとともに自然と調和した持続可能な地域づくりをしていきたい。そして先ほど西本センター長がおっしゃいましたが、新たな交流の輪をつなぎ、広げ、はぐくんでいければと思っております。以上長くなりましたが、あいさつに換えさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

基調講演（付：質疑応答）

バラはどう呼ばれようとバラだ
—フィールド・ミュージアムの魂の叫び—

都留文科大学　名誉教授　今　泉　吉　晴

司　会：（加藤大吾：アースコンシャス）　それでは始めさせていただきたいと思います。次はこのフォーラムの目玉となります。ところで皆さん、バラって、英語でローズですね。フランス語では何と言うんでしょうね。ロゼットでしょうか。（会場よりロゼの声あり）ロゼでしょうかね。もしもですけれども、名前がなかったとき、皆さんが名前をつけるとしたら、何てつけられますか。あのバラを…、そんなことを考えてしまいます。それでは、地域交流研究フォーラム基調講演「バラはどう呼ばれようとバラだ」、都留文科大学名誉教授の今泉吉晴先生、よろしくお願いします。（拍手）

今　泉：　おはようございます。今日これから１時間ちょっとお話をさせていただきまして、そのあと皆さんといろいろな話をしたいと思っていますので、よろしくお願いします。私の話は何回も紹介していただいていますが、皆さんのお手元にお配りしました資料があります。これで話の順番を追ってお話ししますので、開いていただけたらありがたいと思います。

「バラはどう呼ばれようとバラだ」としまして、副題としてもうちょっとすごいことが書いてあります。「フィールド・ミュージアムの魂の叫び」と書かせていただきました。これは魂ですので、子どもでも魂の叫びがあるというか、むしろその魂の叫びは強いわけですね。そういう声を拾って自然と接していこうということです。その魂の叫びというのは、たったいま分かったという認識と結びついていまして、そのことについてちょっと話したいんです。

「フィールド・ミュージアムというのはわかりにくいねえ」と皆から言われます。「何をやろうとしているんでしょう」と、もう20年以上も言われていまして、私たちもなんとかそのへんを分かりやすくと思っていまして、今言ったようなだれでも参加できる自然との共生の問題について、あまりややこしい図式にならないで、本当にだれでも参加できるようなかたちの広場をつくれたらと思いまして、このような演題にしました。

ですから、本当に自分の魂に照らし合わせてなるほどそうだというふうな話ができればいいということになるわけです。それで午後には具体的な取り組みの話がたくさんありますので、私の話はそういった整理、要は簡単な問題で大事なんだということをお伝えできればいいなあと思うわけです。そんなことでざっくばらんな話をさせていただきたいと思っています。ただ、今日お集まりになった方々の様子を拝見しますと、今までにない非常に広範な方たちが来られているのではないかという感じを持ちます。いろいろな関心の方が来られているということですね。それが一つあります。

それからもう一つは、フィールド・ミュージアムの運動は30年近い年月があり

ます。今日はそのこともちょっと触れますが、最初から一緒に参加されたり、様子を見ていてくださった方も何人もおります。時間軸が広く、20数年、30年近い広がりを持つということですね。それと関心の層があるということで、そのことを配慮してお話をしていくことになりますので、こういう意味でもざっくばらんな話が必要かと思っています。

都留の人・自然との出会い

最初に、この小さな大学のある山間の町はすばらしい町だと私は思っているんですけれども、そこに私が来たのは、1979年３月でした。私がこの大学に採用され４月に着任することが決まったのが３月だったと思うんです。それで大急ぎで家を売りまして、都留に駆けつけてきました。家財道具を一切合切、車に積みまして、大変な感じのものでした。荷車を引いてきたような感じを自分では持っているんです。

そうしましたら、学生が迎えてくれまして、これもまたちょっとびっくりしました。私は動物学の教師としてこの大学に来たわけですけれど、そうしたら、十数人の動物学を専攻しているという学生が、先生がいないのにいまして、迎えてくれました。そしてそのいっさいの家財道具を一気に運んでくれました。この大学のずっと上のほうにヤマネやモモンガを飼っている飼育舎がありまして、バラックなんですけれど、結構なスペースで何部屋もありました。その中に積み上げてくれまして、私は非常にすっきりした。そういうおもしろい経験をしました。

そうやって都留の町に来ましたが、この町は私は昔から非常に印象がある町なんです。富士山に動物の調査をしに東京から出かけるんですけれど、そのときに、最初は町の中を抜けて、バスなんかで渋滞していましたけれど、富士山に向かいました。それから高速道路が一本だけ通り、位置が高くなったんですね。位置が高くなって、通過するときにあたりが全部見渡せるようなになりまして、みごとに美しい町でした。今のように谷の下の平らなところが住宅で埋め尽くされているという感じではなくて、緑がずっと広がっていて用水が誠に美しく流れていました。ああ、こんな町に住めたらいいなあと考えていました。大学があるのも知っていましたけれども、そういうところに採用されるなんていうことは夢のような話ですから、まったく現実には考えていませんでした。それが実現しまして、住んでみて最初に書いたことがそれなんです。

自然との間に独特の間合いと親しさを持つ都市・都留

まず森の近さに驚きました。森というのはどこでも見ることはできますね。東京でも公園に行きますとあります。それから、もちろん富士山みたいなところもあります。でも距離が独特なんですね。この町の森の近さというのは非常に独特です。山の間なので近いんですね。それで１本１本の木が分かります。稜線に生えている木ですら１本１本が見えている。それより遠くは見えないんですね。この町はとても独特です。非常に間近に森と接することができる町で、しかもそれがこの谷筋のどこに住んでいようと、同じような距離、間合いで森があるんです

ね。これは本当にすごいエコロジーの都市だと思いました。

人間は谷筋を線上に動けば、町をつなぐことができて、あまり遠くまで広がっていないという、人間の住居と森との関係が見られました。これはすごいなあと今でも思っています。

それと湧き水が豊かであるということですね。これも本当に驚きまして、特に十日市場の湧水地帯ですね。こんこんと水が湧いていまして、すっかり私は惚れ込みました。何年かたってかかわりましたけれど、ひとつ湧き水を手に入れて、夢見心地ということなんですね。そういうことがあります。

そしてもちろん当然のことですが、源流部です。ここに降った雨がそこから川になるわけです。泉から湧いたらそこから川で、それがずうっと流れていって下手のほうに大きな町があるという、そういう源流、まさに源流なんですね。そういう場所に住むのは、当然のことですが、生まれて初めてでしたので、非常にうきうきしました。まず蝶々がたくさんいるのにびっくりしました。さまざまな種類の鳥がキャンパスを飛び交いました。4月すぐですね。いろいろな白い蝶とか、いろいろな茶色い蝶とか、これは本当にすごかったです。そういう楽しさがある。

それから私が住んだ場所のすぐ裏には、それは夏狩というところですが、渓山荘という谷間の宿がありまして、そこに下りる崖のところにはリスが住んでいました。私の大好きなクルミの木が果樹園のように並んで生えていまして、その下に行きますと、いつでもリスがクルミをかじった跡を見ることができました。このリスがクルミをかじって二つに開けるという行動は学習の一種なんですけれども、すばらしい技です。ですから、それがどういう能力であるかということは生物学の大事なテーマでして、そういう現象、行為が毎日行われているというのは、すごいことだなあと思いまして、いったいリスは1年のうちのどのくらいの期間を松ぼっくりで過ごせるかとか、クルミで過ごせるかということを、さっそく観察しました。ほとんど一年中、じつは食べられているのだというようなことが、都留に住んでいますと自然に分かってくるというような町でした。

そういうことで、私はその楽しさに胸を躍らせたという新鮮な経験を持っています。私がまず注目したのは人間が住む場所、居住空間と自然の親しさというものが実現していること、今で言えば環境都市ということになるのですが、それがすでにあるということですね。ですからそこで暮らして生きて成長する人は、その環境都市の住人として独特であろうということが予測されます。しかしそういうことをどうやって見極めるかということになると、今のところそれを評価する方法はないと思いますけれど、でも見ればすぐ分かりますね。「これはすごい人だ」と言う人もたくさんおられました。そういうことで、私は都留の町というものに非常に新鮮な印象を持ったのです。

都留での最初の研究スタイル

そこで今日の話になるわけですが、私が大学に着任したときは、学長は大田先生でしたが、その前の前ぐらいの学長さんに下泉重吉さんという私も学生のときからよく名前を知っている動物生態学者がおられました。この方は東京教育大学の生理学の先生だと思うんですけれど、生理学か生態学の先生でおられてヤマネの研究で有名でした。

それで、その方のところに学生が、卒論でついていったことがあった。一年とか長くではなくて、非常に瞬間的な時間だったようです。その方のある情熱といいますか、迫力といいますか、三つ峠の上に登りまして、そこで、さっきのモモンガとヤマネの研究をしろというふうに言われたんだと思うんですね。それはなぜかと言うと、冬眠するからなんです。有名なのはもちろんヤマネでして、冬眠しますね。冬眠の生理学とか生態学を研究しろと言われたんだと思います。モモンガも実は冬眠するようなしないようなところがありまして、微妙なんです。それでたぶんテーマに選ばれた。とにかくフィールドの楽しさがあったのだと思うんです。それから毎年山へ登ってその二つ動物の巣箱をかけてそれを観察するという、日本で、たぶんその当時の着想としてそれ以上に進んだものはなかったと思います。つまり巣箱でそこに定着した動物を観察するという発想は非常に鋭いものが感じられます。私はそれを感じます。学生たちはそれをやっていました。

そこで私はさっそく学生たちと山に登りました。私もそれまでは山が大好きで、日本の山のほとんどは登っていますし、しかもそこで動物の調査を子どものときからしてきました。独特のやり方をしました。日本の山というのは小屋が多いんですね。ですから麓から全部泊まっていくんです。富士山ですと一合目から泊まっていきますと絶対に疲れないで遭難しないで頂上まで登れます。それで、その山小屋のそれぞれにどんなネズミが入っているかとか、そういうことを研究するんです。

例えば、各山小屋に入っているいろいろな種類のネズミがいるんですけれど、一種類だけ入っています。それはその付近の森で一番強いやつが入るということを私は発見しました。これはまだ発表も何もしていませんけれども、鋭い研究だと私は思っています。そういうものを受け入れるような学会があまりありません。ありませんけど、それはまったくその通りだろうと思います。その場所の森で一番強い、例えばアカネズミが下のほうの小屋に棲んでいます。八ヶ岳の頂上に行きますと、高山性のニイガタヤシネズミというのが棲んでいます。そういう名前を思い起こすだけでも、私はにこにこと笑ってしまうんですが、すばらしい、山小屋とそこに棲む動物の関係が見られる。そういうことで、その学生たちは巣箱で動物を研究する接点にするという、鋭い研究をされていました。

そこで私は非常に楽しんだんですが、それは私が東京にいて研究している自然の研究と同じスタンスではないかと思いました。ふだんは自然の中にいないで、研究するときだけ山の自然に出かけるというのに、私は非常に嫌気がさしていました。もともと動物たちが棲んでいるそのまっただ中で研究したいというのが私の夢でしたので、わざわざ三つ峠に登ってやるというのは鋭いけれども、「皆さん、地面の下界に下りて、そこに棲んでいる当たり前の動物を研究しましょう」と学生に提案しました。

ムササビと大木

それで、学生も何代かかかって、都留の近辺に棲む動物たちを地元の人に話を聞きながら研究するというスタイルに移していきました。それがたぶんフィールド・ミュージアムの発想の元になっています。みんなで自然を見ていきたい、親しんでいきたい。それからみんなが知っている自然についての知恵は決して学者

に劣らないものだということを、私はその当時感じていたわけです。

それで、下におりまして、あちこちと、例えばムササビの生息地を探したんですが、その当時ムササビの生息地を探せるような目のある動物学者はほとんどいなかったと思います。今日の話題ですが、自然は自然のものです。いろんなものが自然界にはあります。自然のものというのは、必ず偏在しているんですね。どこかには豊富にあるんですけど、それ以外のところにはない。自然のものの性質に応じて配分されています。ですから、その場所を見つければ、人間は自然を豊かに活用できる。そういうふうに自然は配置されているわけですね。そこに目をつけますと、ムササビが棲んでいそうな場所というものが分かるようになります。ここは怪しいぞとか、いそうだぞとかです。それは大事な最初の知恵なんです。

それでそういう知恵を持っている人は日本の動物学者にはほとんどいないので、それを鍛えるということが、例えば都留の町に住んだときに学生のしたらいいことというふうになります。それでムササビの場合は、神社に棲んでいました。今では有名ですが、今宮神社とか朝日馬場の石船神社とか、この近くでもあちこちにいます。

最初に見つけたのが、今宮神社のムササビでした。その当時、今の話のどんなところにいるかということは分かっていたんですが、どんな森だったらいるかということは、本当に一握りで、大木がこんもりと茂っている場所があったらまずムササビがいるという判断なんです。30メートル四方ぐらいでいいんですが、小さな神社の境内に大きな木がこんもりと茂っている。そうしたら、ここはムササビの棲み場所だというふうになりました。

それで、こういう認識はどういう一般化ができるかと言いますと、都留のこの谷間がかつては非常に大きな木に覆われた大森林であったと考えたらいいわけですね。ですけど、それを人間がみんな切ってしまって、いまでは神社の森にしか大木が残っていないということがすぐ考えられます。これは私が当時つくった絵本です。私はその大きな木に魅せられました。大きな木というのは今ではほとんどないわけですね。子どもたちに「大きな木、見たことある？」と言うと、木はみんな大きいですから、みんなは「大きな木、見たことあります」って言うんです。そうですよね。そのへんの杉の木を、私はつい「もやしみたいな木」って言ってしまうんです。でもこのくらい太いですよね。すらっとして、こんでまして、ひんまがったりするような木ですね。「もやしみたいな木」と言ってしまうのですが、子どもにとってはそれは大木です。ですから本当の大木を見たことがないと、みんな大きな木を見たことがあると思いますよね。その印象はとても大事だと思うんですけど、私たちの言う普通の大木はそれより遙かに大きな数百年を経たような木です。でも恐ろしいことに都留にはほとんど残ってないんですね。この認識は都留の方はそれほど持っていませんで、山奥に行けば大木はあると思ってるんです。ですからムササビは山奥にいると思っていました。当時私が来たころはそうでした。

しかし、山奥に行ったら、木は一本もない。大木らしいものは一つもないというのが今の都留の現状ですね。ですから、ムササビを見たかったら、大木のある神社に行ったらよろしいということになりました。こういうふうに大きな木がここにあります。これは都留で一番大きい木だと思います。今宮神社に1本だけ生えているんです。そこから下のほうで二つに分かれまして、こういうふうにウロとかホラとかいっている穴が開いていますけれど、そこからムササビがいま顔を

出して目が光っている。そういうふうにムササビと出会うわけですね。

で、私はなぜこの本を作ったかと言うと、大木に魅せられまして、毎日毎日この大木に会いに行きました。それで、こんな木が一本、大学のそのへんにあったらいいなあと思ったわけです。この木はムササビのアパートでして、ここに一つあって、こっちのほうに一つあって、こっちにあって、そこにもある。ずっとあって10個ぐらい巣があるんです。これだけで、どういうことが分かると思いますか。動物学的には大きな発見です。それまでムササビは縄張りがあって1匹1匹ばらばらに棲んでいるというふうにいわれていました。でも、ここでは明らかにそうじゃないんですね。10匹ぐらいが一緒に棲んでいるわけですね。ですからこれだけでもうすでに発見というわけですね。非常におもしろいことですが、しかし私はそれ以上にムササビを引きつける大木の力というものに魅了されました。

大木がすばらしいのはムササビが棲んでいるからすばらしいというのが私の考え方です。そんな力がある大木というのはすごい。ムササビが毎日毎日ここへ帰ってくる。森にダーッと出かけていきまして、夜帰ってこないんです。ですから、朝、お迎えに行くんです。当時は学生はみんな僕と一緒にムササビのお迎えをする日とかいって、本当に帰ってくるかとか、それは何時かとか、それを毎日毎日行って確かめました。そうすると、その大木がムササビを引きつける力というものをひしひしと感じます。

いったいそれではムササビは大木の何を見て、そんなに魅せられているのかということが、どうしても解きたい謎ですし、そんな価値があるんだったら、何百万円かけてもいいから、そこのへんに持ってきたいというあさましい考えを持つんですね。それが学者のだめなところで、これから話になるんですが、そういうのが普通の学者の研究スタイルです。自分の手元に引きつけて何かをすれば分かるだろうというあさましいことを考えるんですが、それは絶対に分からない。そういうふうにしたら自然は壊れるわけです。

だからあるスタンスが必要です。この木はどうしてもここになければいけない。そこで延々と営まれてきたムササビの生活というものを見ていかなければいけないということになるんです。そんなことを絵本にして出しました。それで読者からたくさん反響がありました。

その中をちょっと見ていただきたいんですが、この本はその大木の魅力を語っているんですけれど、そこで営まれるムササビの暮らしを描こうとしました。赤ちゃんムササビが生まれて、その木で毎年毎年何匹かのムササビの子どもが育っているよという物語です。これはそのウロの中、大木の幹の中の巣でお母さんと赤ちゃんムササビがいます。これは今から見ると絵がちょっと下手です。当時私はあまりよく知りませんで、動物画家のタナカさんという方といっしょに観察して、でもこの中は見えませんので、想像して描いたんです。赤ちゃんムササビがかなり育って、これは5月ぐらいの状態なんです。それで、うんちとおしっこをするときに、赤ちゃんはどこでもしたらいいというわけにはいきません。巣が汚れてしまいます。お母さんがなめてあげるんですね。肛門と尿道口の間の会陰部と言われている部分をなめてあげるんです。そうすると、赤ちゃんはおしっことうんちを一緒にするんです。そのことを書きました。

そうしたら、ある読者が私の文章を読んで安心しましたという感想を寄せてくれました。私の子はある悩みと言いますか、自分がおもらしをするとか、そういうことで、それはいけないことなんじゃないかとずうっと悩んでいた子だという

ふうに文章の様子から伺えました。それで自然界では、こういうふうにお母さんと赤ちゃんとの関係の中でそういう問題を見事に解決しているというのを読んで、ある感銘を覚えたのだろうと思います。私たちはそういうことを一人で悩んでいるけれど、そんな必要はないとか、ほっとしたとか、そういうふうに読んだと。これについては、もっと細かく言えばいろいろなことが言えるわけですね。

自然がわかるとは？

動物学というのは、例えば陰部に刺激が来ると、反射としておしっこをするんだとか、そういうつまらない研究があるわけなんです。すぐそういうことをするわけなんですね。それが答えであるという。だけど、この子はそうではなくて、そういうところから自分と共感するような自分の生き方というか、精神の解放というか、そういうことを感じて私に伝えてくれたわけです。私は理屈のことはそんなに大事だと思いませんので、わざと書かなかったわけです。そういうことがあって、こういうことが分かるのは子どもだなあと思いました。その文章を読んで大人は何を感じるか、子どもが何を感じるかということがあります。それを魂のレベルで反応できるのは子どもたちの世界だなあと思ったわけです。

ですから、私が言いたいのは、自然が持つ意味です。人間に対して、人間の暮らしとか、考え方に対して人間が自然から受け取るメッセージというものをこのことから受け取りました。私が今日お伝えするのは、そういう意味もあるということです。ですから私のこれからの話を聞いていただくための一つのヒントということなんです。

それで私がこの大学に着任したときの私の生物学に対する考えはどういうものであったかということ、これは理屈としてではなくて、皆さんにお伝えしておかないといけない。たぶん私がいま考えていることとずいぶん違います。私はどんどんそこから変わっていきました。今はフィールド・ミュージアムというものを考えているわけですので、それをお伝えしておきたいと思います。

私の学生のころというのは1960年代でして、現在の学生とたぶんそんなに変わらないと思いますが、動物学の「近代化」の最初の時期だったろうと思います。はっきり言えるのは、DNA理論が入ってきたことです。それまでの発生学とかいろいろな観察に基づく生物学はDNAで大衝撃を受けまして、当時の偉い先生はみんなひっくり返るぐらいの衝撃を受けました。

例えば、東京大学の三崎の臨海実験場に行きますと、ウニの卵の観察を毎日毎日している偉い先生がおられます。でもその観察はDNAが入ってくると、ほとんど根底から崩れる。そういうような衝撃がありました。無駄だったというぐらいの衝撃がありました。ですから、私もゼミではこのDNAの本を一生懸命読みました。

それから、今日のエコロジー、生態学で言えば、私の時代はエルトンというとても偉い学者がいました。今でも動物生態学と言ったら、ちょっと勉強すると真っ先に出てくる方です。それから植物生態学ではクレメンツという方がいまして、この方もすぐ出てきます。この二人が書いた1920年代の教科書が元祖生態学ということになっていまして、大学に入って「生態学を勉強したいんですけど」と先生に言うと、ただちにこの方たちの書いたどれかの本を示して、みんなで読みな

さいと言われる。そういう世界でした。ですから、そういう非常に近代的な考え方で始めました。

しかしいまお話ししたような、フィールド・ミュージアムの運動などで私たちが親しく感じるのはそれよりもっと古い時代の方たちのナチュラリストとか、ナチュラルヒストリーと呼ばれるようなもので、日本語では博物学と訳されていますが、その時代に自然と親しんだ人たちからのメッセージなんです。つまり私が受けた大学教育ではそのメッセージはまったく届いていませんでした。それ以後の洗練された生物学の時代でした。そういうものと私たちが日常やるものとどう違うかと言うと、まったく違うんですね。そのことをお伝えしたいと思います。

エマソンの自然観

今日は何人かの偉人、古典的な標準をつくってきた歴史上の人物の話がたくさん出てきます。まずアメリカの1800年代最初のころの哲学者、自然研究者にエマソンという方がいます。たいへんロマンチックな方です。もちろんさっきの生態学より遙か前、100年前です。ここに100年前と書いてありますが、それとはちょっと違います。その方がいまの動物学者、生物学者は絶対に言わないようなことを書いています。ちょっと読んでみたいと思います。2ページの上のほうです。

「もしそれらの星たちを――夜空の星ですね――1000年に一度、一夜だけ見ることができるのだとしたら、人々はたちまち神をあがめ信じて、その夜ながめた神の町の美しさの記憶を幾世代にもわたり語り伝えることでしょう」

こう書いているんですね。これは銀河を見たときの美しさですが、それに続いて、ちょっと飛ばして書いてあるんですが、「星はいつもそこにあるのに、人間の手に届かないある種の存在に気づかせてくれます。私たちは自然に心を開こうとすると、どんな自然にも似た性格があるという印象を持ちます」と書いているんですね。これはいまでは有名になっている文章ですね。レイチェル・カーソンという方がいます。農薬、公害の問題で『沈黙の春』という有名な本を書かれました。1960年ごろの方ですが、その方がこういうことをやはりエマソンから聞いて、美しい文章を書きました。そういう意味で有名な文章です。星はとてもきれいですよね。それでみんな見てほれぼれとするんですが、星は分かろうとすると手が届かないし、何だろうと、非常に神々しいものを私たちに伝えているわけですね。それは分かろうとしても分からない。だけど何か伝えてくるものがある。非常にそれは純粋なものであるように感じられます。

それでこのエマソンがここでこういうものを見たらいいよと言っているのは、本当に偉大なものを見ることの大切さを言っているわけですね。非常に偉大なものがあると言っているわけです。それで、人間の手が届かないある種の存在に気づかせてくれるというのは、たぶんエマソンは牧師さんでもありましたので、神の存在ということでもあるでしょうけれど、とにかくそういう偉大なものを感じさせるものがあると言っています。

でも、彼が本当に言いたいのは、そのあとの、「私たちが自然に心を開こうとすると、どんな自然にも似た性格があるという印象を持ちます」というのは、星を見るのと同じように、隣の人のことも偉大に感じるけれども分からないし、小さな動物にもそういう謎を感じるというふうに言っているわけです。

私はこの文章を読んだときに、すぐ思い出したのは蝶々のことです。これから5月になるとツツジの花にアゲハチョウがたくさんやってきます。非常に美しくて見事で、昆虫が好きな人はすぐ採っちゃうんですけれども、採ってがっかりするんですね。美しいものが消えたと思います。やっぱりツツジの花に来ているその何か美しさをつかみたいのに、採って標本にしてしまったら、それは消えます。ですから近づきたいけど、近づけないものがあるということはそういうことで、その偉大なものは消えてしまうと言っているわけです。

生きものの暮らしの科学：生態学

そうしますと、研究というのはみんなそういうものだということもただちに分かると思います。何か知りたいと思ってそれを手元にたぐり寄せると、大事なものは消えるというわけですね。DNAなんていうのはその最たるものでして、有無を言わせぬ強さを持っています。DNAを調べると、最近では犯人が特定できるというわけですから、これはやらないわけにはいきません。だけど、私が学生のころにとてもがっかりしたのは、生き物は表面が美しいということであるのに、DNAはミキサーにかけて、生き物を液体に変えてしまうということなんです。そしてそれを分析する。

生き物の自然の一番の特徴は、表面が美しいということです。内蔵、皮をはいだら、それは豚も人間も変わりません。中は同じです。だけど表面を非常に美しく取り繕っているということですよね。蝶々でも鳥でも花でも何でも、表面が私たちにあるメッセージを発しているのに、それを一緒くたにしてホモジナイザーにかけてどうするのか。それで分かってくるということが、もちろんそれに還元されて表面の美しさはこういう意味であるということがDNAから分析されるなら、それはすばらしいと思いますけれど、そういうことはあり得ないですね。それなのに、どうして生物学はそういう方向にいくのか。物理学がそっちの方向に行くのはまったくかまいませんが、私は大きな疑問を感じまして、それから生態学にも同じようなことを感じました。

生態学は生物の暮らしの科学という意味です。エコというのは暮らしですね。暮らしの科学という意味ですから、ムササビが夜、毎日出かけていって何をしているのか、それはどういう意味があるのか。さっき言ったようなことについて暮らしのレベルで考えていくことなんですけれど、動物生態学のほうはまずその環境と生き物との関係の学問であるというふうに定義しまして——これは植物生態学も同じですが——エルトンは私たちの見えている世界ではなくて、量や数に換算したことを研究する。やればやるほどおもしろくなくなるなというのが私の印象でした。非常に強い力を持っています。物質循環のバランスの問題とか、大事なんです。現実の世界に対して強い力は持っています。ですけれども、暮らしの生物学とは違うということを感じました。それについては、あまりそのことばかりでは退屈ですので、ヒントにとどめまして先に進みたいと思います。

そのまま受け入れることの大切さ

それで、ムササビのお話に続きます。こういうエマソンの言葉、私たちが知りたいものというのは、知ろうとすると遠ざかってしまうように見えるという問題、そこには大きなものが感じられるけれども、それは簡単には捕まえることができない。そういう問題はさっきの『むささびのおやこ』の読者は、読んで安心しましたというふうに捕まえたわけです。ですから捕まえ方があるわけですね。何か普通の常識で知ろうとして、証拠が必要だというふうにやりますと、遠くへ逃げますけど、でもそのまま受け入れればそれは私たちの心にぴったりと響いて分かるということがあるわけです。そういう読者の純粋な心、自分の心を上手に操る子どもの心というものが感じられるということです。手が届かないものであるのに、それに手をそえて共感できるような力がある。これが私たちが自然に接する大事な姿勢ではないかということが考えられます。

要するに、何かやろうとすると、大きなことも小さなこともいろいろこだわりを刺激して、人の心を揺するということになるわけですね。学問もすんなりとは私たちのことを受け入れてくれませんし答えてくれない。現実のいろいろなものもそう簡単には私たちに開いてくれないけれども、それをあっさりと分かっていくことができるという姿勢もある。そういうことになります。そこでたくさんの事件を私は経験したということになります。

石船神社のムササビ

1のところですが、「都留の町は私を揺すりました」というわけです。非常に印象的な事件が起こりました。私たちは下界に下りて、神社のムササビとか、桑山公園に棲んでいるモグラの研究とかいろいろなことをしまして、楽しんでいったんですが、あるとき突然こういう事件が起こりました。

都留市の朝日馬場というところにある石船神社の境内なんですが、市の消防自動車が出動しまして、この木にあるムササビの巣に向かって放水してムササビを退治するという事件がある日、突然起こりました。

これは本当に仰天したんですが、1982年12月23日のことで、これは朝日新聞の報道です。私たちはまったく知りませんでした。どうしてそんなことになったかと言いますと、石船神社のムササビは私たちが観察に行って、そこに生息していることに気が付いたわけです。地元の人はよく知りませんで、私たちが調べているうちにだいたい石船神社の木が変な姿をしているということになりました。ムササビが棲むということとは無関係に石船神社の森は変だということがありました。

そのことと関連して消防車の出動になったわけなんです。これは石船神社の当時のケヤキなんですが、一見して奇っ怪な感じがしますね。この太枝、人間の腕かそれよりちょっと太いぐらいの太枝からいきなり細い小枝が出て、そこに葉っぱがついています。それで太枝の先は枯れて落ちているんですね。なんでこんなことになってしまったのか。枝というのは普通、だんだん細くなってその先端に葉っぱがつくのに、途中の太さの枝がなくて、太枝からいきなり小枝が出るとい

うふうに、すべてのケヤキがなっていました。

これはあとで考えれば当たり前なんです。1ヘクタールもないような森にムササビが7、8頭生きていました。明らかに個体数が多い。人口過剰なんですね。ですから木の皮をかじるということになりました。木の皮をかじりまして、その下の甘皮のおいしいところを食べるんですね。そうしますと、木は枯れますので、そこから先は落ちてしまいます。木はしかたがないので、その本のほうから枝を出しまして、こういう樹形になるんですね。これは地元に人には謎だったんです。いったいどうしてこんなになってしまうのだろうかと悩んでおられました。私たちが観察して、私たちも非常におかしなことだなと疑問に思いました。実際に観察してムササビが木の皮をかじっているということを発見しました。

これもなかなか努力のいる作業です。しかしこのかたちになってしまうということと結びつけるのもひらめきが必要でして、いろいろなひらめきを重ねて、ムササビがやっているからだということになりました。それを地元の人と雑談をしているうちに、ムササビが悪いということになったわけなんですね。それで退治ということになりました。それで私たちは非常に責任を感じました。もともとはムクドリがかじっているからではないかといわれていたんです。それを私たちが犯人を特定したことになりまして、市がただちに出動した。そのすばやさに私たちはあっけに取られたんですが、本当にびっくりしました。

さらにその先に原因があるわけですね。では、どうしてここだけそんなことをするのか。よく調べてみると、マルダイ産業という会社があるんですが、その会社がこの神社に隣接している川岸の土木工事をやりまして、そこに生えていた木をみんな切ってしまったということが分かりました。そうしますと、ムササビはその木を伝わって森に出かけていくことができません。近くの山の森に出かけていっていたんですが、それが分断された。そうしますと、その事情全体を含めてもムササビの責任ですかということを私たちは問わなければいけないというふうになりました。そうしないと、私の正義がすたれるというわけです。そういうふうに、私たちは都留の町で人と自然との営みから刺激をいろいろ受けたということです。それは無数にあるわけですけれど、ムササビについて言えばそういうことでした。

ものを見るということ

そこで私たちは、そういった自然界で起こっていることを皆さんに見てもらって考えてもらうということで観察会などをどんどん開くようになったんです。ですから私たちの観察会というのはただ見るだけではありません。観察会というのはすぐ堕落するものなんですね。鳥の愛好者はたくさんいますが、そういう方たちは例えば、見た鳥の種類の数を誇る。姿を見た。見ればいい。たちまちのうちに恐ろしいほどの堕落をします。私はそういう話を聞くと、いったい野鳥の会というのは何をしているのかというふうに思うわけですね。姿を見れば観察会なのか。見たいことは何かということですね。そこに姿がクリアに見えているから見たことになるのかという問題がすぐ起こるわけなんです。

ですからムササビの観察会をやっても、ムササビ見てうれしい、大喝采が起こって、楽しく散会しましたというのはいいんですけれど、しかしそれでムササビが

こういう事態になっているということに目をつぶるということではおかしいというのは、単純に見えてくる理屈ですよね。ですからものを見るということは、そのものがそこにいることができる条件とか、この神社はたしかにいい具合に木が配置されていて山と行き来できるようないいかたちの条件をつくっているということを見るのが一番肝心です。それは何もムササビの姿を見なくたって見えるわけです。そのことを見るというのが本来の見るということになりますね。

ですからそこにエマソンのいう言い方ですね。「星はいつもそこにあるのに、人間の手が届かないある種の存在に気づかせてくれます。」それを成立させている条件というのはいったい何なのか。そもそもそのことを始めたのは何なのかというのを見たくなるのですが、そう簡単には見えないということを言っているわけですね。

フィールド・ミュージアムとは

そういうことで、私たちはこだわりのある観察、ものの見方というものを伝えていきたいと思いまして、フィールド・ミュージアムというものを考えたというわけです。このフィールド・ミュージアムという言葉については、大いに反省していかなければいけないんです。これからGPでいろいろな実践を積み重ねるわけですが、フィールド・ミュージアムとは何でしょうということになりまして、そこで問われていく。そういう問題です。そこで今言ったようなこだわりが私たちにはあったということです。

ただこの名前については、私たちは野生動物を本来の棲み場所で見る博物館という新しさを伝えるために、今までの博物館とは違うということで、カタカナ名を付けたのですが、当時学長をされていた大田先生は、別個に都留自然博物館構想を発表されておりまして、私たちは非常に刺激を受けました。

それで、このことについて交流したんですが、私はなんと当時大田先生の言われる自然博物館の自然の意味の深さに気が付かなかった。気が付いたのはずっと後のことです、とごまかしましたが、つい何カ月か前ぐらいです。ずうっと分かりませんでした。これはもちろん抽象的な話で、分かりにくい話をしてもしようがないんですけれども、「自然」というのはいろいろな意味を持ちますね。そこにある山も自然ですし、私たちの体も自然です。私たちは自分の体で腸が何をしてくれているのかというのが分かりません。私の意識とは別の法則が働いて、見事に制御してくれていて、私はここに立っているわけです。そういうことも「自然」ですね。

それから、社会だって自然なあり方に反するのではないかということは、よく言われることです。非常に幅広い意味内容を持っていまして、フィールド・ミュージアムというのはそこまでは含んでいないわけですね。そういうことは理屈では当時だって分かりますけれど、そのことの大切さというのはなかなか分かりませんでした。結局、その旅をしなければならなかったというのが、私の二十数年のことです。そういったことを今日はお話ししてきたわけです。

地域の偉人との出会い

そこでまた別の角度から自然というのは何かということを考えてみたいと思います。都留に来て衝撃を受けたことのもう一つは、自然界が非常に多様で、いろいろな刺激を送ってくれるということ、いろんな事件があるということ。もう一つは、都留では幾人かの非常に高潔な方がおられました。高く美しい人というふうに言うと、都留のどこにそんな人がいるかと思う人もおられるかもしれませんが、私はそういうふうに感じた人と何人も知り合いました。

これは森と土地が生んだ魅力のある人で、コモンセンスというのでしょうか、人間としてとてもいい状態、えらい状態、なかなか到達できない感じを受けました。これについては、私がこれから注目していくのですが、ヘンリー・ソローという方がおります。この方はさっき紹介したエマソンと一緒にアメリカのコンコードという町を見た方です。その方が見事に私の印象と同じことを書かれていますので、紹介しておきたいと思います。2ページの一番下です。

農地が生んだ紳士である農民の一人で、その方は、教授のガウンの代わりに教会に出かけるおめかしのフロックコートのままやってきて、納屋の前庭から堆肥を運びだすのと同じ自然な仕草で、教会や政治の世界から学ぶべきものを引き出してみせてくれました。そういう方をソローはお友達としてコンコードの町でおつきあいしていた。そういう方が何人かいたということを言っているんです。

私は、都留に来まして、ムササビの保護運動をやりますと、退治したい方たちと論争になったり、ときにはすごいことがありました。石船神社で観察会を開きますと、お祭りよりたくさんの人が集まりまして、境内いっぱいになりました。おじいちゃん、おばあちゃんから子どもまで部落総出で石船神社は満杯になりました。おばあちゃんはゴザを抱えてきて、いい場所にダーッと開きまして、バーッと座って、ムササビが出てくるのを待ちました。私たちが「いま大木から顔を出しました。大木との関係が分かりますね」とか言ってやるんですね。「顔をだすところ、そういうふうに大事ですよ」などと言ってやっていくわけです。「大木はすごいですね」とかやるんです。そうすると、大木からするっと抜けだして、上に上がっていってパーッと滑空するんですね。するとみんなワーッと言って感動します。「すごいですね」とか言ってよけいな解説をするわけです。「ムササビは滑空できる。地面に下りなくても向こうの木に行けます」とか言います。そんなことは言わなくても分かりきっているのに、やりまして、「なんとすばらしい動物でしょう」みたいな話になるんです。それで次に木の上で食事をします。見事に枝をたぐり寄せる。枝を手でたぐり寄せるんです。びっくりしますね。「これもすばらしいですね」としか言わないんですけれど、すごいという。「この3点セットが見られたら観察会は成功」とか言ってお開きになるんです。そうするとおばあちゃんは「もうこれで思い残すことはない」とか言って帰っていくわけなんです。すごいことだなと思います。

ところがさらにすごいことが起こります。観察会をそうしてやっていると、外側をムササビ退治派が取り囲みまして、僕に野次が飛ぶわけなんです。「ムササビなんて殺しちまえ」とか、そういう観察会なんです。だから観察会というのはちゃんとやろうと思うと社会と非常に強い軋轢（あつれき）を生みまして、大変勇気がいる作業になります。それを100回続けるとか、やっていかなければなら

ない。

地元の人と何回も談判をするんですが、いまやらないでくれ、いま退治してくれるなとか、一年間猶予をくれとかいろいろなことをやるんです。そうすると向こうのほうのちょっとはげたような、すごい長老みたいな人が救世主のごとく「おお、分かった」とか言うんですね。そういう方と友達になります。それまではけんかしているんですけれど、ときどきびっくりします。そういう方たちはいまソローが書いたような人たちでした。それからずっと懇意にしています。私は土地のことには非常に不誠実でして、土地の方たちのような誠実なおつきあいはいっさいできないんですが、それでもつきあってくださいまして、今でもおつきあいしています。そういうことで、土地が産み出す魅力的な人間というものに、一方で惹かれたということです。

自然を見る・知るということ

2のところですが、結局、自然とは何かということで、これはいくら議論しても始まらないと思います。私ももちろん自然の定義はいろいろ科学論とかでも勉強しますけれど、でも一番衝撃的だったのは当たり前の話のことで、階層構造とかそんなことでなくて、エマソンは「自分の魂を除くすべてを自然という」というふうに『自然』の中に書いています。つまり自分の体も、人間の社会も世界の全体も自然であってほしいとエマソンは望んでいる。私はこの考えを何回も読んでいますけれど、最近になってやはりこれはみんなで自然について議論するときに自然は自然であってほしいとか、社会はもっと自然であってほしいというような、みんなで同じ言葉で話せることは大事だなと思いました。

そういうことはここで詰めていこうと考えて言っているわけではありません。エマソンの自然にしても、翻訳が悪くて、日本語ではそう簡単に読めないんです。ですから、私はここに私自身の訳でほとんどはお伝えしていますけれど、それはとても分かりやすいことが書かれています。でも日本語訳ではよく分からない。難しくて分からないという訳になっていますので、皆さんにお伝えして、これからのGPの中で一緒に議論していきたいというのが私の考えです。

そこで、先ほどのムササビのことになりますが、3番のところは、私たちが見た事実というものについて、それは曲げられない。というのは、だれもが自分が見た事実、現行犯を捕まえることはおまわりさんでなくてもできます。いま僕がこれを盗んでいったら、捕まえていいわけです。確かに見たという事実、これはある力を持っているわけですね。ですから、先ほどのような石船神社での運動になりました。

それでその全体を分かったうえで、どういうふうに考えていこうかという話になっていくわけですね。そういうふうに考えていきます。そこで自然を見る楽しみというのは、自分自身が直接わかるということだというのが一つあげられます。いろいろな参考書とか難しい本を読んで、大学の先生の話を講義で2時間も聴かないと分からない事実というのはおかしい。すぐ分かる。それがほんものの人間のものの知り方ではないか。そういうことですよね。私たちが現行犯逮捕してもいいということは、そんなややこしく教わらなくても分かる。そういう事実に世界が満ちているということを、自然は教えてくれているわけですから、私たちは

自分で見たらいいだろう。そういうことになります。それがエマソンが言っている今日のテーマなんです。

4番目のところですが、エマソンは『自然』の第二版の冒頭に掲げた自分の作の詩ですね。これは第二版でわざわざ加えました。人間は宇宙のあらゆるものと同じように一つのサイクル、循環系であると言います。そうですね。私たちは自分自身の体をそうやって運転しています。循環系がうまくいくように、ものを食べたり水を飲んだりしています。その私たちがある能力をもっている。これはシェイクスピアの文章の引用なんですが、「バラはいろいろな国でいろいろな名前で呼ばれていて」、さっきフランス語でどうかとか司会の方にちょっと議論をしていただきました。でもいろいろ呼ばれていても、甘い香りに変わりはないというのは、別に甘い香りだけが問題なのではなくて、私ですら香りなんてほとんど気にしないんですが、「ここにバラがあるというのが分かる」というわけですね。

一目見たらバラであるということは分かって、それは別に図鑑と照らし合わせなくても分かるようになるよと言っているわけです。そのことの意味ですね。これはもちろんシェイクスピアですから、深いそれなりの物語の中での意味があります。これはロミオとジュリエットの中でジュリエットが「私はバラよ」と言っているんですね。いろいろな家柄とかいろいろあるけれど、自分を見て、と言っているわけです。自分の価値を見てくださいと言っているわけですね。ですからバラもそういうふうに言っています。美しく咲いて自分の価値を見てくださいと誰に言っているかと言うと、たぶん虫とか鳥に向かって言っているわけですね。それを人間は受け取って、ある意味を感じとる。そのときとにかく「バラというのは分かる」と言っているわけです。これに私はすごく感動します。これはとても大事なことを言っているわけです。世界は1個のバラで成っているわけではないということも言っているわけです。バラはバラ、あちこちにある。この世界には、似ていない、たった1個しかないものはないんですね。何でも種としてある。物質種、アルコールとか水とか物質の種、ただの物質の種もありますし、モグラとかサルとか生きた種もあります。生物種と物質種に分かれます。物質種は10万種ぐらいしかないらしいですが、生物種は1500万種とか4500万とかいろいろ言われています。まだ全部分かっていません。人間が見ればその全部を識別できるという見通しが語られています。

それで世界は種で認識される。種である。私たちはその種がどこにいるかということを探して資源を探すわけです。金がどこに埋蔵されているか。石炭はどこか、石油はどこか。種というのは必ずバラバラに均一に地球上にあるのではなくて、集中的にある。ですからムササビという動物は日本に集中しているわけです。それで北海道にはいません。ですから北海道は日本ではないと言えるわけです。アイヌの人たちのものだとかです。私はそういうふうに思います。

そういうふうに切れているわけです。必ず種というものはある場所にある。砂でさえそうです。水に流されてきてほどよい粒になってある場所に堆積します。もっと粗いものはこちらにあって、もっと細かいものはこっちにあって、土はこっちのほうに堆積するというふうに、もの自体の性質によって世界にばらまかれている。ですから人間はバラを探すんだったら、バラの棲み場所をさがしなさいとも言っているわけです。どういう木を探すんだったら、どこに行きなさいとか、それは個人個人がすぐ分かると言っているわけです。

さっきムササビだったらどこにいるかというのは、そういうムササビの種とし

ての性質を私たちは把握すれば、いつでもムササビと出会えるような豊かな世界を自分で構築できるという、そういう意味です。

積極的に自然と向かい合うことの大切さ

そうしますと、人間は、私たちはすぐに都留の山に出かけて、自分の好みのものはどこにあるか、それといつも出会いに行くという、そういうような巡礼の旅というか、尊いものと出会うような旅ができるというふうになります。そこでソローという人は自分が住んでいるコンコードの町を毎日巡礼者として巡り歩くということをやりました。私はめったには行かない。みんなは私を怠け者だと言うけれど、私は巡礼の旅をしているという、そういう生き方をしたんですね。

その前提は、種は均等に分散しているのではなくて、注意深い人にはすぐに自分の在処を知らせてくれるというメッセージを発しているというわけですね。それが私がさっき言った生き物は表面を飾っているのであって、それをDNAのようにホモジナイザーでぐちゃぐちゃにしてミルクのようにしてはいけない。その接近の仕方ですね。ミルクのようにしてもいいんですけれども、それはその人にお任せして、私たちは、別の接近の仕方をする。世界に富はどういうふうに分散されているかということを巡り歩く巡礼の旅をすればいい。つまり毎日毎日散歩に出かけようというだけのことなんですけれど、それをソローは1日の半分はしなければいけないと最初に決めました。大学を卒業するころに決意しまして、ハーバード大学の卒業式でその決意を語るんですね。映画で見ますと優等生が何人かいるのですが、ソローは演壇に立ちまして、教授たちを前にして、自分はこれからこうやって生きるよということをやるんです。ソローはそういうふうに言いました。自分は毎日少なくとも1週間のうちの1日はしようがないから働くけれど、人々とは逆に、あとの日は自分を楽しませるために暮らす。そのための生活設計を立てていきますと宣言したのです。

それはそういうふうに地球の富と出会って、自分の心をいつも元気にしておく。楽しくして、自分は死んだときに、「何もできなかったなあ」思わない。偉いことをするためじゃなくて、自分を楽しませなかったなあと思わないようにしたいというふうにしました。そのときにテーマになるのは多様な自然です。物との出会い。物は必ず種のかたちを取って存在するので、人が出会うものは狭い意味でのいわゆる自然ということになるのだということをソローは言いました。

そんなようなことを私はこの20年ぐらいぶつぶつと考えまして、それで、フィールド・ミュージアムというものがどういうふうにあったらいいかということをずっと考えてきました。私が出会ったのはそういう二つの方向からでした。まず自然との出会いです。楽しい出会いがたくさんあった。それともう一つは人々との出会いです。自然によって育てられた人。純粋な自然という意味ではありません。田舎の暮らしとかいろいろな暮らしがあって、そこでうまく育ってきた人たちとか、その人たちが書いた書物との出会いというふうにやってきたわけです。そういうことがこのあとの10、11、12です。

自然に育てられたマウンテンマンというのがアメリカ西部にはたくさんいまして、これもすばらしい魅力のある人たちでした。例えば、12のマウンテンマンのところに書きましたが、びっくりするようなことが書かれています。クマのこと

です。夫がクマを殺してしまったのですが、そのクマの巣を見たら、子どもがいました。だんなさんがクマのお母さんを殺してしまって後で洞穴の中に小熊がいることが分かったのです。殺してしまった人の奥さんはちょうど赤ちゃんを育てていたので、自分が育てますと言って、自分の赤ちゃんといっしょにクマを育ててしまった。そういう人がいるんです。アメリカ西部の話です。シートンは非常にそれに感銘しました。そういうふうに自分がしなければいけないとか思ったということがただごとではないということです。自然からのメッセージに対してそういうふうに応えた人がいるというわけです。いろんな人の経験から、私は積極的にその自然と対するということの大事さをだんだん感じるようになりました。

そして積極的に自然に向かうということですね。いま私はこのように都留の町に住んでいても、かえってそういうことをしなくなっている。これはどういうことかと言いますと、自分だけいい場所にいたいという思いが非常に強まりまして、安全な家の中に入ったら最後、そこから出なくなってしまったという、とんでもないことが起こっているわけです。非常に退行的な現象が起こっているわけです。それに対してメッセージを発してくれるのがヘンリー・ソローの話で、それを13番に書きました。

エマソンが勧めていますね。人が森に行って、星を見たらいかがですかと。これはいま学生でもなかなかできませんね。すぐそこの森に入ってアカネズミを見ようとすると恐怖ですくんで大変だという話です。ですから夜の森と仲良くなるというだけでも大変ですが、そこで一人で住んでいたらどうかというようなこと。これはそこでそうするということも大事ですが、それ以上に積極的に自然に対してみたらどうかということを言っています。

そういうことで、自分で自然と触れる機会をつくっていくということですね。私もやってみました。どういうことかと言いますと、非常におもしろいことがある時ありました。山の中に入って小屋を建てて暮らすということももちろんやってみました。そういう機会はいろいろあるということを最後にお伝えしたいと思います。

ムササビの赤ちゃんを育てる

あるとき、自然が届けられたというか、ムササビの赤ちゃんが届けられました。これですね。私の手のひらの上で眠っています。山小屋に住むというのと同じことで、自然とまるごとつきあうということになりますと、赤ちゃんなんかが届けられることもある。これは大変なことです。私たちの大学では毎年ツバメの雛が落ちまして、届けられます。そうすると、これはそれだけで授業は全部出ないとか、そういうことですね。一大事業になるわけです。そのことは分かれば分かるほど、そうしなければいけないと思うようになります。

私のところにも３月27日に届けられました。教授会とかいろいろありまして、学生に対してただちに宣言をしたんです。「私はこれからこの子を絶対に病気にさせないで大人にして、しかも野生のムササビと同じようにして放すのだから、会議は出られない」と。「それは大事なことです」と言ったんです。それから「本当に育ててみせるから」。たいてい病気になるんです。こんな小さい子でしたら、まず病気になって下痢をします。「下痢にも絶対させない」と。私は秘訣を

つかんだ。それはお話ししたことからの帰結なんですが、仲良くするには絶対目を離してはいけないという、それだけのことです。この子を、実はここに袋があるんですが、小さなポケットのような袋を作りまして、手のひらにのせておきます。ミルクを飲ませてあげると、幸せになって手のひらで眠ります。ここをくぼませてあげることが大事なんですけれど、こうやっておくとすうっと眠ってくれます。

これは本当にダイヤモンドどころの騒ぎではなく大事なもの、だと思わされます。それがいまこれで、眠ったところです。それからさっきのおしっこです。ここのところ、陰部をこすってあげると、とっても幸せな気分になっておしっこをしてすうっと眠くなるんです。いかにもそういう感じでしょう。

この状態を絶対に保障しないといけないんです。そうしないと必ず、まず下痢します。インターネットを見ますと、その原因はミルクの濃度であると書いてありますが、それはまったくの嘘です。ミルクなんてどうでもいいんです。絶対目を離さないで、その子が起き出そうとしていたら、起きたいんだなと思う。おなかが空いてそうだなと思ったらミルクをあげる。ミルクだけでは足りないのではないかと思ったらイチゴをやってみるとかです。お母さんはあげないと思っても、なんでもやってみるんです。そうすると、ちゃんと育ちます。これはだれも知らないですね。動物園の飼育係も知りません。勤務時間があるので、必ず夜は放しておいておくんです。それは絶対だめです。獣医さんもそうです。獣医さんも、犬でも、ホテルで預かりますというけれど、そこに置いてあるだけなんです。絶対に病気になります。そんなことは分かり切ったことですよね。

自然は厳しく優しい

そういうことの結論に達する、あるいはそういう責任を受けるということに自分を決意させるところまでなかなかいけないんです。それはちゃんとやらなければ無理だということは、どんな世界にもあるんですけれど、自然は厳しい。厳しくやさしいんですね。とても優しい。私たちに対してすばらしいメッセージ、とてもいい感じのメッセージを話してくれる。ジェントルというのですが、優しいです。

だけど、奥が深い。ワイズ、ものすごく賢くて、複雑な要求を私たちにとってきます。それには全部理由があります。だからそれに全部応えていかないとおかしくなる。そして厳しいというのがよく言われることです。まさにその通りで、そこからはずれたら絶対に厳しい判断がくだされます。死ぬんです。私たち自身が事故に遭ったり、自然からはいろいろなことを受けますけれど、そういうふうに必ずなるわけです。逆に言えば、私たちはちゃんとやれば、どんな素人でもできます。獣医の教育なんかいっさい無駄です。まったく役に立ちません。そういうことに私は気づいたということです。

そういうような当たり前の認識に到達するのに時間がかかるということでした。これは昔の人はちゃんとしてきたことです。妙好人とかいう人がいて、とても自然に対して優しくて、牛に話しかけて作業をいっしょにしたという人です。それは当たり前のことです。そういうことに私は気が付いてきました。分かってきたことはこういうことになります。その前に15のところで、それを要約すればこう

いうことになります。

エマソンの言葉ですが、「自然の偉大さに思いをはせるなら、私たちは直ちに一つの新しい、向かわなければならない事実に気が付きます。自然に取り組むのは生涯を要する訓練ということになります。私たちはあせる必要はまったくなくて、自然とつきあっていくのは生涯にわたって楽しんでいけばいい。そうするといろいろなことを教えてくれるし、尽くせぬものがあります」と言っています。

それで、それは終わりがありません。こうしてコモンセンスが作られていきます。やっかいなこと、面倒、ジレンマの絶え間ない連続、ふいに塀に打ち勝ち、科学に――訳がこなれませんが――すべては実際的な手をつくる。実際的な当たり前のことをどうしたらいいかということであると。どれほど良い考えも実行しなれば夢と同じというやつですね。

私はものすごくものぐさなんですが、一応、私の信条はムササビや庭の大事な草とかについては、オッと思ってそのときにしなければ絶対にダメというふうに考えまして、非常に忙しく暮らしているんです。見ていてしてあげなければいけないなあと思うことがあったら、みんなしてあげるというようなことで、人間は育っていくのだろうということです。

以上、いろいろお話ししましたが、自然というのは要するに、何となく観察会で自分の知識を広げればいいというようなものとは違って、そういうふうに人間的な価値があるものだということから始めなければいけない。それは学問はあまり関係ない。むしろ邪魔になるということだと思います。私たちの大学は非常にその邪魔になることが多いです。

そういうものだと思います。それは学問をしている人は忙しいからです。よけいなことを言うなということになります。ですから、こうやってみんなで話せる貴重な時をもって、そこで交流していくことが大事であるということになります。フィールド・ミュージアムという名前は必ずしも必要なわけではなくて、自然の良さについて語り合う。それは自分の体の自然もあるし、食育といったようなこともあります。いろんなこと、自然であったらいいなということについて、語り合う広場にしていけばいいのではないかというのが私の考えていることです。

今日は司会の方からきつくディスカッションの時間をつくるようにと言われております。それなのに、私がのらりくらりと話しまして、申し訳ありません。何かちょっとだけありましたらということで、どうもありがとうございました。(拍手)

――――――以下、質疑応答――――――

司　会： 楽しいお話を本当にありがとうございます。せっかくですから一つ二つ、質疑応答の時間をとりたいと思います。皆様のなかから聞いてみたいこと。

参加者： はい。

司　会： はい、お願いします。

参加者： 結局、先生、その子は大きくなりましたか。

今　泉： 今日は映像でもたくさん見てもらおうと思っていたんですが、私はこの子と森の散歩をしました。この子はチビチャンというんですが、チビチャンは木の上をスッスッスと行きまして、私は地面をドタドタと行きまして、散歩するようにな

りました。いろいろなことがありましたけれど、最後にとってもりっぱに育ちました。飼っていて困るのは地面を歩いてしまうことなんです。動物園のムササビは地面を歩く。地面に着地して地面を歩いてしまうんです。どうやって教えようかと思いましたが、敵を見分けて、いいものとちゃんと食べるとかいろいろなことをいっぺんに教える方法はないものかと思いましたが、それは実際にできました。

それで最後に心配だったのがよく眠ることです。山小屋に帰ってきてくれるんですが、その巣でよく寝てとても深いんです。私がたたいても起きない。これではテンが来たときにひとたまりもないなと思いました。テンというのはダーッと木に登りまして、ウロに顔を突っ込んで獲物を探して取る動物です。最後はテンだと思いました。それが1年たった次の4月の段階です。毎日森に出かけていって、毎日帰ってくる。私は毎日朝、迎えに行くというふうにしていました。

ある日、テンが近くにきました。すぐ近くにテンがよく来る巣がありまして、そこにやってきたのが分かりました。そうしたら、眠ってばかりいるチビチャンが眠らなくなりました。その日から眠らなくて、家にも帰って来ませんで、木の上にいるようになりました。枝にとまっているんです。だから一番手強い天敵であるテンを察知すると、ムササビはいつでも飛べるように巣には戻らないということが分かりました。ですから、この子はこれで完璧だ。10年ぐらいは軽く生きるであろうと思いまして、私は涙ながらにその子とお別れをいたしました。私がいると、いろいろな危険に身をさらすであろう。

たぶんそういうふうにまったく完璧に育ったと飼い手が実感しながら育って離れていった野生動物としては初めてだろうと思います。

司　会： はい、ありがとうございます。もう一つぐらいご質問いただければと思いますが、どなたかこざいますでしょうか。

今　泉： 司会の加藤さんのビル・モルソンについて、一言よろしいでしょうか。

司　会： はい、お願いします。

今　泉： 私は農業にも関心を向けたり、園芸にも関心を向けたり、要するに森の生活に必要なことにはあらゆるものに目を注ぐようになりました。それで楽しい暮らしをしています。有機農法というものにも非常に関心を持っています。殺虫剤は私の非常に悲しい敵です。私は子どものころ、殺虫剤がなかったときの最後の瞬間をよく覚えています。ドジョウとかたくさんいました。それがすっかりいなくなって、いまの世界は非常に悲しいと思っています。殺虫剤を使われる方もいらっしゃると思います。その方に使ってはいけないと言っているわけではありません。そういう悲しい気持ちを私は持っています。いろいろな流派の有機農法があります。日本にもたくさんいますね。

ビル・モルソンというパーマカルチャーというのを提唱しているオーストラリアの方がおりまして、その方に非常に感銘を受けました。そうしたら、加藤さんと同じ流派でした。私はその流派の手先ではありませんで、ただおもしろいなと思っているんです。それで加藤さんが都留に引っ越してこられて、こうして今、司会をしていただいている。加藤さんはパーマカルチャーの使い手なんです。すばらしい出会いだと思っています。

どうして私がそれに関心を持ったかと言いますと、オーストラリアは乾燥地帯ですから水をとても丁寧に使うんです。日本は水がたくさんありますから、十日市場、このへんの田んぼへ行っても分かりますが、ふんだんに水を使っています。

それはものすごく豊かでいいことですね。ですけれど、私たちが山小屋とか自然と接しようとすると、わずかな水を使うということがとても大事です。ですから、日本の伝統の中では考えなかったような丁寧な水の使い方というのが自然とつきあう上では必要です。その意味では、乾燥地帯での有機農法で水をどうしているかというのは、私たちにすばらしいサジェスチョンをくれます。

そこに湧いているヤスサワの泉があります。大学に水を引っ張ってこれる場所ですが、そこの湧き水というのはちょろちょろっと出ているんです。雨が降るとドーッと流れます。そういう水を使う技術というのは日本にはありません。それで私はビル・モルソンの手を使いまして、わずかな水を生活に使えるような山小屋暮らしをしているというわけです。私たちがしたいと思うことについては、いろいろな可能性があるということを感じております。そういうことの一端を、今日はお伝えしました。どうもありがとうございました。

司　会： 非常に有意義な時間でした。もう一度、拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

このあとの予定になりますけれども、1時からシンポジウムを開催いたしますので、5分前になりましたら、皆様、またここにお戻りください。それまでの休憩中、隣の102号室でフィールド・ミュージアム関連の展示をしておりますので、ぜひお立ち寄りください。お弁当などをお持ちの方は、この教室内で食べていただいてもけっこうですし、外で食べていただいてもけっこうです。外食される方は構内から駅のほうに向かって坂道を下るんですけれども、200mぐらい下ったところの右側に一般の食堂がありますので、そちらでとられたらいいかと思います。

それから隣の教室で星の里工房という天然酵母のパン屋さんが今お店を出しておりますので、もしよろしければそちらでお買い求めいただいてもけっこうです。次は1時にこちらで皆様をお待ちしております。午前中、どうもありがとうございました。

シンポジウム

地域の自然と暮らしと農に学ぶ

シンポジスト：北垣　憲仁（本学特別非常勤講師）
奥　　隆行（都留市　郷土史研究会）
小宮　正廣（都留市　村松新聞店「街かど情報TSURU」編集）
杉本　　清（都留市役所会計課）
小口　尚良（都留市　谷村第二小学校教諭）
司　会：加藤　大吾（アースコンシャス）

司　会： お待たせしました。午後のシンポジウムが始まる前に、皆さんに一つニュースをお伝えいたします。このフォーラムに午前中より都留文科大学の元学長の大田堯先生がいらっしゃっております。まもなく卒寿を迎えられるそうです。拍手で歓迎の気持ちを表してください。（拍手）

それでは、午後の部、シンポジウムを始めたいと思います。「地域の暮らしと自然に学ぶ」、都留文科大学非常勤講師の北垣憲仁先生、よろしくお願いします。

北　垣： 皆さん、こんにちは。いま紹介していただきました北垣憲仁と申します。地域交流研究センターの非常勤講師として働いております。フィールド・ミュージアムが発足し、この大学の地域交流研究センターに位置づけられて５年が経過しようとしています。それから私自身が都留に住み始めて20年が経過しようとしております。この中で、私がフィールド・ミュージアムにかかわりながら、取り組んできた活動のほんの一部をご紹介したいと思います。

それとお手元に今日のシンポジウムの資料があると思います。これは今日の説明の補助となるもの、それから説明しきれなかったものも含めて取ってありますので、それもご覧になりながら聞いていただければと思います。短い時間ですが、どうぞよろしくお願いします。

――――――パワーポイント使用。照明を暗くして説明――――――

私がこの大学に来て最初に関心を持ったのが、身近な野生動物がどういうふうに暮らしているかということでした。私は都留に来る前は山口県のほうに住んでおりました。周りはここと同じように非常に動物の豊かな環境で、そこで育ちました。しかし都留に来ると、違う魅力がありました。いま写真に移っているのはモグラの仲間でカワネズミという生き物ですが、川の中で暮らしているモグラの仲間です。魚をくわえていますが、こういった生き物がいるということ、私はこれは生まれてから大学に入るまで見たことがありませんでした。そういった動物に気軽に会えるということ、それが都留の魅力として強い印象を受けました。

つまり私が大学に入ったころは、非常に狭い、自然のごく一部に関心を寄せる人間にしか過ぎませんでした。それがこの地域で暮らすうちに、あるいはフィールド・ミュージアムの活動に携わっていくうちに、私の関心の幅も大きく変わっていきました。まず大学でフィールド・ミュージアムをやる。そのときに一番の課題になったのが、どのようにして活動の担い手のなる学生の皆さん、職員の皆

さん、あるいは市民の方々の受け皿となるようなものをつくっていけるかということでした。

それで、私は大学の授業の中で学生と一緒に近くの山に出かけるということもやっていました。そういった大切な自分の体験の記録をきちんと残していこうという授業をまずやっていました。そのうちに私ひとりではこれは手に負えませんので、関心のある学生に呼びかけましたら、結構な数の学生の皆さんが自分で記事を書き、自分の体験を語っていくということに関心を持ってくれました。

そのようにして始めたのが『フィールド・ノート』という冊子です。この冊子は最初はＡ４の紙１枚、裏表ぐらいのかたちで無理なく進めていきました。学生が参加するようになって、学生がいろいろな体験を自分の言葉で表現するようになっていきました。

この活動を通して気づいたのは、私は自然に関心があったのですが、参加する学生はものすごく幅の広い関心を抱いているということでした。自然だけではなくて、地域の農業、あるいは地域にいらっしゃる魅力的な人々、あるいは生き方、そういったものに強い関心を抱いていましたので、私の関心とは異なるいろいろな視点がこの雑誌の中に入っていきました。

それからもう一つは、最初は自分の体験だけを記録して言葉にしようとしていた学生の皆さんも町に出て人に会ってインタビューするということを積極的にやるようになったことでした。それは私にとっては非常に驚きでした。どうしてかと言うと、私自身がどちらかと言うと、臆病な人間でして、人に直接お会いして、そして複雑な手続きを踏みながらお話を伺うというのは非常に抵抗を感じる人間だからです。

しかし学生の皆さんはそういったことをお構いなしに、非常に前向きに積極的に地域に出かけて、地域のいろいろな方々に出会って、そこで得られた言葉を丁寧に自分の言葉として表現していくようになりました。

これはどうしてかと考えても、まだ私の中ではうまく整理できないんですが、おそらくこの地域の中に、参加する学生の皆さんにとって非常に魅力的な生き方や、あるいは魅力的なモデル、生き方の手本といったものがたくさんあるということだと思うんですね。それは私には本当に気づかないことでした。

ある日、編集をやっていた学生がきまして、ヨガサークルに通っていた学生なんですが、とっても魅力的な先生がいらっしゃるということで紹介を受けました。その方が実は隣で薪ストーブを展示されています佐々木さんという方でした。そういうふうに学生は直感的にこの人は魅力的だということを感じ取ることができる。それは僕にとっては非常に大きな驚きでもありました。この活動を通して5年になりますが、53号を迎えました。これはミニコミ誌づくりといっていいと思うんですが、地域の方々の参加も少しずつ得ながら、いま継続しているところです。

考えてみると博物館の仕事の中には物を集めて、それを記録して保存して、それを展示するというような機能がありますが、それとかたちは多少とも違っても、まったく同じ機能を果たしているとも言えると思います。博物館の場合は物を大切にしますが、この場合は具体的な物ではありません。地域に生きた人々の生の言葉、生きた資料といってもいいと思いますが、そういったものを丁寧に記録していく。そういったものが学生の関心を大きくひいているんだろうと今では思っています。

ここで気づいたいろいろなノウハウは、その後センターで発行するようになりました『センター通信』にあります。皆さんのお手元にもあるかもしれませんし、外にもバックナンバーがありますので、ぜひ手にとってご覧ください。その発行とも結ぶことができたということです。

それから他にも思いがけない出会いがたくさんありました。思いがけない発見、思いがけない出会いがたくさんありました。それは地域の社会教育施設との出会いでもあります。2006年に、読書週間にちなんで、市立図書館との共催事業として、「谷の町　史の里　図書館のあゆみ展」というのを開催しました。これは現在の図書館に至る戦前戦後の町の図書館活動の歩みを写真や蔵書や資料を使って初めて紹介したものです。この取り組みを通して、この町が全国的に見ても非常にユニークな図書館活動を展開してきたということを知りました。また、町自体が文化的にも豊かな時代があったということも学びました。

図書館の場合は、非常にたくさんの人々が訪れます。そこを利用します。大学とは違ったかたちでいろいろな方々がそこに出入りされます。そういったたくさん資料を持っている図書館、それと大学の研究機能をうまく結びつけて展開してきた一つの共催事業だったと思っております。

また図書館のほうでは、その前年に「つみ木広場」というものを開催しました。私たちはそこにまたヒントをいただきまして、「つみ木広場」シンポジウムというのも開催することができました。人や施設との出会いというのもありますが、一方で物との出会いというのもありました。

話は前後しますが『フィールド・ノート』はこのようになっていきました。それからこれが図書館で行われた展示の様子です。物との出会い、これは一枚の写真ですが、いま皆さんが座っておられるこの場所の昭和初期の姿です。競馬場の跡です。この写真を学生に紹介しましたら、非常に強い関心を示しまして、ある学生はこれをもとに卒業論文を書きました。どうしてここに競馬場があったのかということですね。強い関心を示してくれました。

またこれをもって地域に出ていくと、いろいろな方々が、当時は生きていなかったとしても非常に懐かしいという言葉を連発されます。学生のほうもインタビューに何も持たずに行ってしまうと、非常に言葉を聞きづらい、あるいは、地域に住んでいらっしゃる方々にとっては当たり前の事は言葉にしにくいということがあります。そういうことがあってなかなかインタビューが成立しないということがあったのですが、写真を持っていくと非常に雄弁に昔を語ってくれるというのが一つおもしろいこととしてありました。

実はこの写真を集めていらっしゃったのは、今日ここにいらっしゃいます奥隆行さんです。4000枚の写真を一人で集めて整理されてこられていました。私はその几帳面に整理された写真帳を見まして非常に感銘を受けまして、これは本当に地域を映す大きな鏡になると思って、それをどうにか保存できないかと考えてきました。

これです。これは家中川の昔の様子です。子どもが飛び込んでいる様子です。写真というのは、一つ過去のもので、過去の一面を切り取ったに過ぎないと思われますが、実はここにはたくさんの情報が込められています。つまり子どもが遊べるぐらい水がきれいだったということでもあるわけです。これは決して過去のものではなくて、今のあり方も私たちに教えてくれます。つまり私たちが子どもたちの遊べる場所をつくろうというときの大きなヒントにもなるような気がしま

す。そういう大きな写真の資料というものをこれからも大切にしていきたいと思っていますし、またこの時代を生きた人のこの地域に対する思い、あるいは生き様、場所に寄せるいろいろな思いの有り様というものを大切に、生きた資料としてこれから記録していきたいと私自身も思っていますし、また市民の方々の参加も得ながら、こういった写真にまつわるいろいろな記憶をこれに重ねながら、大きな地域の財産にしていくこともできるのではないかと思っています。

写真との出会いは他の出会いも産み出してくれました。展示を見た方々が強い関心を示してくださって、富士急行の方々の、ぜひ沿線でこういった展示をしたいという申し入れもありました。富士急行というのは、考えてみると、ふだん何気なく利用していたんですが、よく見ると非常にユニークなローカル線で、大月から富士吉田までだいたい標高差500メートルを谷間に沿ってずっと登っていきます。しかも駅と駅との間隔が等間隔で、歩いて駅と駅の間を探索することもできます。それだけの標高差がありますから、当然桜の季節は1カ月ほど桜を楽しむことができますし、また都留でおなじみの水掛菜の栽培というのも、ここと吉田ではまったく栽培の仕方が変わってきます。そういうふうに地域と地域をつないでいくうえで、こういった博物館の活動の一つとしても、富士急の存在を視野に入れながら、これから博物館活動を展開していきたいと私自身思っております。地域をつないでいくこういった線路を利用した駅の博物館構想というのもまたゆっくりと皆さんと進めていくことができたらいいなと思っております。

私の話はこれで終わりになりますが、私自身が20年ここに住んで、あるいは5年間ですけれども、フィールド・ミュージアムの活動に携わって思いがけない出会い、思いがけない発見の中からいろんな展開が生まれてきました。それは当初予期しなかったことがほとんどです。これはよく考えてみると、自然の中で生き物と偶然出会ってそこに強い喜びを感じるというのとまったく有り様としては同じだと思っています。そういった予期しなかった偶然の出会いから生まれた活動もこれから大切にしていきたいと思っています。

私たちが取り組んできた活動というのは、地域の方々が支えてくださったささやかな実践に過ぎません。私自身もお手伝いしたという程度にしか過ぎませんが、そういったものを今後、私がここで暮らしたのと同じぐらいの時間をかけてこれから先、また記録し続けていきたいというのが私の夢でもあります。

そういった生き方を通しながら、またフィールド・ミュージアムの一端を担っていくことができたらと思っております。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

司　会： 北垣先生、どうもありがとうございました。こういった取り組みの中で、さらにいろいろな活動をされている方がいらっしゃいますので、このあとお話を伺っていこうと思います。次にお話しいただきますのは、奥隆行さんです。奥さんは地域の写真を収集されておりまして、何と4000枚という一昔前の写真を収集されたと聞いております。それではさっそくお話を聞いてみようと思います。「都留写真帳をつくる」、都留市在住の郷土研究会に所属しております。奥隆行さん、よろしくお願いいたします。拍手でお迎えください。(拍手)

奥　： ただいまご紹介をいただきました都留市の奥でございます。このたびただいまお話になりました北垣先生のご協力によりまして、私が昭和40年ごろからぽつぽつ集めておりました都留市の古い写真を、ここにございます3冊の立派な写真集にまとめてくださいまして、本当に感謝をしておる次第でございます。この写真

を集めるにつきまして、いろいろあった話をするようにというお話でございましたけれども、その点についてお話をしていますと、私に与えられました短い時間の中でお話しすることは不可能だろうと思いましたので、文大で出しております『地域交流センター通信』の13号をお手元にさし上げてあると思います。これは、私がこのような写真を集めました由来について書いてくれということで投稿したものです。それともう一つ、平成18年の11月の朝日新聞の記事がお手元にあると思いますが、そこに若干触れておりますので、そちらを見ていただいて、私のお話の代わりにしていただきたいと思うわけでございます。

実は北垣先生にこのような写真帳をつくっていただきました前のことをお話しいたします。私は1921年、大正10年の３月生まれでございます。従いまして、来月の誕生日がまいりますと、満87歳の年寄りでございます。それでぼつぼつ先が見えてきましたので、一番気になりましたのが、この写真をいかに散逸させないで、そしてまた市民の方にどういうふうにしていただいたら利用できるかということです。

昭和24年に、都留市の大火がございまして、そのときに類焼いたしまして、本当に無一物になったわけでございます。こういう資料は自宅に保存しておいてはいずれなくなってしまう可能性が高い。災害に強い立派な建築物をもった公共事業に寄贈すべきであると考えておったわけでございます。たまたま平成7年にミュージアム都留が開設されました。最初からミュージアム都留のボランティアをしておりました関係でミュージアムとは懇意でございましたので、ミュージアムに寄贈すればいいと考えまして、一部の写真をもう一度引き伸ばして、ミュージアムに寄贈して一安心したわけでございます。

しかしながら、ある日私がミュージアムに行ってみますと、私が寄贈した写真のアルバムを勝手に引き出して複写をしている人にぶつかったわけでございます。聞きましたら、新聞記者だそうです。私が「これは私が長年苦労して集めたもので、勝手にそういうことをやってもらっては困る」ということを言ってやめさせました。同時に、担当の方にも、ぜひそういうことを勝手にさせないでくれと言ったわけでございます。ミュージアム都留もできたばかりで、担当の方もいろいろそういうことを理解の浅い方が多かったものですから、そういう結果になったのだと思います。お断りしておきますけれども、これは現在のミュージアムの職員の方ではございません。

そんなわけで、ミュージアムもあまり当てにならないなあと、がっかりいたしまして、写真も一部を持ち込んだだけでやめてしまったわけでございます。たまたま北垣先生がその写真をご覧になって、私のところへ訪ねて来られて、「これは非常に貴重なものである」。それで私も「なんとかこれを散逸しないで後世に残して、大勢の方に利用していただきたい」と。「それなら私がしましょう」と言ってくさったのが北垣先生でございます。

そして平成17年、18年、19年、３年の長きにわたりまして、先生が授業の合間をぬってつくってくださったのがこの写真集でございます。現在、３巻まで完成いたしまして、4058枚の写真が全部入っております。まだ私のところには1000枚ぐらいの未整理のものがございますので、引き続いて北垣先生にお願いをいたしたいと思っておるわけでございます。

私が集めました写真は明治の末ごろから、写真がまだ一般に普及いたしません終戦直後、昭和20年代までぐらいというものを主として、もちろんそれ以降のも

のもございますけれども、集めたわけでございます。それ以降のものにつきましては、カメラが普及しておりますので、簡単に集まると思っております。

ただ私がこの写真を集めるのについて一番苦労いたしました点は、皆さんもご承知のように、写真はプライベートなものでございますから、勝手にどこの家にでも上がり込んでお宅のアルバムを見せてくれと言うことはとうてい不可能だということでございます。従いまして、私の小学校の友達だとかスポーツで仲間になっておりました友達だとか、限られた人しか集められないで、実際に協力いただいた方はせいぜい40名かそこらのお宅だと思います。現在でも、あそこのうちに行ったら、もっといいものがあるんじゃないかと思う家が都留市内にもいっぱいございます。そのように、個人の仕事としては非常に困難な仕事であります。

これをできるのは行政です。行政がやれば非常に簡単なんです。「都留市でいま古い写真を集めています。提供していただける写真があったら、教えていただきたい。そしていつお伺いしたらよろしゅうございますか」という通知を出していただければ、たちどころに集まるのでございます。

都留市の場合には、これのもっともいい機会が『都留市史』を作ったときでございます。そのときに、私も当時、文化財の審議委員をいたしておりました関係で、市史の編纂に若干関係をしておりまして、毎日のように市史編纂室に通っておりましたので、都留市の市史を作るために必要だから、ぜひ協力をお願いしたいという通知を市民にやってくれないかと、都留市に提案したわけでございます。しかしどういうわけか理由は分かりませんけれども、都留市はそれをやってくれなかったわけでございます。

あまりこういう公の場所ではっきり物事を申し上げては申し訳ございませんけれど、私も年でございますから、許していただきたいと思います。現在、都留市の広報あたりで、非常にいい写真が載っております。皆さん、試しに市史の広報室に行きまして、「いい写真が載っておったから、その写真を見せてくれ、貸してくれ」と言っても、おそらくないと思います。それが行政の実情でございます。

ところが、ここに行政が協力したために、立派な写真集が簡単にできた事例が一つあるんです。これが隣の町の西桂で作りました写真集でございます。西桂では、都留市の市史が完成した翌年から町史を作りたいという企てがございまして、私どもが都留市の市史の編纂にかかわっておりましたので、ぜひ来て手伝ってくれと言われまして、私ともう一人郷土研究会のタケイ君という仲間と二人が頼まれて西桂に行ったわけでございます。

西桂がこういう写真集を作りたいという話がございましたので、私が先ほど申し上げましたように、町としてありそうなところに通知を出してくれ、そうすれば、私たちが行って簡単に写真を複写してくるといってやったのがこれでございます。わずか３カ月ぐらいの間に58人の方から「よろしい、家に来てください」という返事がございまして、タケイくんと二人で行って、その写真集が一年足らずでできあがったのでございます。集めました写真は1900枚でございます。私が集めました写真の３分の１ぐらいのものがわずか３カ月ぐらいで集まるので、行政がやればできない仕事ではない。私は都留市の対応に対して非常に残念に思っておる者でございます。

立派な写真集ができましたけれど、この話にはまだオチがあるんです。今年になりまして、松本の郷土出版社という出版社で、『郡内の今昔』という写真集を作りたいので協力してくれという話がありました。私は各町村に仲間がおります

ので、いろいろ紹介をしてあげて西桂の場合は私たちがつくったこういう写真集があって、1900枚の写真があるから、役場へ行ってやれば、西桂の写真は簡単に集まりますよと教えてやったところが、出版社の担当が西桂の役場に行ったら、その写真がもうどこにあるか分からない。これが実情でございます。そこで誠に申し訳ないのですけれども、私は行政は頼むに足らずだと思いますので、ぜひ都留文科大学と本日お集まりの皆様のお力によって、私がやってきた仕事をぜひ継続して立派な写真集に、都留市の宝をつくっていっていただきたいと思うものでございます。以上をもちまして終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

司　会： ありがとうございました。それでは、皆様から質問をお受けしようと思います。どなたかご質問のある方、いらっしゃいましたら、挙手をお願いいたします。よろしいですか。お願いします。

坂　田： 非常に貴重な写真がたくさん入っているということで、私も市立図書館での展示等を見せていただいて、写真の力はすばらしいというのを本当に感じました。当時の建物だとか自然の様子だけではなくて、伝統的なことや、その当時流行っていたこと、あるいは写真に写っている人の表情からその時代の人の気概や誇りが感じられる写真がたくさんあって、本当に大事なものだなあと感じました。これは質問というよりは感想です。

簡単な質問としては、写真としては、いろんな写真があるかと思いますが、今後、どういった写真を揃えていけばいいか、もしそういう思いがあれば、教えていただければと思います。いろいろな写真をお持ちだと思います。データベースの中に、今後まだこいう点が足りないなどというものがあったら、お教えいただけますでしょうか。

奥　： 別にどんな写真ということは決めていないんです。どなたがどんな写真を持っているか分からないんです。もう一つ、私は地元に生まれ、谷村の小学校を出ましたけれども、家庭の関係で私は中学校以降、ずっと東京住まいなんです。それで学生のとき6カ月の短縮で軍隊に入り戦地に参りまして、25歳のときに復員して帰ってくるまで、地元と交渉がないんです。それで小さいときの同級生とか仲間が一人もいないんで、先ほどお話ししましたように、訪ねていく場所も少ない。もっともっといい写真があると思うんです。都留市内の場合には、その当時の町村に比べますと、比較的文化が進んでおりました。アマチュアでも写真機を持っている方がありましたので、1万枚ぐらいの写真は簡単に集まるのではないかと思います。ぜひこの仕事を北垣先生を中心として文大で続けていたけたらと思います。ご返事になりましたかどうか分かりませんけれど、そんなわけでございます。

司　会： ありがとうございました。それでは、さまざまなお話を聞かせていただきました奥隆行さんに拍手をお願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

次は小宮正廣さんからお話をいただきます。なんと20年も前からミニコミ誌をつくられていたと聞いております。それが都留市にいったいどんな役割を果たしてきたのでしょうか。そんなところも聞かせていただければと思っております。「ミニコミ紙づくりの夢」ということで、都留市在住の村松新聞店勤務、「街かど情報TSURU」編集担当、小宮正廣さんです。よろしくお願いします。

小　宮： はじめまして。いまご紹介いただきました村松新聞店の小宮と申します。今朝も朝3時に新聞を配って、私は新聞を配りきったあとに電話番をして、8時ごろ

家に戻るのですが、社長がそのころ起きてきて、今日私が「<つなぐ　はぐくむフィールド・ミュージアム>というシンポジウムに、この間言ったように出席させてもらいます」と言ったら、気持ちよく「頑張ってやってこい」と励ましてくれたところです。

「街かど情報TSURU」といって文字通り街かど情報都留ですから、都留の街角の話題を紹介していくというものです。内容としては、この中にも、棚本先生とか、遠藤先生とか、今泉先生はじめ取材させてもらった先生方がいるんですが、学生さんの卒業生で安原君も来ていますが、安原くんも水の活動をやっていて、そういう人の紹介ですね。それからお店の紹介。人ということですから、何か活動ということで、先生方、北垣先生がいま一生懸命やっていられる『フィールド・ノート』の編集のこととか、あとは都留の場合、3万人の都市でありながら、今日もこうして催しがありますが、季節を通して1月から暮れまでなにかしら催しがあるんですね。そのお知らせをちらっとでいいから入れてくれというかたちの需要があります。私が取材しての内容とは別にそういうような、「ちょっと入れてよ」というかたちがあります。

例えば、遠藤先生の顔が見えますが、遠藤先生は最近和服リフォームというのをやっています。たんすに眠っている着物、亡くなられたお母さんの形見の着物とか、そういうものを利用してそれを洋服に仕立て直してリフォームする。それが5年目ですか、ミュージアム都留という博物館のエントランスのところがあるんですが、そこで和服リフォームファッションショーというのをやっておられます。そういうようなことをやるよ、というようなことをちょっと入れてということなんです。いつ、どこで、何を、問い合わせ先、それだけで十分だから入れてくれということがあります。

取材でおじゃまして紹介するということと、あと広告を入れるというかたちで、そちらのコーナーをつくっていただいて、古い「街かど情報」をご自由にお持ちくださいというかたちであるんです。都留でない方はそんな新聞もどうぞ。村松新聞店で、昭和63年の夏から始まっていますので、もう21年目です。「街かど情報」が配られるエリアは、都留市と道志村の新聞の購読者に折り込みでお届けする。また大学の図書館とか、ふるさと会館とか、ところどころに置かせてもらうという感じで見てもらっています。

今日、北垣先生から、「ミニコミ紙づくりの夢」というテーマをいただいたのですが、私は今も人前で話すことはもちろん、人と話すことというのは、高校の時を入れて、あまりなくて、たまたま新聞店に入ったら、そういう事業をするからと、自分は若手で下っ端のほうだったからちょっと行ってこいということで始まったんです。それで、人と話をするようになりました。

先に夢の結論みたいなことを話します。うちの母親のところに近所の子が習字を習いに来るんですけれど、一文字書いてくれと言ってもらったのがありまして、夢というか、こういう字があります。何て読まれるかというと、「むら（邑）」と読むそうなんです。ここの初代学長の漢和辞典で調べれば、このいわれというのがあると思います。今日本当は調べてくればよかったんですけれど。「街かど情報」の出会いで、この間、『フィールド・ノート』で長谷川さんという方から取材を受けたときに、「何が喜びですか」と言われました。そのとき「できあがって、そこの取材先にお届けして喜んでもらうとか、そういう反響もうれしいけれども、取材を通して言葉に出会えるということがある」と答えたんですね。

これも回してもらいたいのですが、言葉に出会えるということです。栄町の都留生協の近くにタジマさんというおじさんがいます。もう80歳前後の方なんですけれど、その人は木ぎれとか、いらなくなった木で細工をするのが好きで、いわゆる取材のときの言葉でいうと、「薪（たきぎ）にするようにころがっている木ぎれでも工夫するとものになる」と言うんです。そういう言葉というのは、おじさんのとこへ行かないと出会えない。「ころがっているようなものでもものになる」ということ。遠藤先生がやっているところと通じるところがいろいろな面であるんですけれども、そういう言葉に出会えるということが一つの喜びであります。

ちょうどいま奥先生が話されたあとですが、奥先生を取材したのが98年、平成11年だからもう９年くらい前ですけれど、１月24日発行でした。これは比較文化学科で「アジアに出会う旅」という講座をやっていまして、そのとき奥先生が招かれて、先生の戦争中の体験談を話されました。このとき講演の中ではなくて、そのあとおじゃまして話を聞いたときに、先生の思い出として、インドネシア、戦争中に南方のほうで、食糧を自給しなければならないので、味噌をつくったりしたらしいんですけれど、そのときに、今回の『フィールド・ノート』にもおもしろいことが書いてあります。

味噌樽をつくるのにしょう油だか味噌をつくるのに水が漏れないように工夫して最初はコンクリで槽をつくったらしいんですけれど、どうしても漏ってしまう。奥先生はファルトのドラム缶がどこかにころがっていたということを思いついた。昔、日本でアスファルトで水を押さえたというのを見たから、やってみたらよくできて、アスファルトを敷いて、またコンクリをして、味噌がよくできたというのが『フィールド・ノート』に出ているんです。そのときに、当時、オランダ軍の傭兵の、こういう人たちのことを兵補というんですか、そういう兵補の力を借りて、味噌を協力してもらってつくったらしいんです。その兵補が戦争を終わって戦後任地を離れるとき、彼らから暖かなはなむけの言葉をいただいた、それが忘れられないと言ったんです。その訳を先生に読んでもらえればいいのですが。

奥　：　これはインドネシア語で、キタオラウ、われわれという意味なんです。ジャウダリマタ、ジャウ、遠く離れるということですね。ダリマタというのは、from、からですね。目から遠く離れる。もう再びお会いすることはないでしょうという意味です。キタオラウ、ジャウダリマタ、タピ、ハテンヤキラ、タピというのはbutです。しかしながら心は永久に通いますという意味でございます。

小　宮：　ありがとうございます。「再びお会いすることはないでしょうが、心はいつまでも通じています」ということを、先生がいま言ったキタオラウ云々といって、オランダの傭兵がそう言ったらしいんです。ここに書いてあるのは枠の外に書いてあるんですけれども、取材が終わってから、そういう言葉がいただける。そういう喜びがあるということですね。

先ほど北垣先生のお話でも予想外の出会いということが、やっていてうれしいことだとありました。「街かど情報」の取材で、実はここに出ている話題なんですけれども、よこぶき荘という老人福祉施設が山のてっぺんのほうにあります。赤坂駅の上のほうです。今度そこに都留市の商工会の婦人部の人たちが慰問で行って、絵手紙をつくって額にして歌と踊りで和やかに…というようなことをするから、取材に来てくれということで行ったんです。そしてみんなテーブルを囲んで和やかにやっているときに、壁に花の絵とか飾ってありました。何を言いたいか

と言うと、取材したときに予想外のことに出会えると先ほど言いました。この取材を頼まれているのだけれど、もっとそういう宝みたいなことに出会う場合がありまして、道草的なというか、よそ見をしたときに、ちらっと見えたものに輝きがあるという場合があります。これが本当に良い例ということだったんです。

このイナヤさんという方は？よこぶき荘へ入って当初、毎晩泣いて暮らしていたそうなんですね。それがあるとき文大生のホリガミヨウヘイくんという人が介護体験で来ました。彼は絵が上手で、スケッチブックにイナヤさんの似顔絵を書いてやったりして、イナヤさんという高齢な方とホリガミくんという文大生が出会った。そうしたら、イナヤさんがそれをきっかけにその施設の周りにある草花を描くようになった。その話を聞いて、スケッチブックを見ますと、左側にイナヤさんの絵があって、右側にホリガミくんの絵があります。そういうものを見せていただいたんですね。それが2冊か3冊ありました。そういうことがあるということ。そういうのというのは、思いがけない、よそ見みたいなときに、そういうのがあります。

ホームページには「街かど情報」を紹介してあるんですけれど、イナヤさんの絵は、ただお年寄りのおばさんが描いた絵という以上の、エキゾチックな部分があります。施設だから描こうと思っても身近なものしか描くものがありませんから、施設の下にある子ども向けの童話集、そのときは中東の神話だか民話集というようなのをもってきた。イナヤさんは向こうの衣装みたいなものを想像したのか、挿絵があったのか知らないけれど、そこから描いた絵が３点ぐらいあったんです。それは動きが感じられたり、そんなに描き込んだ絵ではないんですが、大げさかもしれないんですけれど、何か民族の悲哀といった、ものが感じられます。大げさかもしれないんですけれど、ふつう用事がなければなかなか行かれないようなよこぶき荘でこういう方がそういうものを描いていた。そういうようなことが意外な出会いであるんです。いま言った取材を通してそういうものに出会えるというのはとても恵まれています。

「邑」というのは、今泉先生が言っているのと通じているところがあります。「つなぐ、はぐくむ」というのですが、「むら」というのは木偏の村というのもあるんですが、地域共同体としての「邑」というのではないものもあります。ここの地域交流研究センターを立ち上げるときに、今泉先生は『センター通信』第1号に、そういうことをやるということは先生方、学生を含めて一つの大学の宣言だということを書かれました。地域交流というと、いわゆる地域の人と大学生が交流するとか、地域の中での仲良しとかを考えますが、そういう話としての地域交流というのではなくて、今泉先生の言われているのは、地域を大切にする人たちのつながりを大切にする集まりみたいなことです。その意味で、私が思うのは、地理的な村というのでなくて、(木偏の村も地理的な意味以上のものがあるのでしょうけれど)、人が心で集ってくる「邑（むら)」、そういうあり方ということです。

行政のほうなどでまちづくりという言葉があります。まちづくりというと、私の印象では、もしかすると、例えば大学生が卒業して何年か後に戻ってくる。そのまちづくりの看板のペンキがはげてしまっているというような、人工的で貼り付けたようなまちづくりというもののイメージがあるんですね。

「街かど情報」を通してそうなるかどうか知らないんですが、まちづくりはもうやめにして、街でなくて、「村づくり」というのではなくて、「邑（むら）はぐ

くみ」ということになればいいなというのが、夢というか、いいなあと思っています。そういうのに足しになるように、そんなに目立つ活動でなくても、いいなあということは拾って紹介していきたい。輻射熱で、『フィールド・ノート』というところで、あったかな感じがしていると、自然とここの人も暖まってくるというような感じで、邑（むら）はぐくみという感じで、自然とこっちもあったまってくるというような、そこをはぐくむということになればいいなと思っています。

『フィールド・ノート』の感想を北垣先生から言われたんですが、実は、今日このあと、杉本さんが話されます。『交流センター通信』の８号に学生の米作りというところで書いたところにこういう文章があります。学生が田植えか稲刈りをしていたときに、70歳前後のご婦人が私に声を掛けた。杉本さんがフォローしていて水見をしていたということですけど、そのときに「大学生のクラブが行っているのですか。私は今まで田植えをしたことがないので‥‥」こういう70歳ぐらいの人たちが、そのご婦人は田植えをしたことがないと。それで大学生がやっているのを見て、体験してみたいと言う。そういうことがここらであるということですね。その感じというのが一つは『フィールド・ノート』が象徴しています。いまも麦づくりというのをやっている学生さんで、水麦づくりというのをやっているらしいんです。それとか、さっきの奥先生が言われたように古い写真をもとに歩いていろいろ話を聞くとか、それもまたおもしろい話があります。

「街の記憶展」というのが2005年にありました。そのときにまとめた本『未来に伝えたい都留の記憶』というのがあります。展示とともにこういう冊子を発行したんです。その中に、さっき競馬場が出ましたけれど、大学のどこかこちらのほうに競馬場があったそうです。馬という一文字でやったネモトさんという学生さんが、調査して、そのときは遠藤静江先生とか、カネコの馬を飼っているサカイさんというところを訪ねて調査したそうです。

そういったときに、出てくる言葉ですね。ふだんのここらへんの言葉を紹介すると、遠藤先生は小さいころ、「はなどり」ということをしたそうです。「馬のはなどり」と言って、鍬をつないで馬に引っ張らせたというのです。どうしても馬に乗るのは重い人が乗るよりも軽い子どもが乗るほうがいいということで、幼少の遠藤静江先生が乗ったそうです。そうすると、そのうち馬も要領がよくなって、人間がしなくてもこうなってくるらしいんですね。そうすると遠藤先生も気がゆるんで馬の上でうとうとしたという思い出話がこの中にあるんです。

そういう話を聞ける。私らから遠藤先生に聞くということはまず可能性がなくて、うちの家族の中でも昔の話を聞くということはないんです。家族でいるとかえってそういうことを改めて聞くということがないということです。それが学生さんのところでワンクッションあると聞いてこられる。それで初めて私らがその感じ、その空気、昔の風景を知るということがあります。さっきのご婦人が田植えをしてみたくなったという話に、学生さんがこういうものを通して動き、それをまたまとめて発表するということを通して、自分たちのこのへんのこと、故郷のことを再確認できたり、それだけでなくて、知識以上のものとして、知恵もあったり、心が動く何らかのものがあるということです。この53巻ある『フィールド・ノート』というのも、よくよく古いものも引っ張り出してみると、それは新聞もそうですけれど、時々は出して引っ張ってくると何かあるように感じます。

夢ということで、話しました。そんなようなことでミニコミ紙をやれてうれしいです。失礼します。（拍手）

司　会：　小宮さん、たいへんありがとうございます。それでは会場から、ではご質問、どうぞ。

女　性：　広報からでも情報はもらえるわけですけれども、あえて「街かど情報」を出す目的は何ですか。やはり目的意識がないと、こういうものは出てこないと思うんですけども、その根本的な目的はどういうふうに置いていらっしゃいますか。

小　宮：　目的ですけれど、実に他動的でありまして、自分が動くのは基本的にそんなに…、夢とか言ったんですけども、勤めの中でやることになっているんですね。だから目的というのは、村松新聞店でやっていることで、読者に会ったり、他の読者ににこっとしてもらえれば、今度新聞を取ってもらえる可能性が出るじゃないかというのが目的なんです。

でもそれは続いている大事なことで、『フィールド・ノート』にもどこかに魂胆があるんですね、きっとね。そのへんはちょっと分からない。続いているところは何か魂胆があって、そうだと思うんですけど。

女　性：　邑っていうものじゃないかと思うんですけど。

小　宮：　そうですね。

女　性：　いま邑っておっしゃいましたですね。最終的にはそこなのかなと思ったんですけどね。

小　宮：　あとここは織物の町で、私も機屋（はたや）のうちで、機音（はたおと）を聞いて育ちました。機屋の子は機音がやむと起きるとか、機屋のうちのおじさんやおばさんは声がでかいとか、そういう土地柄だったんですね。昭和40年過ぎぐらいまではそうでした。

織物というのは縦糸と横糸で織り合わされますね。それで柄ができていく。そこへも何か通じるところがあって、なんとか大会とかありますと、一つの趣向の人たちが集まって発表する。参加者がそれに関連している人とかということがあるんでしょうけれど、そこの縦糸・横糸ということですね。そこを上手に…上手にというよりも、とんちをきかせて、ユーモアというんですかね。それは遠藤先生がやっていることはおもしろがって、ちょっとわくわくしながらやっているんですね。work-waku都留ってここにも学生たちのがありますけれど、そのわくわく感があって、ただ大会的な感じとか、とりあえずすませたということではなくて、柄になっていく要素というのがある。そういうふうに、「街かど情報」もいわゆる自分はあまり趣向というのはそれほどなくて、受け身なところが幸いしたのか、スポーツに偏るわけではなくて、いろんなものがたまたまお弁当のおかずにいろいろあるみたいにつくるから成り立っているところもあるんです。

さっき言った邑というものの概念ですが、例えば薪ストーブが好きだといっても、それだけではなくて、邑と言ったときには、何か織り合わせたものがあって、それでたまたま薪ストーブがあるとか、よく分からないんですけれど。

女　性：　おっしゃりたいことは理解できます。

小　宮：　村落共同体とか、岩波の本とか何かあって、それをちょっと頑張って読めばそのへんの根拠があるじゃないかといって、本を買ってあるんですけれど、そういうことを勉強すれば何か答えられることがあるかもしれないんですけれども。

女　性：　分かりました。

司　会：　ありがとうございました。拍手をお願いいたします。(拍手)

続きまして杉本清さんよりお話をいただきます。学生たちと田んぼを行うなど、精力的に様々な活動をしていらっしゃいます。パーマカルチャーのお話もし

ていただけるということです。

杉　本： 杉本と申します。よろしくお願いいたします。私は以前、6年前ですか、大学に4年間お世話になりまして、いろいろ学生の面倒を見たんですけれど、たいした仕事もできないまま市役所へ戻りました。戻ってからも何か学生とつながりがある仕事がしたいなあと常々思っていたんです。そうしましたら、1年目に都市整備課という部署へいきました。ちょうどスポーツ公園の一角にテニスコートをつくる予定の土地がありました。テニスコートをつくるためには地主さんの同意が必要ですが、それが得られなくて、一部農地がそのままに残っている土地があったので、その土地を一般の市民と大学生が農業をする農村公園をつくったらいいじゃないかという考えを持っていたんです。けれども、また一年で異動しまして、今度は産業観光課へ移ったんです。

産業観光課のほうで、農業委員会も兼務していました。その当時、ちょうどいま批判を浴びているゆとり教育、総合学習が始まったようなときで、新聞記事を見ますと、東京の先生方が総合学習で何をやっていいか分からないとか、そのへんの悩みが書いてありました。グラウンドの砂場にブルーシートを置いて米作りをやっていったりとか、千葉の先生が校舎の庭に実のなる木を植えるなどしたとか、情操教育などの記事を見て、大学生の米作りなんかしたらおもしろいのではないかなあという考えで、県の農政担当に雑談でいろいろ相談したんです。

そうしましたら、「おもしろいんじゃないですか。私たちもできるようでしたら、お手伝いしますよ」というような話になりました。一年間、いろいろ計画いたしまして、大学にボールを投げたんです。そして大学に以前お世話になっていた川上先生がいまして、川上先生のほうから田中先生や西本先生、畑先生たちにご相談かけていただいて、お話しする機会がありました。こういう提案はどうですかというかたちで何回か相談させていただきました。そうしましたら、私はいいことだと思ったんですけど、だいぶ大学の事務局から批判を受けました。農学部でもないのに、なんで大学生に米作りを教えるんだというようなかたちでした。絶対やらせないという職員までいましたね。

そうじゃなくて、感覚、農業という文化の感覚を肌で感じるんだと言ったんですけれど、もう発想の違いで分からないんですね。そしてただ単に先生方は自分の趣味とか自分の研究のためにやっている。だから大学のお金を一銭たりとも使わせない。それでやるならいいというような幹部もいましたね。そういうことで先生方もだいぶ大学のほうで苦労なさったと思います。

私もこれがつぶれた、では困る。ちょうど私もそのときに農業委員会を兼務していましたので、農業委員会の会長に相談したんですね。私はこういうふうなかたちで大学生に米作りをさせてみて、卒業してから日本の農業の実情を知るとか、先生になればまた米作りをするときに、経験していれば、どこをたたけば、お願いに行けば扉が開けるとか、そのへんの感覚をつかんでもらえればそれでもいいと思っているんですね。そんなふうな関係で、農業委員会の会長に相談しましたら、「ああ、いいことだ」と相談に乗っていただきました。

たまたま農業委員会の会長が、今もしているようなんですけれども、下宿屋さんをしていたんです。大家さんの農業を手伝った経験がすごい生きているというような手紙を学生からもらったり、何年に一度かあの大家さんのところへ来てそういう話を聞いたということでした。農業委員会の会長が全面的にバックアップするから進めようということになりました。

3月の今頃だったでしょうか。田中先生、西本先生、畑先生の3人はどうも断るつもりだったようです。地域交流センターからは認知されていない。大学の事務局のほうからも批判を浴びているからやめたいというようなかたちで来たんですけれども、農業委員会の会長にも同席いただきまして、こちらのフィールド・ミュージアムにも書いてありますように、農業委員会のほうの遊休農地の対策として取り組むから大学生はお祭りに来てもらえればいいという話になったんです。

そうしましたら、西本先生や田中先生、畑先生たちも多少、肩の荷が下りたようになったと思うんです。実際、大学生が初めて田植えなどするのは大変だと思うんです。私の自宅の横にもいま野菜クラブの学生たちがいるんですけれど、8月9月になると草ぼうぼうなんです。それを田中夏子先生が面倒を見ているようなので、朝早くから草むしりに来たり、私のところの耕うん機を借りたりなんかして、先生方も夏休みの対策には大変苦慮しているようです。

今いったようなかたちで、多少なりとも米作りを通して学生たちに少しでも日本の農業の実態、中山間農地の実情を知っていただければいいなあというのが大学生の米作りの動機です。次に経過ですが、北垣先生が写真を撮っているので、見てください。

これが借りる土地です。最初は私も言ったんですけれど、先生方が乗り気になってきたときに、市の開発公社の遊休農地というのがあるんです。遊休農地というか公園用地で、それを簡単に借りられると思っていたんです。そうしたら、開発公社は慈善事業ではないから貸さないというのです。お金を出さなければ貸さない。感覚も全然違うので、では、結構です。遊休農地はいっぱいあるからどこでも借りられるという感覚でした。地主さんも昔の農地法などの感覚があるので、なかなか貸してくれなかったんですね。借りるにつけても、農業委員会が一枚かんでますので、ヤミ小作だとかもできませんし、県の方から「どういうふうな方法がありますか」と聞かれました。農用地利用増進法に基づく農地の貸し借りということで、大学生や学童が使う農地として市が借りるというかたちで地主さんから承諾をもらって、この土地を借りられるようになりました。この土地が630㎡ぐらいだと思いました。これが田植えのときの、耕起というんですか、水を入れたときの写真です。そしてこれが田植えの前です。水を張ったときなんですけれど、この土地は20年ぐらい使っていなかった土地です。ですから水を入れて3日3晩入れたんですけれど、溜まらないですね。ちょうどこの土地の近くに私の家がありました。私もこの米作りの言い出しっぺだったので、一年目は私が全部水見をしまして大変苦労しました。

これが皆さん出てきていただいて、田植えの前の整地の様子です。

これが農業委員の皆さんです。お願いしたところ、心よく出てきてくださいました。農業委員のおじさんたちも若い大学生と一緒になって田植えをするのが楽しみなんです。私の家の隣の畑も大学生が来たりすると、うちの家内などもお茶を出したり、近所のおばさんたちともわいわい話して、大学生と一緒に野菜作りをするのを楽しみにしているんです。ですから農業委員さんもだいぶ楽しんでしていると思います。

これが植えきったあとの、田んぼの様子ですね。

これが収穫したあとです。さっきの田んぼの様子も植えたばかりですが、夏の日差しのときに、私が水見をしてくると、今日も学生の顔を覚えていますけれど、観察に来たりなどしているのを見たときにはちょっとうれしくなった思い出があ

ります。いま遊休農地でやはり何もつくっていないんですね。夏は、草が生えるんで、除草剤をまいて真っ黄色だったんです。そんなときに畑先生が、私たちも遊休農地の対策やそのへんの自然の保護に一役買っていますねと言われたのが今でも心に残っています。

これは刈り入れの様子です。このときはちょうど雨が何回も降ったんですね。刈り取りにするのに、学生の都合などに苦労しました。これは干しているときの様子です。以上で、田植えから刈り取りまでの様子の写真です。

そして２番目に入る前に、ちょっと私のレジュメもやってあると思うんですけれど、この田んぼで何人分のお米がとれるのか。レジュメに答えが書いてあるので、わかってしまうのかもしれませんけど、この田んぼがさっき言った630となっていますが、561㎡ですね。初年度の収穫量は20年ぐらい作らなかったのでだいぶ多かったですね。平均的には420kgというのが一反歩あたりの平均なんですけれども、籾を付けたので500kg、玄米でだいたい400kgというんですから一反歩あたりの倍ぐらいはとれたんですね。

そして３年目になって、だいぶ地力が落ちて、多少落ちましたけれど、まだまだ普通の田んぼよりはとれているようなかたちです。だいたい380kgですか。561㎡で籾で380kgとれているんですね。玄米として300kgです。

玄米が304kgで、それを精米すると１割ぐらい減るそうですね。そうすると、273kg。だいたい273kgとるらしいんです。そしてだいたい日本人一人あたりの消費量が年間60kgぐらいらしいですね。年々下がっているようです。割り算をすると4.5人分。

500㎡ぐらいの土地で、大学生４～５人分のお米がとれるようなかたちになりますね。あと原価計算をしてみますと、だいたい担当から聞きましたら、１kgあたり333円だというんです。私らがオギノや何かでお米を買いますと、安いので10kg3500円。高いので5000円ぐらいですね。買い取ってくれると、10kgあたり3330円、まあまあかなとは思うんです。

そして、いろいろな経費だとか、肥料代、苗代を引いて、多少黒字になって、22,000円ほど黒字にはなるんですね。けれど、その中には脱穀機だとか、農業委員さんたちが出してくれた機械などは入っていないんです。ですからあの面積の土地でだいたい２万円ぐらいしか入らない。だから実際に農家の人たちが一反歩あたりやっても本当に手につくところはないというようなのが中山間農地の実情です。そうしたら今度は都留市の農業の現状をいま言われたようなかたちの中で多少は理解していただけると思うんです。都留市の経営耕地面積が平成７年、平成７年と言いますと、私がちょうど農政の係長をしたときなんですけれども、そのとき383ha、そして現在平成17年が121ha、だいたい10年間で３分の１に減っているんですね。これが都留市の農業の現状です。

また新聞で日本全国の農地が45年間でどうなったのかというようなのが私も見ていましたら出ていたのであげさせてもらいました。だいたい130万haという面積がこの45年間になくなったそうです。だいたい130万ヘクタールというのは聞いただけでは分からないんですけれども、だいたい四国が183万haだそうです。ですから、四国の面積の70％ぐらいがこの45年間に農地でなくなった、荒廃農地になったということです。

それと農業人口も、2007年の農業就業人口は1960年の４分の１に減ったかたちです。先ほど小宮さんが言いましたけれど、読売新聞の記事に出ていたので、あ

げさせてもらいました。

なんでこういうふうになったのか。経済のしくみで当たり前なんですが、農業は産業です。農作物の需要が減ると価格が下がる。価格が下がると耕作しません。耕作しないと、荒廃農地、遊休農地が増えてくる。ではなぜ荒廃農地が増えるのか。耕作放棄地の大きな理由として高齢化、労働力不足、それから今、イノシシやサルなど鳥獣の害にあってやめてしまうというのもあるのかもしれません。

ではなぜ農業後継者が育たないのか。農業は３Ｋだからと思っている方もいらっしゃるんです。でも実際にやってみれば、他産業と比べてそんなに辛い仕事ではないと聞きました。私が農業委員会にいるときに、農業委員さんたち、都留市の農業の一生懸命やっている人たちを集めました。小形山で40代ぐらいの若い方がやっているんです。その方は、からし菜を生産しているけれど、経営面積が足りず連作障害になる、3年ぐらいの周期でやりたいので、小形山の近くの大原だとかあのへんの土地を借りたいのでお願いしたいと農業委員さんの前で説明しました。農業はそんなには悪くはないということでした。そんなかたちでやっていただければまだまだできるのではないかとは思っています。

問題は農業所得のほうにあると思うんです。レジュメにも書いてあるように、現在、年間農業センサスの調べでは126万円が農家一戸あたりの収入だそうです。最近、NHKのハイビジョンテレビで、秩父の農村の衰退の様子を見ました。45年間の秩父の農村の衰退の変化というもので、村が一つなくなるというような番組でした。昭和45年以降、農業以外の収入がだいぶ伸びてきて、農業収入は経済発展にともなってだいぶ減ってきたようです。池田内閣の所得倍増論の工業化にのって、日本全国、北海道以外のところにおいては、工場などが進出してきて農外収入がどんどん増えてきた。その関係で秩父の山村でもやはり青梅や通勤できるようなところに働きに出て、どんどん就農人口が減っていくというドラマでした。その中で、昔は大家族で経営していた農業がじいさん・ばあさんの農業になっていくという番組だったのを覚えています。

農業という業界は生活費の４分の３は農外収入から得ているというのが実態のようです。農業をやらせたくないという親の思いが強かったのか、農業をやりたくないという子どもの思いが強かったのか、それは分からないですけれども、どちらにしても農業だけでは生活できないという実態が秩父そして日本全国の農業の状況だと思うんです。これが「現状」というところの説明になります。

ではこれからどう進むべきかということです。中間山地農地、都留市をはじめとした小さな農地、北海道や何かは別として、ほかの小さな農地では、今言われた500㎡あたりの土地でも２万円の収入ぐらいしかない。実際やっている人たちは肥料代などを出してとんとんです。ただ農地があるからしようがない。平成７年から平成17年度の間に農地が３分の１に減ったというのが都留市の実情です。ですから中山間農地でどうしたらいいのか、どんな作物を作ったらいいのか。作るほうにも問題があると思うんです。

ですから消費する人の顔を見て作る。そしてまた逆に消費者のほうからしてみれば、どんな人が作っているのかというかたちを全面的に取り上げていったらいいと思うんです。私が平成７年、13年前、農政の係長を１年だけやったときに、ちょうど今泉先生が夏狩のほうに住んでいると言われましたけれど、あそこに紀伊国屋さんという豆腐屋さんがあるんですね。あの豆腐屋さんはその前年ぐらいに出てきて営業を開始していまして、都留の大豆を使って、青畑大豆の豆腐を作

りたいという話から、青畑大豆を農家の人たちに作ってもらうような取り組みをしたんです。それと合わせて紀伊国屋さんのほうは、青山や三多摩のほうにスーパーを何軒か持っていて、青山ではだいぶランクの高いスーパーのようでした。その方たちに都留で作った農産物を出したいということでした。紀伊国屋さんの工場長さんが理解ある方で、種まで全部揃えていただいて農家の方たちに作るように勧めたんです。

そのとき私のほうも、では自分らがどんなスーパーに出すのかということを見に、農家の方たち、作る方たちをバスで研修のようなかたちで連れていったんです。自分たちの作る野菜や青畑大豆で作った豆腐はこういうところで消費されるのだということでやってみました。けれど私は道半ばで1年で、お前はほかへ行きなさいというようになって、それ以後、継続したようすもなくて、今聞いてみると、野菜づくりもストップしているようなのが実情です。紀伊国屋さんのほうも国内の、北海道の大豆を使ったり、そんなかたちで対応しているようです。

ですから、生産者の顔が見える農業、消費者の顔が見える農業というかたちで、こういう交流センターや大学生の力を借りて都留市の農業もやっていかなければならないのではないかと思っています。

その中で、観光農業の推進とか、水田のオーナー制度などもあると思います。いま司会の加藤さんがパーマカルチャーの専門だということで、私のほうはあまり触れたくはないんですけれども、これからの中山間農地を生かしていくためには、都市の人たちの協力が必要だと思うんです。CO_2の削減で、東京の大きな会社が山梨のほうでも、山梨市だか塩山のほうに「ライオンの森」とかいう命名権をもらって山の管理をする。ライオンというから歯ブラシのメーカーですね。何ヘクタールとか大きい山林の管理をして、企業イメージを上げるとか、CO_2の排出権を買うという取り組みをしているそうです。それと早川町で三菱自動車が「パジェロの森」というふうなかたちを取り合っているんですけれど、都市住民が有機野菜や無農薬野菜ということをもっと考えていただきたいと思うんです。

ですから、ただ単にそれを考えただけではだめで、パーマカルチャーのような考えのように、自分の都市のゴミを堆肥化して、そして都留へその肥料を持ってきていただいて、自分らの家庭ゴミの肥料から野菜を作るというかたちで消費していただけるという仕組みづくりをしたらいいと思います。また加藤さんが実際、若いリーダーでいるので、そういうふうなかたちの農業をしていけば、都留の農業だってまだまだ捨てたもんじゃないと思うんです。加藤さんのほうも相づちを打っていただいているので、小形山の佐藤さんという方にご紹介したい。そんなかたちで商売としては悪くないと言っていました。そんなふうなかたちでやれば、必ず都留市の農業も開けていくと思います。

あとひとつ、フィールド・ミュージアムで遅れをとってほしくないんですけれども、いま小菅村では、東京農大が源流大学というようなかたちで進出してきています。そして慶応大学が富士吉田市と協定を結んで北麓一帯の市町村と協定を結んでフィールド的な展開をすると思うんです。まず都留のフィールド・ミュージアムはもっと地域住民と密着して発展して、今言われたような東京農業大学とか慶応大学に負けないようなフィールド・ミュージアムの活動をしていただきたいとお願いいたします。どうもありがとうございました。(拍手)

司　会： 熱い思いを聞かせていただきました。どうもありがとうございました。(拍手)

一つ質問を皆さんから受け付けてもよろしいでしょうか。それではどなたか質

問をお願いいたします。

女　性： お話、どうもありがとうございました。お話の中で、これから社会に出る学生に農業体験をさせるということがありました。うちの大学は先生になる学生が多いと思います。家庭外で、食育というのをしていくのは先生の立場だと思うので、農業体験というのは必要だと思いますが、大学側がなぜ喜んで受け入れるというかたちをとらなかったのか疑問に思いました。田んぼクラブというのは現在も続いているということですね。私はこれに興味をひかれまして、これに参加したいという場合はどうすればいいのでしょうか。参加できるんですか。

西　本： 補足をさせてもらっていいですか。都留文科大学の西本です。いま杉本さんからお話があって、田んぼをやってみないかという最初のお誘いを大学のほうで受けた教員の一人です。当時、その前に大学の職員のほうと杉本さんは話をされていたようですけれど、職員のほうがあまり賛成ではなかった理由は、私どものほうにも十分わかりません。それは必要があれば、こういうことではなかったのかということは、杉本さんのほうからでもお話しいただいたらいいと思います。

私たち相談を受けたほうは、その意義はものすごくよく理解できるメンバーだったのですが、農業系でもないうちのような大学で、責任をもったかたちで学生がかかわれるようなシステムをすぐにはつくれないという判断があったんです。イベント的な参加になってしまうということもあって、最初ためらっていたわけです。

いまお話しいただいたようないきさつで農業委員会のほうで全面的にバックアップするという条件で始めてみようということになりました。１年目については、この写真にありますように、社会学科の畑先生や田中夏子先生の授業を取っている学生やゼミ生にかなり強引に声をかけていただいて、参加する学生を集めたといういきさつがあります。２年目、３年目、今年度19年度が３年目になって、ずっとそのあと続けてやっているんですけれども、その初年度のような強引な学生の集め方ということをやらないできまして、非常に学生の参加は少なくなっています。はっきり言って田中夏子先生の触れる範囲の学生で、無理のないかたちで携わってもらっているということです。農業委員さんはたくさんいらしていただけるのに、集まる学生はものすごく少ないということで、申し訳ないようなことになってきているんです。

ただ、１年目に杉本さんに世話をしていただいた水見は、２年目以降はごく一部の学生ではありますが、夏休み中なども分担してもらってだいたいやっているというふうになっているんです。それでこの田んぼクラブを来年以降どうするかということと、併せてGPの企画の中に大学農園をつくろうという柱も実はあるんです。そのことも併せて来年以降のやり方を抜本的に考え直してみようと、今考えているんです。ですから、何らかのかたちで水田も畑もやっていきたいと考えています。その際は学生にも見えやすいかたちで宣伝すると思いますので、ぜひ参加してください。改めてご協力をお願いすると思いますので、よろしくお願いいたします。

司　会： ありがとうございました。(拍手)

次は小口尚良さんからお話をいただきます。都留文科大学をご卒業し、その後、この裏山での観察会を始められたそうです。今後の観察会の展望などをお話しいただけることになっております。

小　口： こんにちは。都留文科大学の卒業生です。入学したのが1982年。今泉先生のさっ

きの午前中の話で今泉先生が見えた3年後になります。4年いたんですけれど、その3年生のときに大田学長が退官されて、はっきり記憶がないんですけれど、学生全員と握手をされたんですね。僕も握手をしてもらって感激したんですけれど、すごく柔らかくて温かい手だったなということを今でも覚えています。どうもありがとうございました。

北垣さんとはちょうど同じ時代に今泉先生の動物学ゼミで過ごさせていただきました。2年生の秋にたまたま教育を希望したら、あぶれてしまって、今泉先生のところが空いているということで行ったんですね。ネズミとかムササビとかをやっているんだけれども自分はあまり興味がないというような話、今となっては失礼なんですけれど、そんな話をしたくせに、なぜか卒業後も一番関わっている自分がここに立っているというわけです。

そんなかたちでフィールド・ミュージアム構想についても、かなり古くから関わらせていただいています。先ほどからも話にあるんですけれど、都留はいい場所だと思います。山が近いというのも、とてもいいと思います。これからたぶん外国からお金を出していろいろなものを買ったりすることができなくなりますね。そんな中ですぐ近くに行けて、資源もあるし、フィールド・ミュージアムとすればいろいろなことが学べるというようなところがすごくすばらしいと思っています。

そんな中でうら山観察会をやっているんですけれども、今日はそれを中心に今までを振り返ってみたいと思います。よろしくお願いします。

今日は三つ柱があります。まず「うら山動物ランド」の考え方です。「動物ランド」というのはうら山観察会が子どもたち――今では会員に限定になってしまったんですが――に出しているお便りのようなもので、都留の自然を紹介して、観察会の案内をしているものです。「動物ランド」のランドというのは動物園に対抗するものです。動物園じゃないぞ、もっといいんだぞ、ということです。「僕たちの動物園」という副題をつけました。まず動物園というと、ゾウとかシマウマとかライオンとかを思い浮かべます。写真を撮りにアフリカに行ったんですけれども、アフリカに行ってこういうのを見ていていったい自分は何をしているんだと思いました。

そのころは旭小学校にいたんですけれども、すぐ横が石船神社です。そこのムササビをなんでもっとしっかり見ないんだということを、この旅行中に感じました。戻ってきてから精力的にいろいろやり始めました。捕まえて閉じこめるのではなく、会いにいく、あるいは自分たちのそばに来てもらう。そういう発想が大事ではないかと思います。これは旭小学校で学習会をやったときに使ったスライドです。

方法としては三つです。まず家や学校を動物園にする。つまり動物たちに来てもらう。あとは地域でいい場所を見つけて、そこに出かける。ただ行くだけではなくて、そこを大切にする。それから近くの山などにいい場所をつくる。そういうかたちでやればいいのではないかと思っています。

これは自分が昔住んでいたアパートですが、すぐ手前が国道です。場所は十日市場です。ちょっとしたこういうものを植えたりして、ブロックで囲んだだけですが、ホームセンターで売っているプラ船というのを買ってきて水を入れて、土を入れて稲でも植えたりすると、いろんなものが集まってきます。

例えば、これはアゲハチョウの幼虫です。小さいころから大好きだったんです。

この模様ですが、なぜこんな模様をしているのかというのは全然わからなかったんですけれども、近くにいると、ふっとしたきっかけで発見したりします。これが発見の写真です。撮った自分がいったい何の写真かわからなくなってしまったんですが、わかりますか。ここに2匹いるんです。これはユズの葉っぱですが、あの模様は葉っぱにうまくとけ込むための模様だったんだということを発見したりするとすごくうれしいわけです。

ただそれは自分の近くにないとなかなか気づかない。これはアマガエルですが、おもしろいことにプラ船に水を入れると、なぜかもうその日の夕方に来ます。そして鳴き始めるんです。都留ではあちこちで鳴いているので、見ようと思えば見られるんですが、なかなか見ません。自分の家の近くにあると見る機会が増えてよく見ます。すごく体全体ですばらしい声を出してくれます。

これはヤマアカガエル。これも同じプラスチックの池です。これはオスで、3カ月ぐらいずっと毎晩泣いていました。ほっぺたをふくらませます。ただ残念ながらメスが来なくて、卵は産んでもらえなかったんですけれども、そういうのも味わうことができました。

春先に植え込みをきれいにしなおそうと思ったら、中からヒキガエルが出てきました。ヒキガエルまで来ていたのかとうれしくなったりもしました。

これは学校ですが、ツバメが巣をつくっているところです。だいたいどこでもこういうところが見られるんですけれども、意外と午前中の話もあったんですけれども、当たり前のようにやると見ないんですね。今日しか見られないよとか、そういう場面になると、頑張って見ようと思うんですけれど、意識して見なければわからないんです。そういうのを撮影などでやっていますと、いい感じの場面が見られます。あるいはエサをやるときはこんな感じなのだとか、こういうものが見られます。

これは意図的にやったわけではないんですけれども、学校にツバメが来てくれた。これは前のアパートのサッシの外です。こういうのを見つけました。もしかして去年のかと思っていたら、卵を産んでありました。ラッキーと思って見ていると温め始めて、そして雛が生まれます。エサは、ツバメの場合はトンボなど飛ぶ虫なんですが、セキレイの場合は違います。これはキセキレイですが、水棲昆虫を中心に捕ってきたりして、やはり鳥でも棲む場所によってずいぶん違うんだなと分かったりしました。それが一つ目です。

もう一つは、いい場所を地域で見つける。都留はかなりいろいろあります。で、一つ目は正式な名前かわかりませんが、これはすり鉢池です。蒼竜峡、十日市場のほうですが、毎年4月の下旬にヒキガエルが集団で産卵にやってくるところです。すごく圧巻です。こういうところはその日に行けばいいんですが、なかなかいつか分からないんです。こういうのを見るのはいいなと思います。こんな感じです。何匹いるんでしょう。すごくたくさんいるんですけれども、中にこういう格好をしているのがいっぱいいます。なんでか知らないけれどもこういう格好をしているんです。最初のは分からなかったんですけれども、見ているとすぐ分かりました。下にいるのがメスで上がオスです。これはボクサーのファイティングポーズと同じで、こいつがこのメスを横取りにやってくるわけですが、来たら、バコンと蹴りをくれる。こういうことが見られる。本当に捕まえて飼っていては見られないような場面がこうして都留の身近、あるいはちょっとした山に入っていくと見られる。

これは鹿留の今宮神社です。車で行って、車から降りたら１分もかからないところにムササビが見られる場所があります。先ほど午前中の話にも出てきた大木がこれです。この大木の上のほうに巣があります。こういうところも都留にはあって、ここは行けば必ずムササビが見られるというすごくいい場所です。観察会でときどき使わせてもらっていますが、普段見ている人はそんなにはいないんじゃないかというのが感想です。

あとは近くの山などに動物が棲みやすい場所をつくる。今泉先生の観察小屋第１号は僕が教育実習に行っているときだったんですけれども、それに触発されていつかはつくりたいと思っていたのを、やっと教員になって何年目かに作りました。隣のおじさんに山を借りて、Ｊマートではなくて、オーツルでプレハブを買って造ったんですけれども、これが93年です。今はちょっと茂ってこんな感じになっています。

話が前後するのですが、大事なものを見てもらうのを忘れました。ビデオを見てもらいたいと思います。

これは上野動物園のムササビです。地面に下りたりする。得意技の滑空ができないんです。でも子どもたちはこれを見て「かわいい」という感想を持っているんですね。ここのムササビはこういう運命のもと、しっかりと役割を果たしていると思うんですけれども、昼と夜が逆転して夜中に照明で明るくして、昼間を薄暗くして活動させているという感じです。さっきの今宮神社とか石船神社に行くと、都留だったらすぐにその姿を見ることができます。

これが午前中に話があった消防車に水をかけられた大木のウロです。石船神社です。ここがこの神社でもいい条件のウロで、ここで毎年子どもが生まれていると思うんですけれども、こういうのが見えるというのが都留のすばらしさだと思います。そういうのを山の中だったら、大木がないので巣箱をかけると見ることができるということで、先ほどのところに巣箱をかけました。ではもう一回戻します。

巣箱をかけたところ、僕の観察小屋にもムササビが来てくれました。多いときで6匹ぐらいいました。それでも縄張りはないということが分かると思います。こんな感じで、国道沿いのアパートではできないんですけれども、ちょっと入る。車から降りて350m歩くと、こういうことが観察できる。ただぶらぶら山を歩いているんだと出会えないけれども、こういう施設をつくると会える動物というのがあって、それを観察会で紹介しています。

これはアカネズミです。次が観察会の活動ですけれども、先ほどの石船神社の大木です。ムササビだけではなくて、その関係をもっていくことで、もやしではなくて本当の大木を子どもたちが体感しているところとか、こういうことを観察会でやっています。

ちょっとした説明をしたりして生のムササビをフィールドスコープを使ったりあるいは寝そべって飛んでいくのを見たりするなどの活動をしています。

これはこの間やったばかりのリスの観察会です。窓の外に来るリスを見る。これも餌付けによって来てもらっているリスです。さらに上の段階を目指したいんですけれども、子どもたちがまずは出会うというのが大事ではないかと思ってやっています。ちょっとだけリスの映像を見てもらいたいと思います。

これはムササビの滑空です。こういうのが見られます。

これが観察会で見ているリスで、小屋の中から見ている子どもたちの声も聞こ

えます。あわただしくてすみません。こんな感じで見ているわけです。あとは山の探検もします。コースを決めて、季節を通して歩くんですけれども、これはリスの跡で、エノキの木の根本にオオムラサキの幼虫を探しているところで、実はこの男の子、「いた！」という感じでここにオオムラサキの幼虫がいる場所です。これも長年かかって整備しているので、行けば必ず会えるようになっています。

あとはこれがネズミの観察の様子です。あとホタルの観察会は小形山の郷土資料館、昔の本当の学校の教室を使ってこういうクイズをしてやりました。観察会は、いま後ろに代表のキヨハラ君が座っているんですけれど、今年は1年生がたくさん来てくれて、来たらすぐ即戦力というかたちで、こんな感じでやってもらいました。学生が主体の観察会になっています。

これは初夏の探検、山の中にブランコをつくってやるとか、ロープを伝って沢を下りるとか、動物の発見も楽しいんですけれども、子どもたちに感想を聞くと、これが一番いいみたいです。時間がないからやらなかったりすると、感想のときに「やりたかった」と言われてしまいます。

これは小学校に出張して環境教室を開いたりしている、その写真です。

あと作業として巣箱をかけるなどの作業もしています。観察会ですけれども、1989年にムササビと森を守る会のムリネモ協議会というところで、フィールド・ミュージアム構想が始まったと思うんですけれど、その中の教育普及部門としてスタート。目的は子どもと自然との橋渡しだけではなくて、都留の動物学の研究成果を生かした観察会のスタイルの研究。こちらのほうがなかなか進んでいないんですけれども、こういうことをやっています。

今後の展望ですが、今までに蓄積してきたものを活用して普及できるようにする。最初はこんなに長く続くとは思っていなかったんですけれども、ただ今は続くにはこつがある、ではなくて、惰性で続いているんです。ただ学生の皆さんが入れ替わりですが、とても頑張ってくれています。それで続いています。

やはりスタイルとか、教材・教具、標本・映像の整理を観察会ですけれども、フィールド・ミュージアム全体としてやっていければいいなと思います。特にフィールド・ノートのほうにすごくたくさんの情報が入っているといつも思っているのですが、そういうものを使えるようにデータベース化したり、大学にあるいろいろな標本や剥製なども活用したい。自分は小学校で教えているのですが、中学校の理科の先生も含めながら、そういうものを活用していくようなスタイルができればいいのではないかと思っています。

都留の財産だと思うこの裏山をもっと使えるようなかたちにしていけばいいなと思っています。以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

司　会： ありがとうございました。それでは、皆様からご質問をお受けしたいと思います。どなたかご質問がある方、お願いします。

参加者： 動物の観察会等で気をつけている点はどういう点ですか。

小　口： 見つけたらそれを大事にしたいなというのと、あとは気を付けてというか、いろいろ価値観があって、いやだと思ったりする人もいますね。そのへんをうまく、「すごいんだよ」というのを伝えたい。そういうのが苦手な子どもたちでも、いいところをさりげなく見せられるような感じで、見つけたらそれをどういうふうに出せばいいかというのを考えながら、うまくやっていく。そういうのが工夫しているところです。最近あまりできていないんですけれども、そんな感じです。

司　会： ありがとうございます。それでは最後、もう一つご質問を受け付けようかと思

います。どなたかいらっしゃいますか。はい、お願いします。

大川原： 都留文科大学の初等教育学科３年の大川原伸といいます。僕も裏山観察会の活動には一度だけ参加したことがあります。すごくホタルが好きで、「ホタルの墓」観察会に一度参加させてもらったことがあります。非常に有意義で楽しくて、ありがとうございました。先生は、最初のほうはあまりこういうことに興味がなかったとお話しされたと思うんですけれども、どうして現在ここに至るまでこんなに精力的活動ができるようになったのか、経緯というか理由というか、そういうものがあったら教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

小　口： 最初は興味がなかったんです。２年の秋にゼミを決めたときにはまったくなかったです。ただ小さいころから動物などは好きでした。自分は教育についてやろうなんて思ってたんですけども、たまたまだったんです。行ってみたら、そのなかはそういうのが大好きな同級生とかがいっぱいいて、自分はその中になかなかとけ込めなかったです。１年のころからいるというのもいまして、ムササビと森を守る会というのがかなり積極的に活動していました。でもそんな中に少しずつかかわりながら、卒論は全然ちがったんですけれども、卒業したあとに１年間大学に残りました。おもしろそうだなと思って、その先生の小屋の整備の手伝いをしていました。その１年がこういうのにどっぷり浸かってしまったときでした。そしてできるのだったらこの都留で教員をしようと思いました。最初は地元などを受けていたんですが、山梨県を受けようと思って、山梨県の教員になった、そして続いているという感じです。

司　会： ありがとうございます。それではもう一度拍手をお願いします。(拍手)

シンポジウムはここで終了になります。このあと休憩になりまして、休憩の間のお得な情報をお伝えします。隣の教室でなんとカフェを開いております。ここで学生が自らつくった小麦で焼いたお菓子がふるまわれるそうですから、行ってみてください。

それからフィールド・ミュージアム関連の展示なども同時に行っておりますので、そちらもご覧いただければと思います。天然酵母パンも同時に販売しておりますので、ぜひお買い求めください。そのあとは16時から「ざっくばらんに話が進む座談会」というのをやりたいと思いますので、５分前にはお席に戻りますようにお願いいたします。それでは休憩としたいと思います。ありがとうございました。

座　談　会

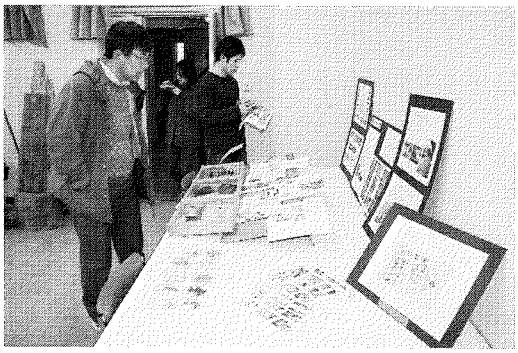
司会進行：加藤　大吾（アースコンシャス）

シンポジウムの後、展示・休憩の１時間をはさんで「ざっくばらんに話が進む座談会」を開催

司　会： お待たせしました。午後の「ざっくばらんに話が進む座談会」を始めたいと思います。いろいろと今までお話を聞いてきましたけれど、情報がたくさん頭の中に入りすぎて混乱しているかという部分もありまして、いったい何だろうというところを一度おさらいしておきたいと思います。そこで今回の意図、経緯などをまとめておきましたので、こちらをお願いしたいと思います。２回目の登場です。

坂田先生、よろしくお願いします。

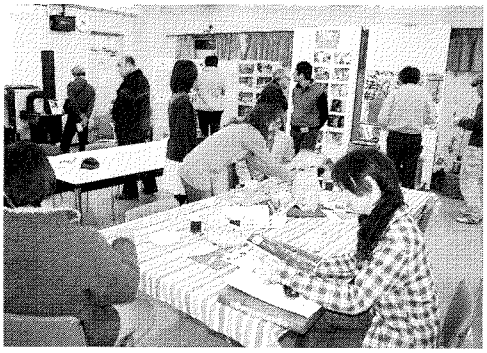
坂　田： 皆さん、お疲れのところを本当に最後まで残っていただき、ありがとうございます。学生の皆さんが心を込めて焼いたお菓子とお茶はいかがでしたでしょうか。アンケート用紙を同封していますので、そのへんのことも学生の励みになりますので、ご記入いただければ幸いです。４時から５時までの１時間は「ざっくばらんにみんなが主役になれる座談会」というのを目指して「フィールド・ミュージアムの可能性」というテーマで、皆さんと意見交換、あるいは言いっぱなしでもいいんですけれども、やっていきたいと思います。



テーマは「これからの地域のあり方」、そして「自然と共生した持続可能な地域づくり」というテーマで皆さんといっしょに語っていきたいと思います。

その前に少し復習を‥‥。テーマが「フィールド・ミュージアムの可能性」ということなので、フィールド・ミュージアムというものがどういうものだったかということを整理、復習したいと思います。ただ私はフィールド・ミュージアムに関わり始めてからまだ２年ぐらいなので、理解が浅くて、今泉先生には怒られるかもしれませんが、私なりにまとめましたので、見ていただければと思います。

フィールド・ミュージアムというのは、読んで字のごとく、野外博物館あるいは自然博物館というものを意味します。もともとは先生の午前中の講演、あるいは午後のシンポジウムの小口先生のお話にもありましたように、野生生物本来の生き生きとした姿、暮らしぶりを観察できる場所、あるいは活動というものをさしています。



ところが最近、これも午後のシンポジウムで北垣さんからお話がありましたように、山、森だけではなくて、学生の発想、『フィールド・ノート』という雑誌の編集を通して、自然だけではなくて、興味がいろいろ広がっていった。思わぬ出会い、思わぬ発見というものがあって、地域の中からまだまだ学べること、意外な発見、あるいは人と人との出会い、輪から生まれるさまざまなもの、みんなが集って話す喜び、発見、学びがあるということで、私どもは最近、地域全体がミュージアム、つまり学びの場として考えることができるのではないかと、少し広がってきているんじゃないかと思います。今泉先生、これでよろしいですか。

あまり反応がよくないようですが。

それでこの地域全体がミュージアムだということ。地域にはいろいろな学びがあって、もちろん自然と人との関係、あるいは人と人との関係、それからいろいろ学んだり、刺激を受けたりする。でも最終的には私たち人間も自然の一部で、自然なくしては生きていけませんね。そういう意味で人と自然の関係を再考し、自然と共存する人の暮らしのあり方を探究する活動がフィールド・ミュージアムなのではないかと感じています。

そこで、今回この座談会では「フィールド・ミュージアムの可能性」ということで、これからの地域のあり方、自然と共生した持続可能な地域づくり、どういう可能性があるか。どういうことをしたいか。どんな問題があるか。私はこんなことを考えているんだということを、皆さんにざっくばらんに語っていただければと思います。

ここからは司会を加藤さんにお渡ししますので、よろしくお願いします。

司　会： それでは、ここから私のほうで進行させていただきたいと思います。早速始めます。いまペンを配っておりますので、こちら一人１本ずつお受け取りください。ない方は呼んでいただければ、いま伺います。

そうしましたら、資料の中に配られております何も書いていない紙が3枚ほどあったかと思います。すでにメモなど書かれている方もいらっしゃると思いますが、それを裏返して使っていただければと思います。そして、どんなふうにしてこれを進めるかと言いますと、その紙に大きな文字で、今からの質問に対して自分なりの回答を書いていただいて、こんなふうにみんなで出す。周りの人と見比べたりなどして、自分の意見や、ほかの人の意見を受け容れるというようなかたちでやらせていただこうと思います。

この座談会にはルールがあります。一つ目、自分が思ったことを記入すること。突飛な意見も学びの十分な要素になりますので、重要です。ですから自分の意見が突飛だなと思った方もどんどん書いてください。

それから二つ目、書いたこと、言ったことは実行しなければいけないという責任はありません。たまにあるんですね。「この間、君はこう書いたじゃないか」とか、「だからあなたやりなさい」とか、そういうのはいっさい禁止ということにしたいと思います。

三つ目、話す人は私が指名しますので、ほかの方は聞く側ということでお願いいたします。短い時間ですので、お話しする機会がない方もいらっしゃると思います。なので、どうしても話したいという方は、私が「だれか話したい方、いらっしゃいますか」と聞きますので、そのときに手を挙げていただくというふうにし

たいと思います。それでもどうしても話したいという方は私に目で合図をください。皆さん、目で合図をやってもらっていいですか。ウィンクできますか。分かるように。そうです。いいですね。目で合図するときは隣の人に分からないように気をつけてやってください。ということでよろしくお願いします。

それでは1問目、いきたいと思います。どうぞ。

1問目、「地域で皆さんが大切にしていること」と書いてあるんですが、いいなあとか、すばらしいなあと思えること。これを12～13文字で大きく書いていただきたいと思います。ほかの人に見えるように大きく書いていただきます。それでは皆さん、お願いします。どうぞ。(参加者、記入する)

どうでしょうか。大きな文字でお願いします。12～13文字で。だいたいそのぐらいでというかたちでお願いします。それでは皆さん、書けましたでしょうか。それでは、書いたものをどうぞ上げてください。なるべく人がたくさんいる方向に向けていただいて、ほかの人のも見せていただいてください。

いろいろなことが書いてありますね。ここでこんなふうに進めていきます。いま見ていただいて、話を聞いてみたいというのがあれば、ぜひその人の話を聞いてみたいと思われます。例えば、こんなふうにです。お名前をお願いします。

坂　東： 坂東と申します。

司　会： 坂東さん、書いたことを読んでいただいて、これの意味はというかたちで説明をお願いいたします。

坂　東： 坂東と申します。静岡県富士宮市から来ました。私は身近にいるいろいろな生き物を大切にするし、その情報をみんなに教えてあげる。ほらこんなに周りにたくさん生き物がいるよ。意外とみんな「ああ、知らなかった」。野鳥ですとかそういうものです。はい。

司　会： ありがとうございます。それではもう一度上げていただいて、さらに聞いていこうかと思います。この中で都留市内に住んでいらっしゃる方、そのまま上げておいてください。あ、来ましたね。それではどれか聞いてみたいのはありますか。どなたでもいいですよ。発言していただいて結構です。どれを聞いてみたいですか。では、すいません、お名前、よろしいですか。

下　澤： シオジ森の学校の下澤といいます。私は昨年3月に退職しまして、いま嘱託である仕事をしています。その中でいろんな方たちと出会うんですが、最近、とみに当たり前のことがお互いに当たり前にできなくなったのかなあと思うことがたくさんあります。ですから、私自身、心していることとして、当たり前のことを当たり前にできるようにいつもしていこうと、こんなふうに思っています。

司　会： なるほど。その「当たり前」のところというのはもうちょっと説明していただいてよろしいですか。

下　澤： 例えばですね。この中にきっと「あいさつを」と書かれた方があるでしょう。それから「命を大切に」って書かれた方もあるでしょう。私は大月市に住んでいるんですけれども、都留市と変わらず、決して都会だとは思わないけれど、最近、隣近所のつきあいが非常に薄くなってきている。たまたま若い世代の方たちから、「うまく隣の方と話ができないんだけれど、同じ子どもを持つお母さんと話をしたいんだけれど、どうしたらいいんでしょう」なんていう相談も受けることがあります。ですから、こうした人のつながりのようなことですね。やっぱりうまくできるような世の中、地域にしていけたらなあと思いますけれど、私一人の力ではどうにもなりません。皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

司　会：　ありがとうございます。(拍手) もうひと方、お話しいただければと思います。それではそちらの方、お願いできますか。お願いします。ではまず何と書いたかを出していただきましょう。立っていただいてみんなに。

男　性：　普通に直感で「人とのかかわり」って書いたんですけど、地域で大切にしていることといったら、例えば、そんな深いことではなく、大家さんと話をすることだったり、行きつけの店、例えばスーパーとか食べ物屋でいいんですけど、そういうところで人と会って、その場かぎりの人間関係じゃなくて、例えば、「おいしかったです」と言ったり、「いつもありがとうございます」というお互いの感謝の心とかを忘れないような意味で書きました。以上です。

司　会：　ありがとうございます。(拍手)

地域で皆さんが大切にしてくれることはたぶんいろいろあると思うんですね。心にとめておきたいと思いますので、もう一度上げていただいて、ほかの方のを見ていただいてもよろしいですか。どうでしょう。もし、あればこれは聞いてみたいなあというのがあれば、ぜひ聞いてみたいと思うんですけれども、どれかありますか。では、後ろの方にも見せてください。では僕の指名権があるので、僕が指名してしまいますけども、今泉先生、どうですか。何て書かれましたか。

今　泉：　私の場合は、大切にしていることっていうので、ことがらみたい。だから、育っているものとか、育っている状態とかですね。それから、なつかしいものとかですね。自然というのは全体なんですけれども、地域そのものですね。大切というか、興味をもって見守っているという意味です。

司　会：　ありがとうございます。何かもうちょっと説明を聞きたいと思うんですけれど。

今　泉：　そういうものに惹かれるという意味です。

司　会：　ありがとうございます。それでは、皆さんが大切にしているのは何となく分かったんですけれども、先ほど話の中にありましたけれど、自然と人の関係とか、フィールド・ミュージアムの中で重要だと言われておりますけれども、２番目の質問は答えにくいかもしれないのですが、皆さん自分なりに答えを見つけてみたいと思います。それでは、二つ目にいきますので、ページをめくっていただいて、そこに書いていただきます。それでは２番目の質問をお願いします。

２番目の質問、「持続可能性って何ですか」。これは自分なりの回答でけっこうです。12文字か13文字ぐらいでお願いします。(それぞれ記入)

司　会：　みんな何て書いているんでしょうね。それでは、挙げてみたいと思います。ルールを変更させていただきたいと思います。私が一人目を指名しますので、次の方の指名権はその方に委ねたいと思います。それではいきたいと思います。見せてください。周りの方と見比べていただきたい。おもしろいですね。いろいろなのが出ていますね。「無理をしないこと」、これ、おもしろいですね。それでは、一人目は私のほうから指名したいと思います。では、一度下ろしてください。いま書いている最中でこのへんから笑い声が聞こえたりしたんですけれども、その意図を聞いてみたいと思います。では、お願いします。何と書きましたということで。

山　口：　「忍耐」です。

司　会：　その心をお願いします。

山　口：　道志村でNPOをやってます、代表の山口と申します。私はもともと道志の人間ではなくて、10年ぐらい前から移り住んでます。陶芸をやっています。田舎でのんびり陶芸でもやろうかと思って、浮世離れした気持ちで来たのが運のつきで

今いろいろなことをやっています。道志へ来るきっかけになったのが、環境教育を以前からやっていまして、それは仕事の関係でやっていたんですけれども、それで道志の方たちと手を取り足を取り、環境問題について取り組んでやっていこうと思っているんですが、やはりなかなか継続しませんね。持続可能というのが何なのかというと、もう私にとっては忍耐しかない。耐えてます、ということですね。

司　会：　どんなところに耐えられているんですか。

山　口：　やはり道志を知っている方がここにいられるとちょっとまずいんですが、道志の方いないでしょうね。地形から見ても、東西に長いんですね。アメーバみたい、ゾウリムシみたいな格好をしています。神奈川から山中湖に至まで27kmです、道志七里と言います。その中で言語も違えば思想も違うという神奈川寄り、山梨寄り、その中間、山猿みたいな山賊みたいなのもいたりして、そういう部落がまとまりきらないんですね。

それは僕としては、村だけの話ではなくて、今後、日本、世界中にいろいろふりかかってくる問題が凝縮してあるという気もしているんです。村だけの話ではなくて、持続可能というのが要するにどうやって行われるかというのは、やはり耐えてもらわないといけない部分がけっこう出てくると思うんです。食の問題に関しても、エネルギーの問題に関しても。

そういうところをどれだけ皆さんが耐えられるか。私も含めて、人類がどのくらい耐えられるのか。そこに明るい喜びと遊び心をもってやっていくのが持続するポイントかなと。まずは最初は耐えなければだめでしょう。

司　会：　まず少し我慢しなさいと。

山　口：　ええ、もういろいろやりすぎましたからね。もう、いいでしょうと。原始共産主義でもいいんじゃないかと思ってるんですけれど、そういうところですね。

司　会：　ありがとうございました。(拍手)

それではもう一度挙げていただいて、今度はご指名していただくというふうにしたいと思います。では皆さん見えるように。

山　口：　わくわくおもしろい。

司　会：　「楽しい、わくわく、おもしろい」、どれでしょう。あ、ここですね。お願いします。

鈴　木：　愛知県からきました鈴木です。「楽しい、わくわく、おもしろい」、まったく逆の発想なんですが、やっぱり好きこそものの上手なれ、まず好きであることが第一条件だと思ってます。でなければ、本当に先ほど忍耐とおっしゃってましたが、耐えるというのは長続きしないと僕は思います。やっぱりおもしろいということがあって始めて継続性が出てくると考えますし、体験していくなかで、いろいろな新しい発見をどんどんしていくというのが継続する力になるんじゃないかなと思います。よろしいでしょうか。

司　会：　ありがとうございます。それでは続いていきたいと思います。指名はちょっと待っていただいて、今はどうですか。私も今どうしてもしゃべりたいんだというのがありましたけれど、ありますか。

小　宮：　すいません、さっき話してまたなんですけれど、好きこそものの上手なれと言ったら、うんとうなずいた人がいたんですけれど、その人にちょっと一言聞きたいんですが、ハーモニカ名人の方です。

司　会：　ではハーモニカ名人、お願いします。

男　性：　僕は子どものころからうちで犬を飼っていまして、いまでも2匹いて散歩をするんです。たぶん小宮くんの新聞配達と僕の犬の散歩と行き会うんです。犬の散歩に行くときもほとんどハーモニカを持って行きます。散歩でまずよかったなと思うのは、やっぱり自然とか動植物が好きになったこと。それで同時にハーモニカを持って行って、10歳のころからずっと離していません。だから一応、人前で多少、耳ざわりかもしれないけれど、聞かせるくらいのことはやっています。だからやっぱり持続可能というのは好きであることかな、と思います。以上です。

司　会：　なるほど。ありがとうございます。（拍手）どうでしょう、好きなことだったら続けられるんじゃないかということが出てきました。どうですか。今しゃべりたいという人、いますか。それでは次に進みたいと思います。もう一度挙げていただいて、また指名していただくようにしたいと思います。では、真ん中に見えるように見せてください。

司　会：　自分がしゃべりたいという人は揺らしたりなどしてみてください。縦糸と横糸、行きましょう。よろしくお願いします。

重　原：　大学の事務局の重原です。都留市出身ということで、地元に住んでいる人間としては、地域のことで話をしたいと思います。先ほどの小宮さんの話の中で縦糸と横糸の話をしていましたね。なんか仕組みがあるというか、魂胆があるということで、非常に興味深く聞いていました。

私は地域でお神楽をやっています。引っ越してそこでお神楽を始めたんですけれど、お神楽を始める前までは、なんであんなつまらないものをみんな一生懸命やっているのかなと思ってたんです。いざやってみますと、たしかに難しいし取っつきにくい。そこで私を引き留めておいたのはお酒なんです。

練習が終わったあとで酒盛りがあります。そこでコミュニケーションを図って、そこで普通男の人たちが集まれば、パチンコの話とか賭け事とか女の話とか、そんなことなんですけれど、そこの酒の席ではお神楽の話をするんです。今日の出来はどうだったとか、師匠さんのこういった動きはこうだとか、昔はこうだったとか、弟子村があったとか。それで非常に興味を持ったわけですね。そのお神楽がどこから来て、なんでこんなに長く続いているのか。どうしてこういう振りがあるのか。

その長老の話を聞いていると、おもしろい話がいろいろ出てくるわけですね。アキモトタジマの守まで、ここの谷村の町をつくったお殿様の名前まで出てくるということがありまして、非常に由緒あるものなんだと分かった。何回もそういう話を聞いているうちに、自分もだんだんできるようになってくるわけです。そうするとおもしろくなってくるわけですね。すると、自分が縦糸というのか伝統文化を継承しているんだという気になってくるわけです。非常に高尚な目的にそって、私はすばらしいことをやっているんだと納得できるわけです。

でもその縦糸だけではだめなんですね。続けていくというのが苦しいんです。そこでやはり横糸のお酒です。それでわくわくするわけです。そんなことで、それがあるから、お神楽というのは続けていける。きっと文化というのはそうじゃないかと思うんです。歌を歌うとか、演劇とかそういったものも、そういった楽しみがあって、やり終わったあとのお酒、次に何をやろう、こうやろうというのがあるから、次につながっていくんじゃないかと思います。とりとめのない話ですいません。

司　会：　ありがとうございます。（拍手）僕から質問させていただいてもいいですか。

お神楽をやられているということですね。私、見たことはあるんですけど、やったことはないんです。やってみると、どんなことを感じますか。お願いします。

重　原：　それはやはり神様を感じますよね。ちょっと高尚な話になってしまいますけれど。不思議なメロディーです。皆さん、最初は違和感を持つと思うんですけど、中へ入っていくと本当に自然なメロディーだと私は思うんですよ。それぞれの民族にそれぞれの音楽があるように、日本人である私はやっぱりそういうものが違和感なく入ってくるなっていう。

覚えてしまえば、やっている間、本当に楽しいですね。しかもそのあと、のどが渇くし、やっぱりお酒は楽しみですから、よりおいしいお酒が飲める。より一生懸命やろうというという気になるわけです。そんなことです。

司　会：　ありがとうございます。そうですね。縦糸と横糸で、飴とムチみたいな。そういう印象もなんとなく受けましたけれど。どうでしょう、皆さんご意見、もしくは聞いてみたいことがあれば。よろしいですか。いま発言のチャンスです。どうもありがとうございます。（拍手）それでは、もう一人、皆さんに挙げていただいて、ご指名いただくようにしたいと思います。

重　原：　目が悪くて読めないんですが、安原さん。

司　会：　では、安原さん、お願いします。

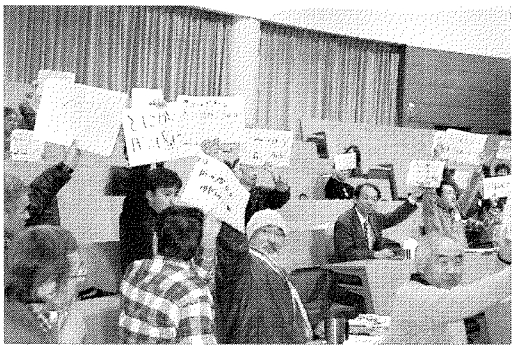
安　原：　4年前に社会学科を卒業しました安原と申します。「だれもが生まれ育った場所で暮らし続けることができること」。人間でもほかの生き物でもそうですけれども、だれかに邪魔されてどこかへ移らなければいけないとか、お金がないから別のところに稼ぎに行かなければいけないとか、開発で住む場所を追われるということがなく、生まれたところで生き続けられること、そういうことが続けられるようにしていくことが持続可能なことなのかという気がして書きました。

司　会：　これは、僕のイメージだと平和とか、そういうキーワードがポーンと飛び込んでくるんですが、どんな感じですか。

安　原：　平和もそうですし、例えば自分が暮らしていることを邪魔されたくなければ、人を邪魔してはいけないし、逆に自分が助けてもらいたいと思ったら人を助けなければいけないとかというものもあるし、経済もそうですし、そういうことも含めてです。そうしたらそういう書き方かなと思ったんです。

司　会：　なるほど。はい、ありがとうございます。どうでしょう。お互いに助け合ってそこで生きていくというニュアンスが非常に伝わってきたかと思います。こういったところにご意見はありますか。よろしいですか。

それでは3問目の質問にいきたいと思います。この3問目の質問は12～13文字で書くのは非常に困難です。ですが、あとで指されたらその12文字、13文字の先をお話しいただくということで、惹きつけるような12～13文字を書いていただければ非常にうれしいです。それでは、3問目、行きたいと思います。「フィールド・ミュージアムでしたいこと、してみたいこと」。これを12～13文字で。それでは、どうぞお願 いします。



皆さん、ペンが止まっていま

すね。考えています。

皆さん、なかなかペンが進んでいない方もいらっしゃると思うんですけれども、一つ付け足しますね。フィールド・ミュージアムで自分がしたいことというのもあるんですけれども、「フィールド・ミュージアムに期待すること」。こんなふうに読み替えて書いていただいてもけっこうかと思います。

さてそれでは、皆さん挙げてみたいと思います。どうぞお願いします。いろいろ出ていますね。これはおもしろそうですね。それでは、一人は私のほうで指名させていただきます。では、そちらの女性の方、お願いします。

女　性： 非常に抽象的かもしれないんですけど、フィールド・ミュージアムでしたいことは、みんなが認め合うことです。どういうことかと言うと、まずフィールド・ミュージアムというのはその場所にある動物もそうだし、生き物もそうだし、人や文化も全部、そういうのを知っていくことだと思うんです。ちょっとかかわり始めてそう思って、いろいろな発見があっておもしろいんですけど。最終的にはそれをはねのけてしまったら意味がないなと思って。それぞれ違うすばらしいものがあって、「それってすてきだね」ってみんなで認め合うことが最終的なゴールかな、と自分の中では勝手に思っています。

司　会： ありがとうございます。なるほど（拍手）それでは、指名権はあなたにあります。それではまた挙げていただいて、皆さん、あちらに見せていただこうと思います。

女　性： 一番遠くの「作り方を教えて」っていう方。聞きたいです。お願いします。

司　会： では、「作り方を教えて」をお願いします。

仁　部： 大月市に住んでいる仁部といいます。作り方を教えてというのは、都留ではこれだけのいろいろな活動があって、今回お話しされた方の活動は本当にすばらしいなあと思って聞いていたんですけれども、大月市でもそういう、人と人とをつなぐような活動や、町の魅力を再発見してもらえるような取り組みとかができたらいいなと個人的には思っているんです。そういう取り組みを大月でぜひ作りたい。それで、作り方を教えてほしいとか、協力してほしいとか、そういう団体ができればいいなと思って書きました。

司　会： なるほど。すばらしいですね。ぜひ皆さん相談に乗っていただければと思います。

仁　部： よろしくお願いします。

司　会： これはこのあとにつながると思うんですね。すごく大切なことだと思うので、自分が力になれるなと思う方、たぶんいらっしゃると思うんですね。後ほど、思った方が直接尋ねるということにしたいと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

それでは、また挙げていただいて、あちらに向けてください。しゃべりたい方はどうぞ揺らしてください。

仁　部： 「エコガイド」と書いていらっしゃる‥‥。

司　会： では、エコガイドをお願いいたします。

女　性： なんか宝くじがあたったような気分ですけど。すごく。

司　会： いいと思います。大丈夫です。

女　性： 私、都留市に住んでおります。鹿留（ししどめ）というところで、すばらしい環境です。もう県道を越えると倉見山の登山道入り口です。ちょっと行くと宝鏡寺の山というのがあるんです。その両方ともすばらしいところで、宝鏡寺の山と

いっても高さはそんなにないんですけど、そこは春になると自然がいっぱい、ヤマブキソウの群落とか、ユキザサとか、自分でも一生懸命、植物の名前を覚えて、遠くから来た人を案内します。運よく私が仕事がないときは、倉見山から下りてきた人を車でそこまで案内して、見せてあげるとすごい喜びます。無理しないで、知っていることだけ、なるべく嘘は言わないで、知らないことは知らないにして。あとは鹿留山から、うちは倉見山に登る人がちょっと前に新聞にそういうフォーラムが出てから、けっこう登る人が増えたんです。運がよく私がいるときは粗茶など差し上げて、どこから来たかとか、根掘り葉掘り聞きます。上までは、近くですので、2時間ぐらいで行っておりて来られます。登り2時間、下りも1時間半ぐらいで下りてくるんです。なぜかと言うと、布団を干してから出かけるんです。あわてて帰ってくるとちょうど布団が取り込めるんです。そんなところです。そこも上まで行くのはたいへんですから、そこの場合は、下でお茶を入れてあげるんです。なるべくそうやって自分のできる範囲で案内をしてやっております。知っている範囲で、足をちょっと飛ばして。

最近一カ所増えたんですけれど、これは夜ですので、あんまり人がいないので、行くことができないのが、おなん淵のホタルなんです。おなん淵のホタルっていうのは、けっこう飛んでおりますけれども、あそこでホタルを見ていると、飛び込むのかと思って、けっこう車が戻ってきたりします（笑）。もう私も高齢ですので、年金生活になっています。ゆっくり無理しないで、なんとか私がいるときは案内して差し上げたいと思っています。

おなん淵というのは、大沢川からくるところですね。それから桂川がぶつかるちょっと手前にあるんです。そこに伝説があるんです。おなんさんっていう。そこの淵がけっこう深いところで、けっこうホタルがたくさん出ます。なんか違うところへ見に行くよりよっぽど多いような気がするんです。

司　会：　それこそが生きる博物館だなあって私、思うんですよ。

女　性：　自分でも植物の名前が好きですからね、そうやって覚えて、人にしゃべりたいほうなんです。そんなことで小さいながらもそんなことをやりたいんです。私もヘルパーやっているんです。ときどきというか、ご飯つくりに行ったり、お掃除したり。そういうことをやっておりますので、私が家にいるときに家の前に来た人はすごく宝くじの状態で（笑）。そういうことですので、もっとそういう機会をつくって、違うところも探してきてやりたいと思います。どうもありがとうございます。

司　会：　すばらしいですね。これが本当に生きているというか、そのものですね。フィールド・ミュージアムなのかなという気がしました。本当にこれは重要なことなので、ぜひ続けていただきたいなと思います。よろしくお願いします。

それでは、ご指名する権利がありますので、皆さん挙げていただいて見ていただければと思います。

女　性：　じゃ、すいません。あの「森を」っていうの。お願いします。

司　会：　「森を」と書かれましたね。

下　澤：　2度目の発言になって申し訳ないんですが、シオジ森の学校をやっていますが、その森の学校を始めたわけをお話しします。この都留市もそうでしょうが、あたり周辺、たいへん森林がありますね。北都留地区ですと、90%が森だと言われているわけですね。ところが住んでいる私たちはその森に本当に誇りを持っているでしょうか。生活に役立てているでしょうか。生活の糧そのものになっているで

しょうか。残念ながら、生活の糧には今できないのが現状ではないでしょうか。

大月市の場合ですと、高等学校を卒業すると、働くところがありません。大学を卒業しても、帰ってきて仕事がありません。だから、短大附属高校を出ても、都留高校を卒業しても、みなほかの土地へ去っていきます。じゃあ、どうしたらいいんでしょうね。というのが私にとっての課題であります。その中で、いまある森を本当にきちっと見直して育てていくこと。みんなで育てていくこと。これが一番大事なことだと思っています。たくさんはお話しできませんので、割愛させていただきますが、まずは住んでいる一人ひとりが誇りを持てるように、みんなに森に入ってもらいたい。そして森のすばらしさを知ってもらいたい。森の楽しさを味わってもらいたい。そして、みんなで森を育てる大変さも知ってもらいたい。そして、生活に密着した森になるようにしていきたいと思っています。里山は手がかからないなんていうことはありません。里山は手を入れないから今のような状況になっているということです。どうしていったらいいんでしょうね。

各都市部以外の全国的な状況で言いますと、地域は過疎化がますます進んで学校は廃校に追いこまれています。廃校のあとに残った校舎の建物を地域活動に生かそうとしても、その地域の中では生活ができないということで、若い人はどんどん都会へ出ていってしまうというのが現状です。

この都留市はそうでないのかもしれませんけれども、東京のすぐ隣の上野原市でも大月市でも同じような状況が今、出てきています。だから今みんなの力で森をなんとかしなければ、本当に地域に根ざした生活はできないのではないかということを真剣に考えています。一緒に悩み、一緒に楽しみ、やっていきたいと思いますので、ぜひ力を貸してください。

司　会： ありがとうございました。（拍手）では、もう一人、ご指名いただきたいと思います。ここで、私、話したいという人、いますか。もしいればウインクでもいただければいいなと思うんですけれど、いいですか。では、もう一度挙げていただいてご指名いただくというようにしたいと思います。

下　澤： きっと私の話を補完してくれるでありましょう「森林の間伐」と書かれた方、お願いいたします。

司　会： 「森林の間伐」と書かれておりますね。よろしくお願いします。

杉　本： さっきの方とまるっきり同じ意見なんですけど、フィールド・ミュージアムで今泉先生の山の裏へ行っても、周りを見ても、ほとんど間伐・除伐されていない山林がいっぱいです。ムササビを飼うためには間伐・除伐しないほうがいいのかなと、私も素人なので思いますけど、やっぱりいったん自然林から人間が手をかけた林は人間の手が入らなければだめなんですね。それと、いま里山文化の復元というようなかたちで書いたんですけれど、昔からきている里山文化の復元をして、いま言ったようなかたちで、パーマ・カルチャーのような考え方の中で、生活の糧に里山を利用してシイタケや炭をとって、地域の人たちがいたようなかたちの生活にしていきたい。難しいのかもしれませんけど、いま過疎化になってきているので、かえってそういう活動がやりやすい。嬬恋や馬込の宿が観光で潤っていますけど、あれだって、100年とかその昔は栄えていたものが鉄道が通らなくなったからさびれて、それを長い間、地域の住民が守ったから、いま観光施設として残っていると思うんです。これからいま言ったようなかたちで、われわれがお金をかけないようなかたちで山林の管理、里山文化の復元をすれば、近い将来それが財産になると思うんですね。

今泉先生は覚えているかどうか知りませんけど、3、4年前の今泉先生と話したときに、老人の知恵をきかなければ、いまある山林はみんなだめになる。道路行政などを見ていて思います。私も山に登っていますけれども、塩見岳に登ったときに、林道を造っているんですけれど、これから先、どういう林道を造るのか。50mぐらいの絶壁の道路、どうしてあんな道路を造ってるんだということもあるんです。だからそういうふうなかたちの中で、地域住民がもう少し山林に手をかけるようなかたちで、里山文化の復元をもう少し長い間、努力して、将来に向けた財産となるようなかたちでつくっていけば、若い人たちも戻ってくるのではないかと思って、書かせてもらいました。

司　会： はい、ありがとうございます。まだまだほかに話をしていただきたい方がたくさんいらっしゃるんですけども、時間の関係でこのぐらいにさせていただこうかと思います。

最後に、ミスター・フィールド・ミュージアムがこちらにいらっしゃいますので、今泉先生、何て書かれたかお聞きしたいと思います。

今　泉： 私のは「散歩のスライドショー大会」というものです。究極のフィールド・ミュージアムは、何もなくてもいいということになるかと思います。いろいろな仕組みをつくって、交流の場をつくったりしていますけど、その地域を楽しめるということは、それぞれができるわけですので、いろいろな自発的なことがいろいろに行われると思います。そのときに、一つは、暮らし方として、自分の住みかはありますね。それから自分の畑があったり山があったりするということはあるわけですけれども、当然、地域というのはそれだけではなくて、散歩というか、もっと広い範囲の、自分の行動圏、動物で言えば行動圏になるんですけれど、出歩く範囲というのがあって、そこで探検をします。それは楽しみだと思うんですが、それはそれぞれの人の流儀によって非常に違うんですね。そこで地域に対するいろいろなつながり方をつくっていくと思うんです。このような集まりはそのスタイルのスライドショーをやって交流するといいかなあと思い、「スライドショー大会」ということにしました。それがフィールド・ミュージアムの可能性というか、先の見通しかなと思いました。

ただ、先ほどのお話をお伺いしていると、緊急の心配事として森をどうするかとか、川をどうするかとか、町をどうするかということがあるわけですね。今日は森のことが大きくクローズアップされましたけど、私も森には非常に関心がありまして、車を買う代わりに森を買うということをずっとやっています。車は、私はだいぶ前にやめたんです。1台100万円ぐらいしますので、100万円あると、相当広い山が買えます。

実は余談ですが、このあたりですと、100万円というのはたいした山ではありません。それでも住宅地に比べたら広大な土地が買えますね。そこでどれだけおもしろいことが起こるかとか、自分でも木材の生産ができますし、ムササビの森もできるということですね。私のところはいろいろなかたちで手入れをしています。強間伐といいますか、大急ぎで大きな木を育てたいというところはそうしていますし、ムササビのためだったら、下枝を払って、飛べる空間をつくりますと、若い森でもムササビが棲めるようになります。いろんなことができますね。

ですけど、私の理解しているところでは、木材というのは、お金持ちでないとできない。大資本が動かしています。ですから、一生懸命やっても、お金はどこかにいっちゃうんですね。それが森が荒廃している理由だと思います。ですから、

一つはやはりそうやってそれぞれの人が自分の土地を買う、山を買うというのはいまチャンスです。これからものすごく上がるでしょう。

私は実は岩手のほうに、ある部分の関心を移しているんです。それは自分の望み通りの広い山が買えるからです。このへんですと、坪で2000円、3000円。ものすごく高いです。それでも宅地に比べたら、宅地はこのへんは15万とか20万しますね。宅地を買うというのは本当にバカみたいなものです。すぐ見えているところ、ここと向こうですから。ですからこのへんの方たちはとても変な選択をされていますね。いろいろなことがあります。ものすごく複雑です。岩手へ行きますと、坪10円ですから、見渡すかぎりずっと山が買えて、そこに川も入っています。ですから現実はものすごく複雑な様相をしています。

先ほどの、森は大資本がいるということに対して言えば、材木ですと、そうですけど、そうではなくてキノコとか、山菜は年々収入になりますので、山芋１本3000円で売っていますね。ですから材木なんか育てるよりも毎年何十万年と稼ごうと思ったら、山芋に決まってます。とっても簡単です。

私はいつも毎年、1000個ぐらいはムカゴをとります。山芋のムカゴですね。このへんを散歩しまして、こんなにとります。それで例えば大学のフェンスには全部山芋をやったらいいと思うんですが、それこそ事務局の反対でできません。(笑) 驚くべきことがあります。もうこの大学は山芋の大学というふうに一気に売り出したら、あっという間に２、３年である規模の経済活動ができますね。

ですから、ある点で、森とか土地があればいい。この大学も土地がありますね。そうしますと、柿の木だって大きなポットに植えれば、置けますよね。ですからこのキャンパスを全部、柿の果樹園にするということは、土地がこれだけあるんですから、簡単です。経済的にも計算すればペイするでしょう。だけど、事務局が何と言うか。先ほどから事務局の話が出ていますが、これは市役所から何からものすごいものです。そういうことを言うと、いじわるされます。それで私はフィールド・ミュージアムをやってきたんです。要するに大学の外でやらなければならない。それがフィールド・ミュージアムです。フィールド・ミュージアムの裏話ですけれどね。

でも、森とか土地というのは、ものすごく夢のある空間で、こんな状態でいいわけがないのはもちろんですけれど、ただ基本的には私は人が手を入れれば自然よりよくなるという考え方は間違っていると思います。いま現在荒れていると思うものは人間の表現で言うと荒れているということですけれど、自然はしっかりそこで働いていまして、すばらしい土が育っていますね。そういうことは散歩でよく観察していくと、歴史始まって以来、豊かな土壌がこの荒れているという土地には、今できている。それははっきり言えることだと思います。

ですから、それをどう活用していくかということですね。無理のないかたちでいろいろなアイデアを出して、事務局に邪魔されなければ、それは簡単だと思います。果たして法人化などすると、そういうことがますます大変になるのか、それとも、本当にそういうアイデアが生かせるようになるのか。それはなかなか心配なところなんです。そんなふうに感じております。

司　会： ありがとうございました。(拍手)

座談会はこれにて終了させていただきます。皆さんご協力いただきましてありがとうございます。(拍手)

終わりの挨拶

本学社会学科教授　畑　　潤

お集まりいただいた皆さん、今日は午前、午後と熱心に参加してくださり、大変ご苦労様でした。私は本学の社会学科の教員であるわけですけれども、地域交流センターのフィールド・ミュージアム部門の一員ということで、あいさつの役割をすることになりました。この地域交流フォーラムは第4回目になるわけですけれども、フィールド・ミュージアムのこれまでの取り組みを受け継ぎながら、最初に坂田さんのほうから説明がありましたように現代GPの取り組みということで、いっそうフィールド・ミュージアムの取り組みを深く豊かにしていくという呼びかけ、スタートになる大事なフォーラムであると思います。そういうことで今日のフォーラム全体の流れを簡単に振り返っておきたいと思います。まず、最初に今泉吉晴先生の講演を聴くことができたわけですが、私はフィールド・ミュージアム、それから現代GPの取り組みの双方にとりまして、その思想の探究というものに視野を持つことができたのではないかという思いがいたします。

思想というと硬いですけれども、それぞれの取り組み、実践にはそれぞれの思いというものがあるわけです。そういうある思想的な問いを持つことによって、それぞれの取り組みや実践の間に共通項を見いだすといいましょうか。あるいは自分自身は感づいていたけれども、意識はしていなかったということに改めて思いを寄せるといったようなことは大変大事なことだろうと思います。お互いの中に新しい意欲が生まれてくるということは人間的な大事なことであろうと思います。

特に今日の今泉先生の講演の主題であります「バラはどう呼ばれようとバラだ」という大変印象深いフレーズですね。これはエマソンがシェイクスピアの文言を引用した言葉ということのようですけれども、「バラはどう呼ばれようとバラだ」という、その言葉は今日参加された私たちは忘れがたいものとして記憶に残るのではないかという気がします。

私たちの日常の生活の中には、何かそういう深い問いかけを願うものがあるような気がします。それは全体として遊び、あるいは本当の喜びというものを求めている、そういうことへの言及であったと、私には聞こえました。

それから二つ目に、シンポジウムと総合討論。これは5名の方々が参加してくださったわけですけれども、いくつもの異なる断面を持つ実践活動をつき合わせるということができたと思います。「つき合わせる」と言いますのは「つなぐ」ということになるわけです。具体的には現代GPというのは、「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み」という構想になっているわけですけれども、この地域センターは三つの部門を設けております。フィールド・ミュージアム部門と発達援助部門と暮らしと仕事部門という三つの部門です。フィールド・ミュージアム部門と、暮らしと仕事の部門に大きくかかわる現代GPであるわけですね。その取り組みに関して今日は、山・里・町は象徴的に使っておりますので、必ずしもぴったりということではないのですけれども、小口先生、里ということでは休懇地の利用ということで杉本さん、町・暮らしに学ぶということで奥隆行氏、小宮正廣氏、総括的に北垣憲仁氏が登壇されてご報告してくださいました。聴いておりまして、それぞれに観察の精神というものが生きていまして、じっと対象をよく見るということ、そしてそれを記録する、あるいは表現するというご報告であったわけですし、そういった交流を通して、そこから新しい休懇地を生かそうという取り組みを行うという実践であったわけです。交歓する個ということを通して、そこに何か交流の言葉というものが感じられるような気がいたしました。

ここにも掲げてありますけれども、「つなぐ・はぐくむ」というのがついているわけですが、「つなぐ」ということの意味を、改めてこのフォーラムを通して具体的にイメージしていくことができたのではないかという気がいたします。

最後の総合討論の場でも、みんなで意見を交換することができました。そういう意味で大変よい出会いの時間になったように思います。

それから休憩時間に、外のお向かいの部屋で展示と交流の企画というものを今回持ったわけですが、九つの主催者が展示を試みるということで、エコカフェ、フィールド・ミュージアム、裏山観察会、シオジ森の学校、プロジェクトX、それから『フィールド・ノート』の取材に出てきます天然酵母のパンの取り組みですね。そういったこと。そしてさらに積み木をやってくださった荻野さん。この方は積み木フォーラムのときに活躍してくださったわけですが、偶然にもそのときにも大田堯元学長がここへ来られたのですが、今日も来ておられました。それから岡部鉄工所の薪ストーブですね。このシンポの過去のものに出ていただきました。そういうふうに、この地域交流センターの実践取り組みというものが1回で終わらずにずっと重ねて新しい実りを見せてくれているということが大事な特徴であったように思います。

こうしていろいろな実践取り組みが共有財産として年月をかけて蓄積していくプロセスというものを見ることができたように思います。こういうことで、「つなぐ・はぐくむ」という呼びかけにふさわしいフォーラムになったと思います。

最後に講演をしてくださった今泉吉晴先生、それからシンポジウムで登壇してくださった方々にお礼を申し上げたいと思います。それから、ずっと進行役を務めてくださったアースコンシャスの加藤大吾さんにも、感謝申し上げたいと思います。それからこのフォーラムの開催にあたりましては、学生諸君がたくさん援助をしてくれました。大変ありがとうございました。

最後になりますけれども、フロアからご参加してくださった皆さん、大変ありがとうございました。心から感謝申し上げます。これで主催者といたしまして、私のおしまいのあいさつにさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

活　動　報　告

2007年度

都留文科大学
地域交流研究センター

活　動　報　告

2007（H19）年度

Ⅰ．2007年度の活動について〔概況〕

2007年度は、森博俊・前センター長の言によれば、センター活動の５年目、「第二期」の初年度であったが、その「第二期」の画期が、明確な形を成して現れ出た年度であった。

夏休み前後に採択された二つのGP（文部科学省の競争的補助金）―「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み～フィールド・ミュージアムへようこそ！～」（以下「現代GP」）と「地域を基盤とした教師養成教育モデルの開発～学習支援を通して『子ども体験』の深化をめざす学生アシスタント・ティーチャー・プログラム～」（以下「特色GP」）―は、それぞれフィールド・ミュージアム活動と学生アシスタント・ティーチャー（SAT）事業というセンターの主要な活動をベースとしたものであった。センターがこれまで担い、発展させてきた活動の価値や現代性、特色性、さらに今後の可能性・発展性が高く評価されたわけである。

もちろん、GP事業は大学全体として責任を持って取り組むべき性格の事業であり、本センターの活動とも相対的に独立したものであるが、とりわけ現代GPについてはセンター活動との重なりが大きく、また初等教育学科と社会学科の連携が不可欠であることから、推進組織として「環境教育GP推進委員会」をセンター内に設置することとなった。委員会の立ち上げやGP付特別研究員の雇用手続きなどにおいて、センターは一定の役割をはたしたと言えよう。なお、特色GPについては、事業の性格や当面の担当教員の範囲、教職課程との関係などの点から、初等教育学科内に推進チームを設置して事業に臨むこととなった。

こうしてGPに関連した業務に振り回されることも多かったが、2007年度はまた、各部門の活動やプロジェクトなどにおいて、これまでにも増して学生参加が拡充した年度でもあった。いわば、「学生を乗せる地盤」が整ってきたということでもあろう。『フィールド・ノート』の編集、「シオジ森の学校」での動物観察キャンプ、SATにおける自主活動の拡充、地域情報教育分野での「数学小屋」の取り組み、農業にかかわる講座の実施、商店街活性化のための提案など、さまざまな活動に携わった学生たちの主体性とダイナミックな成長ぶりは、各部門・活動の報告を参照のこと。

また、ここ数年、社会学科の新専攻（環境・コミュニティ創造専攻）の設置準備に伴って休止状態にあった「暮らしと仕事部門」が、新専攻の発足・展開に沿った形で活動の内実を作り出しつつある。とりわけ、これまでの活動で得られた蓄積とネットワークが新専攻のカリキュラムに活かされ、またカリキュラムの幅を広げるために部門活動やプロジェクト活動でウィングを伸ばすという相互発展が見られることは、センターの性格と位置付けを考えるうえで示唆に富む。

年度末に開催した「第４回地域交流研究フォーラム」は、フィールド・ミュージアム部門の周到な企画・準備のもとに大きな成功を収めた（ここでも多数の学生が主体的に携わり、参加者にも好評であった）。なかでも参加者や協力団体の多様性と動員

力は、これまで同部門およびセンターが築いてきた活動の蓄積とネットワークの充実ぶりを反映し、参加者が気軽に意見交換できるスタイルとあわせて、今後、発展的に継承すべき一つのモデルを提示し得た。

このようにセンター「第二期」の初年度は、活動の広がりと深まりの両面において、予想を超える展開を見せることとなったわけであるが、その基盤には、センター設置以前からの取り組みも含めて、地味ながらも堅実に継続してきた活動の蓄積がある。それこそがセンターの強みでもあり、特徴でもあろう。ただし、いまもってセンター活動に直接の関わりを持つ教員や学生は多数派であるとは言えない。センターが挑戦している問題・課題は、本学全体が挑戦すべき問題・課題でもあるとの認識に立って、たとえば環境教育や地域づくりの取り組み、教職課程の拡充など、二つのGP事業の推進とも重ねながら、より多くの教員や学生に意欲的な参加・関与を促していきたい。

また、センター活動が広がりと深まりを見せるにつれて、それぞれの活動の担当者・関係者が全体を見渡したり、相互理解をはかるといったことが、やや後景に退く傾向にあるかもしれない。それだけに、センター活動の「特色」「らしさ」を再認識し続けていくことがますます重要となろう。それらの貫徹こそが、センターの存在意義と価値を高めることにつながるとの確信を込めて、改めてこの間に確認・共有されてきたセンター活動の「特色」「らしさ」を以下に掲げておきたい。

① 三部門を柱とした活動を展開する
② 地域の人々や組織等と連携し、ネットワークを築きながら活動を展開する
③ 現場におもむき、問題に取り組む地域の人々と共同して活動を展開する
④ 一時的なサービス提供に止まらず、地域と本学の双方にとって成長・発展につながる活動を展開する

（文責・西本勝美〔地域交流研究センター長〕）

Ⅱ．各部門の活動

Ⅱ－1．フィールド・ミュージアム部門

はじめに

2007年度は、フィールド・ミュージアムが地域交流研究センターの一部門として位置づけられて5年目となった。2006年度はセンターの一部門としてフィールド・ミュージアムがどのような意味を持つかを探る期間として位置づけ、地域の図書館など社会教育機関との連携や「つみ木広場シンポジウム」、シオジ森の学校や富士急行株式会社との連携事業、地域の写真資料のデータベース化など幅広い活動を展開してきた。こうした幅広い活動を通して、今後部門として取り組む活動内容がしだいに明確になってきた。また、フィールド・ミュージアム部門では、自らを問う博物館機能のために、継続的にかかわるフィールドを地域のなかに持つべきことを確認できた。

2007年度は、コミュニケーションホールの地下につくられたセンターの拠点への引っ越し、現代GP（環境教育GP）の採択、社会学科新専攻の始動などセンターを取りまく環境にも大きな変化があった。その結果、フィールドの案内やインタープリターの要請、地域の方々からの動植物に関する問い合わせ、行政・企業からの連携の問い合わせ（たとえば環境副読本への参加依頼や富士急行株式会社からの連携の依頼など）も急激に増えた。こうした依頼やフィールド・ミュージアム部門に寄せられる期待は、センターにとって地域交流を確かなものとしていく契機となるが、それらの依頼に十分に対応できる体制にはなっていないのが現状である。

環境教育GPの採択により、大学全体の取組としてフィールド・ミュージアム部門外の教職員がフィールド・ミュージアム活動に参加する道を開いた年でもあった。具体的には地域交流研究センターの下に環境教育GP委員会を設置し、教員９人、職員２名、GP特別研究員１人の12人の体制で現代GPに取り組むこととなった。より多くの人により広く参加してもらう基盤が整いつつあるのは良いことだが、その反面、従来のフィールド・ミュージアム部門と、環境教育GPの間での、活動内容のすみ分けと組織的関係性が整理されないまま進んでいるのが現状である。

またより多くの人がフィールド・ミュージアム活動に関わることになればなるほど、本来のフィールド・ミュージアム活動の目的・意味・理念を見失わないよう注意する必要がある。地域全体が博物館・学びの場であり、自然の中の生きものの暮らしや、人の暮らしの在り方を地域から学び考える中で、自然と人の関係を問う、人の生き方を問う、というのがフィールド・ミュージアム活動の根本であろう。フィールド・ミュージアム活動を学内に広く定着させ、地域にその輪を広げてゆくためにも、理念の理解と共有化を今後進める必要があろう。

以下に2007年度の活動内容を整理し、最後に今年度の活動計画をまとめた（各プログラム名は、センター発足時に提出したフィールド・ミュージアムの中期構想にもとづいて記した）。

（１）生きものとの親しみを深める森のキャンパスづくりのプログラム

1）　付属図書館ビオトープの作業を継続した。2006年度までに移植したブッドレアやオカトラノオ、シモツケなどが順調に生長し、より丁寧な手入れが必要となった。６月から10月は１週間ごとに草刈りを行った。今年度は、ビオトープの魅力を全学に伝える工夫を試みたい。さらに、博物館概論、各論の授業とも連携し、ミニ掲示板を設置した。

2）　１号館ビオトープの管理と授業での利用。ゼミで７月に草刈や歩道の手入れ、ゴミ拾いをおこなった。授業内で生物相の調査や自然観察、模擬授業等をおこなった。その結果、アカネズミやドブネズミ、テンなど多様な動物がこの林を利用していることが明らかになった。また環境教育林としての利用を促すために林内にミニ解説板を設置した。今後も解説板、観察装置等の設置、イベントの開催などを進めたい。

3）　「ムササビの森」の手入れの継続。とくに冬期の枝打ち、森のなかの導線作り、観察ポイントの整備を行った。また11月からは１ヶ月に１度の割合で学生対象のムササビ観察会を実施した。巣箱も新たに２個設置し、これらの作業に昨年度同様、宝の山ネイチャーセンターの佐藤洋氏の参加を得ることができた。

4）　『フィールド・キャンパスだより』の発行を継続した。キャンパス内の自然財産の記録と、キャンパス内の自然に親しむきっかけ作りの目的で、2003年から発行している。2006年からはカラー刷りの月刊となり、“教材コラム”、“暮らしの知恵”のコーナーも新設し、学内で配布している。学生・非常勤講師の方々からは好評で、今後も継続してゆきたい。

（２）地域の知恵に学ぶ環境復活のプログラム

1）　十日市場中屋敷地区の果樹園の手入れを継続して行った。また、地主のご協力のもと田植えや麦づくりを実践した。苗づくり、田植え、水見、草取り

など一連の作業を学生が中心となって取り組み、特に麦づくりでは初めて精麦を経験できた。精麦した小麦は2008年２月に開催されたフォーラムでも来客者にパンとして提供でき好評であった。学生にとっても、種植えから収穫までを経験することで生活を取りまく食の現状を実地に学べたとの感想が聞かれた。さらにこの中屋敷フィールドでは、動物観察の拠点づくりやイノシシやサルなど大型獣との共生のあり方を探る研究にも取り組んでいる。

（３）学内のほかの団体との交流プログラム

1）　附属図書館展示コーナーにおける展示活動。附属図書館と連携し展示スペースで２ヶ月に１度、フィールド・ミュージアムの活動、フィールドでの自然の案内などを行った。小口尚良氏が学生、市民と活動している「うら山観察会」の報告ポスターも展示した。授業では、博物館学各論と連携し、「都留の今昔」を企画、１月30日から３月24日までの日程で展示を開催した。

（４）行政、企業、市民団体との連携プログラム

1）　都留市立図書館との共催事業。デジタル化が終了した「奥コレクション」を市民のみなさんにお知らせする展示を行った（10月27日９～11月９日）。

2）　富士急行株式会社との連携事業。都留文科大学前駅の構内に、「チョウの庭」をテーマとしたビオトープを作り、継続した世話をした。ただし、プランターの数が限られているなど規模が小さかったため、今年度はプランターの数を増やす予定である。また、駅構内の待合室では、パネル展示を実施した。特筆すべきこととして、富士急行沿線を特集したフィールド・ノート49号が富士急社内で評価され、富士急行の出資で300部増刷される運びとなった。増刷された冊子は各駅や急行列車の車内に車内誌として配置された。

3）　「シオジ森の学校」との連携事業：昨年同様、プログラム作成委員および講師として坂田が、現地ボランティアスタッフとして学生が参加した。苗木を育てよう、森を育てよう、つみ木の王国、森のキャンプ、間伐材で椅子づくり、オープンキャンパス等、９つの講座に述べ41人の学生が参加した。2007年度初めての試みとして、学生の企画・運営による動物観察キャンプを都留市鹿留川でおこなった。企画・段取り・事前学習と準備・当日の指導などを全て学生主導でおこなうことは学生にとって大きな試練となったが、一般参加者からは概ね好評をいただいた。また学生自身も大きく成長したように思う。

4）　高尾町通りのイタリアレストラン「ブオーノ」におけるミニ展示参加：９月１日の八朔祭りにあわせて「ブオーノ」の庭先で「子どもの遊び」をテーマとしたパネルを制作した。

（５）資料（標本）の整理と保存プログラム

1）　奥コレクションのデジタル化：デジタル化の作業を終え、DVDに整理した。また、データ目録を一部作成した。今後、フィールド・ミュージアム部門がコレクションを管理・活用していく。今年度は、これら写真コレクションに地域の方々の記憶を記録していく作業を行いたい。また活用の仕方も部門で検討を重ねていきたい。

2）　オープン・アーカイブの設立：センター拠点内に、地域や自然に関する資料や標本を展示・閲覧できる“オープ

ン・アーカイブ（資料展示室）”を新設した。今年度は動植物の標本やそのデーターベース化、教材・資料等の整理を進め、一般市民や地域の学校に開放したい。

（6）学生・教員・市民の参加プログラム

1）『フィールド・ノート』の発行：『フィールド・ノート』は発刊から5年目となり、50号から54号を発行した。発行間隔は2ヶ月を目安とし、年5回発行とした。発行部数は500部。県内外の購読希望者も多く、毎号100名ほどに発送した。54号では、現代GPにより全ページカラー印刷とキャンパス周辺の散歩マップが作成でき、好評であった。

2）菅野川の保全活動：2007年度は菅野川流域協議会には参加できなかったが、学生と共にカジカとカワラナデシコ保全のための基礎調査をおこなった。菅野川流域での分布調査をおこなうとともに、地域住民への聞き取り調査もおこなった。

（7）カリキュラムとの連携

1）「地域交流研究Ⅳ」の授業を担当。『フィールド・ノート』での取り組みを活かし、地域の方々へのインタビューを中心に冊子を制作した。完成した冊子は、100部を制作しインタビューでお世話になった方々や地域の方々に配布した。この授業に参加した学生からは、編集を通して地域を改めて見直す契機となった、地域の方々の温かい励ましに支えられたなどの感想が寄せられた。

（8）その他

1）第4回地域交流研究フォーラムの開催（詳細はⅢ－1および本年報の前半部「地域交流研究フォーラム報告」を参照）：2月23日（土）に開催された第4回地域交流研究フォーラムの企画・運営をおこなった。2007年度のテーマは「つなぐ・はぐくむフィールド・ミュージアム」で、フィールド・ミュージアム活動のこれまでと今、そして今後の在り方を市民とともに共有・議論することを目的として開催した。

2）上野原小学校での「つみ木教室」の開催：1月22日に上野原小学校の1年生約100人を対象につみ木教室を開催した。シオジ森の学校との共催であったが、活動の大部分を学生たちが担うことができたという意味で学生にとって大きな自信となったようだ。学生による「森のおはなし」、子どもたちへの働きかけが良かったと好評をいただいた。

今後の課題と展望（2008年度の活動計画）

昨年度同様、引き続き地域との連携事業（市立図書館、シオジ森の学校、富士急など）と展示活動、フィールド・ミュージアムの整備等をおこなっていく。また地域の記録として昔の「野外遊び」に関する聞き取り調査、写真資料の収集・記録・保存をおこなう。また学生や教職員・市民が参加できる自然観察会を年に4回開催する予定である。

これらの活動は、環境教育GPの取組と重なるところが多く、部門としては環境教育GPとの共通部分について中心的に取り組むこととなるが、2年後にGPが終了したときに、フィールド・ミュージアム活動の基盤が整い、長中期的な方向性と見通しが立てられるようにする必要がある。フィールド・ミュージアムを活かすのも動かすのも人である。フィールド・ミュージアムが大学内で、そして都留全体に浸透してゆくためにも、今後多くの人がフィールド・ミュージアムに関わる必要がある。そういう意味で

は人的資源をいかに確保するか、他の組織や団体との協力関係をいかに継続的に築くかが課題となろう。同時に多くの人との関わりの中でフィールド・ミュージアム本来の在り方を見失わぬよう「フィールド・ミュージアム憲章（仮）」の整備をおこない理念の理解と共有化を進めたい。

（文責・坂田有紀子／今泉吉晴／北垣憲仁）

Ⅱ－2. 発達援助部門

Ⅱ－2－1. SAT事業

はじめに

三年目を迎えたSAT（学生アシスタント・ティーチャー）事業は、昨年９月から文科省特色GPの資金的援助を受けたこともあり、その活動が、都留市内のみでなく県内にも広く認知されるようになってきた。

昨年は市内すべての小中学校に、学生を配置し、また多くの学生が参加した。（下表参照）

平成19年度SAT学生配置（学校別）

	Aタイプ		Bタイプ	
	前期	後期	前期	後期
谷村第一小学校	20	15	5	5
谷村第二小学校	10	4	4	11
東桂小学校	30	30	3	3
宝小学校	4	4	2	2
禾生第一小学校	12	12	4	4
文大附属小学校	5	5	—	—
禾生第二小学校	2	2	2	2
旭小学校	2	2	0	0
都留第一中学校	9	9	2	2
都留第二中学校	13	13	0	0
東桂中学校	19	19	2	2

1．取り組みの概要

この取り組みの概要は以下に示すとおりである。

都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティーチャー（SAT）を派遣し、放課後の学習支援と、「学力不振」「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を学生に体験させることによって、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教員養成の深化・発展を図る。

また、この事業を通して大学と小中学校との協力・連携を強めるとともに、現職教員に対しての研究的支援・学習機会の提供を行う。これには大学と学校現場とが共同し、地域をベースにした実践・研究を発展させるためのケース・カンファレンスをはじめとする研究協議会の開催も含まれている。

これらの運営にあたっては運営協議会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行うこととしており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育モデルの開発として位置づける。

2. 昨年度の重点

昨年度特に意識的に努力した点は以下のことがらである。

（1）　学生の「子ども体験」の深化をはかるための方法として、ポートフォリオの活用や具体的な活動を映像等によっても記録し、データベース化をはかる。またこれらの記録を素材としながら、実施小中学校（現場）おける学生指導と大学での授業の連携を目指した。授業としては「学校参加」（Aタイプ）および「臨床教育学フィールドワーク」（Bタイプ）

（2）　本事業は、市内全小・中学校ですでに実施・展開されているが、交通の便の比較的良くない小学校への学生参加が十分には保障されていない現状を改善し、すべての小・中学校で同レベルのプログラムの展開を目指した。しかしこれについては、周知が遅れたために十分なものとはならなかった。

（3）　大学・都留市教育委員会で編成するサポート・チームが学校を巡回しながら、学生指導および実施環境の整備に努めた（教育研修センターに担当者をおいた2名）。

（4）　SAT活動とは直接関係はないが、年度末にこれらの活動全体を総括するとともに、「臨床教育学の知見」をふまえた地域を基盤とする教師養成教育のあり方を探るために「GPフォーラム」を開催し、本取り組みの公表と普及、並びに他大学等の取り組みとの比較・検討につとめた。

3. 活動の内容

①SAT－Aタイプの活動の内容

昨年度は市内ほぼすべての学校においてAタイプの活動を行ったが、ここでは禾生第一小学校における活動を簡単に紹介しておく。

禾生第一小学校へは、前期12名、後期11名の学生を配置し、放課後の学習支援を行った。活動は週一回一時間半程度であったが、それを前半の「学習活動」と「ふれあい活動」にわけて毎回実施した。学習活動のなかでは、手作りのプリントを用意し、児童の関心をひくよう工夫したり、参加学生同士があらかじめ相談をしながら、子どもの状況に合わせて学習を展開できるような努力が見られた。学校側のSAT担当教員のきめ細かな援助を受けながらも、活動の多くの部分を学生たち自身に任されたことで多くの学生はやりがいを感じながら活動できたように思われる。

また、「ふれあい活動」では、学生が考えたゲームや体を使っての遊びを通して、子どもたちが友だちや学生、そして先生たちとの交流を深めることができた。また、学生にとっては授業のなかでは見せない子どもたちの表情を知ることを通して「子ども理解の重層性・多面性」をかいま見るよい機会となった。

なお、これらの活動に対する学校の評価は次のようなものであった。（平成19年度学生アシスタントティーチャー第3回運営委員会2008年2月29日報告資料）

・SATの活動は児童にとっても、指導する学生にとっても充実した時間であった。
・どの学生も意欲的に参加し、将来へのよい効果が出ている。
・学生と児童との活動を通じ、普段見られない子どもの姿を知ることがで

きた。

・学生が入ることで、学校の活性化につながっている。

・AB両タイプとも運営面や方法が改善され、昨年以上の成果が出ている

②SAT－Bタイプの活動の内容（この項のみ文責：筒井潤子）

本活動は、学校現場における子どもとの直接的なかかわりと、その体験を持ち寄り参加者全員でひとりの子どもの事例について検討し理解を深め合う大学でのケースカンファレンスの二つの柱によって成り立っている。

現場での活動は、年間を通し、ほぼ週１回。時間帯は学校の状況によって様々であったが、時間的に可能な学生は、登校時間から下校までのかなり長時間にわたって子どもとのかかわりを持つことを希望し、学校側に受け入れていただいた。活動のあり方は、昨年同様にTTとしてクラスに入ったり、別室での個別指導など学校ごとに様々であった。しかし、その中でも徐々に「困難を抱えた子どもに個別で継続的に関わる」事例が増えてきており、その活動を通して、学生のみならず学校教員にそのかかわりの意味と重要性が理解されはじめ、新たな個別支援の要望などが出され始めたことは、この活動の質的な充実の第一歩と考えてもよかろう。

大学でのケースカンファレンスは、月１回、２名の学生が事例を報告し、全員で検討を行った。そこではその事例の理解と共に、自らの活動の振り返り、SATという立場での果たすべき役割や、「援助」とは何かなど、教員も含めて様々な意見を出し合い「臨床教育学的思索」を深め合う場となっている。

学生の感想から

◆「障害」ではなく、「子ども」を受けとめるということ

SAT－Ｂの活動を経験して自分が得られたなと思うことは、子ども・その子自身を受けとめるということだと思う。前期で活動に入る前、正直特別に支援を要する子・障害を持っている子に対して、構えているというか、気にしていたと思う。だから、教室に入れば、この子はこういう困難があるから…とか、その子を集中的に見なきゃ！と考えていた。結果的に、やはり気になる子は、その対象の児童なのだけれども、障害とその子を切り離して見るのではなく、この子は困難があるけどそれもこの子だ、という障害を抱えた児童という形で接することができるようになりつつあるのではないかと思う。今後の私の課題としては、前回のカンファレンスで、せっかくSATで入っているんだから何かやらせないといけないと思ってしまうという声があったが、私もそういう思いがあると思った。無理に何とかして課題をやらせようという姿勢ではなく、児童のペースを見守って支援できるようになりたいと思った。

◆「特別な存在になること」ではない喜びの発見

SATで入っているんだから、子どもにとって少し頼られる存在でありたいとか、この人なら話せるというような存在でありたいとか思ったりするのは、ただの私の願望です。私は、自分が子どもにとっての特別な存在になりたくて、でも別にそんなふうではない自分にあせりをかんじたり、自分の能力のなさのようなものを勝手にかんじたりしていました。でもきっとそんなことはかんじなくてもいい問題なのだとだんだん思うようになりました。

子どもはいろいろな人の関わりの中

で生きていて、子どもたちの成長過程に少しでも関われているということに、小さな喜びを感じられるようになりました。私が何かしたからといって、子どもに与える影響はとても小さなものです。その小さなものに競争心を見出すのではなく、子どもの成長をいろいろな人と感じられることのほうが素敵ではないかと思いました。今まではきっと、「自分が何かをした」というような賞賛がほしかっただけなのではないかと思います。

こんな風に考えられるようになったのも、SATの経験が、ゆっくり充実した場であったからだと思います。のんびりと活動させてもらえたので、自分もゆっくりといろいろなことを考えることができたのだと思います。1年間、1年生といっしょにたくさん学ばせていただくことができました。こんな貴重な経験をさせていただけて、感謝の気持ちでいっぱいです。

◆「人間と人間が一緒に生きる」という体験

1年間、ずっと彼女の状態や私との関係が良好で、毎回順調に進んでいたわけではない。私は彼女とのかかわりの中で、突き刺さるように傷ついたり、反対に、彼女の成長に喜んだり、さまざまな心の動きを体験した。「子どもとかかわる」ということは、子どもに指示を与えたり、単に仲良しになったりするほかに、大人の側がさまざまな面で大きく心を動かす。私はそのことを実体験として感じることができた。特に、彼女が初めて私に攻撃性を向けてきたときの、私の心の中の揺れ動きは数日経った後でも、消えないほどであった。数日経っても消えないほどのその気持ちは、自分にとってどんな意味があったのか。また、彼女はなぜ、攻撃性を向けてきたのか。そして、そのことによってどういうふうに関係が変化していくのかを、考えるようになった。

当たり前のようであるが、子どももひとりの人間なのである。目には見えない、自己や情緒の成長なくしては、子どもは本当に人間として、成長しているとはいえないのだろう。そして、自己や情緒の発達には、子どものさまざまな側面が付きまとう。もし、否定したくなるような場面があっても、どんなときにも、その子どもと「人間と人間が一緒に生きる」というかかわり方をすることが、大切なのではないだろうか。もちろん、私が経験してきたように、子どもからの攻撃や共感の失敗によって、傷つくこともある。しかし、その自分自身の気持ちをもって、子どもと共にいるということが、「人間と人間　が一緒に生きている」ということなのではないだろうか。そして、それを念頭に置いての「指導」が大切だと考えるようになった。机上で学ぶ「子ども理解」ではない、実感として感じられたことは、私に　とって大きな力になった。

今後の課題

学生は個々に貴重な経験をさせていただき、多くのことを学ばせていただいた。しかし、学生のかかわりや個々の事例を通して学校現場と大学との連携を深めてゆきたいという願いを持ちつつ、実際には現場の先生方にお任せすることの多かった1年であった。SAT担当の先生をはじめ、各校の先生方の負担は大きく、また折々にお気づきの点などをお伺いしながら活動のあり方を見直してゆくといった意思疎通も不十分であった。その点、この場をお借りしてお詫び申し上げると共に、1年間のご配慮に心から感謝申し上げたい。

来年度は、そのような反省と共に、いっそうの質的な充実を目指して、学校と大学の連携を密にし、個々の子どもに応じた対

応が可能となるよう学生配置のシステムなどを工夫してゆく予定である。

平成20年度の計画について

（1）　新たなタイプのSAT活動（4年次においてほぼ全日「学校スタッフ」的役割を行う活動などが想定されている）を開始した。これをBタイプと呼ぶ。これに伴って、従来のBタイプを、Cタイプと名称変更をし、より当初の目的である個別的援助を通しての「子ども理解」を深める学習につないでいくこととする。

（2）　SAT活動を、単なる子どもと接する機会に終わらせずに学生の「子ども体験」の深化を目指すものとするために、「記録化」をすすめ、その体験の研究的検討を学校「現場」および大学においてそれぞれ独自の方法で実施するとともに、それらの検討結果を学生、「現場」教員、大学教員などこの活動に関わる者が共有することを通じて、学生の教師としての「実践的指導力」の向上とともに、都留市における教師養成教育の改善を図ることができ、今後の教育効果が高める。

（3）　GP補助事業を通じて、比較的遠隔地にある小規模学校へも学生が頻繁に出かけることによって、さまざまなタイプの学校での実際を体験することができるようになるため、その意味での多様な学校体験・子ども体験の機会を学生が得ることができるとともに、都留市の教育ネットワークの充実を図る。

（4）　サポート・チームの充実により、学生並びに各学校の多様な要求をフィードバックすることができるようにする。（A・Bタイプのためのスタッフ1名を確保）

（5）　本年度はフィンランド・オウル大学における臨床教育学と結びついた教師養成教育の実態調査を行い、研究的交流を11月に行う予定である。また、これを通じてこの取り組みを国内のみならず、海外の大学に情報発信する。また、そこで得られた新たな知見をシステムの改善に生かし、学生にとってもより実践的・研究的に意味あるSAT活動の実現につなぐ。

（文責・佐藤　隆）

Ⅱ－2－2. 地域教育相談室

（1）活動の概要

地域教育相談室の活動は本年度で5年目を迎えた。公開講座の開催や担当者が研修会の講師として訪問することにより、相談室の存在や役割が徐々に地域に認知されつつあるというのが実感である。本年度行った活動は，大きく分けて以下の6つである。

①来室，訪問，電話･ファックス・電子メール等による相談活動
②教育委員会等の教職員研修のサポート
③校内研究等のサポート
④公開教育講座等の研修会の実施
⑤学校個別サポート（別項「地域交流研究教育プロジェクト」報告を参照）
⑥その他（地域の教育関連団体からの依頼への対応）

（2）相談、研修依頼件数と種別

平成19年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。

①電話＆FAXによる相談活動の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
学級経営・学級集団の育成・授業の進め方	1	0	8	3	12
児童生徒の問題行動についての対応	1	0	0	0	1
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	0	3	12	4	19
研修会の進め方・その他	8	14	27	27	76
合計	10	17	47	34	108

※上記以外の事務的な内容についての対応件数：延べ78件

②メールによる相談活動及び事務処理の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
研修会の持ち方・事務処理	0	10	54	92	154

③来室による相談活動の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
学級経営・学級集団の育成・授業の進め方	2	0	0	0	2
児童生徒の問題行動についての対応	1	0	0	0	1
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	4	0	0	0	4
研修会の進め方・その他	6	1	0	1	8
合計	13	1	0	1	15

④訪問による相談活動（研修会講師）の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
Q－Uによる学級集団の理解と対応のポイント	2	4	10	11	27
Q－Uの結果に基づく学級コンサルテーション	0	2	17	9	28
学級集団育成の具体的な方法についての理論と体験	1	1	11	12	25
その他	3	6	2	0	11
合計	6	13	40	32	91

⑤形態別による相談活動の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
電話＆FAX	10	17	47	34	108
メール	0	10	54	92	154
来室	13	1	0	1	15
訪問	6	13	40	32	91
合計	29	41	141	159	368

＜参考＞19年度に対応した山梨県内からの相談及び研修依頼の概要

	訪問先	研修内容
県関連の相談及び研修	山梨県総合教育センター 学力向上推進協議会	初任者研修講座5年目、10年目研修講座児童・生徒理解講座学力向上研究への助言
各市町村・学校関連	甲府市教育委員会・南都留市町村教育委員会連合会・南都留教育相談ネットワーク・富士吉田市自立支援事業連絡協議会・富士河口湖町立教育センター・上野原市立島田中学校・南アルプス市立若草南小学校・富士吉田市立吉田小学校・同下吉田第一小学校・同吉田中学校	児童生徒理解研修・校内研究会助言・学級経営事例研究会・学級経営に活かすグループアプローチ・自立支援ネットワーク会議座長・教育相談ネットワーク助言者及び事例発表
その他	御坂町ＰＴＡ連絡協議会	保護者対象講演（河村）

（3）地域のニーズについて

例年通り、学級経営上の諸問題についての相談や講師依頼が多かった。個別相談については、来室のケースは少なく、FAXや電話が多かった。

今年度を振り返って依頼の経緯を分析すると、研修会が設定されているので取りあえず可能な内容で依頼をしたという消極的な選択は減少し、児童・生徒の実態に即して必要な研修内容を設定し依頼するというケースが増えている。そのニーズを分析すると、概ね以下の３つにまとめられる。

① Ｑ－Ｕを活用した児童・生徒理解の方法について理解したい
② 自分の学級（学校）のＱ－Ｕの結果を分析してほしい
③ Ｑ－Ｕの結果に対応した具体的なアプローチの方法について知りたい

①は、校内のだれかがＱ－Ｕを知っていてそれを学校全体に広めたいと考えて依頼する場合と、すでにＱ－Ｕを導入したがそのデータの見方が分からないので教えてほしい、とい場合があるようである。②は、Ｑ－Ｕについての基礎的理解は一応できたが、自分の学級の結果を分析するまでには至っていないので分析してほしいという依頼である。③はＱ－Ｕの結果から学級経営の方針は理解できたが具体的な方法がわからないのでヒントになる方法をたくさん知りたいというニーズである。

これは、相談室の開設以来、公開講座でＱ－Ｕの普及を推進してきたことと無関係ではないと思われる。なぜならば、その参加者を中心に依頼が増えているからである。①については教育委員会主催で、②③については学校単位での依頼が多い。②については学校を訪問して行うだけでなく、ニーズを感じた教師がデータを持って来室し学級経営コンサルテーションを依頼するというケースもあるった。この形態は個別に丁寧なコンサルテーションができるので成果につながった。今後の相談室の活動について示唆するものと考える。

②に関連するのが山梨県総合教育センター主催の研修会である。ここ３年継続して同様の企画をしていて、大学院生及びOBとともに協力してきた。参加者にもOBがおり、地域貢献の活動として大切にしていきたいと考えている。

地域別では、昨年度まで少しずつ県内の依頼が増えてきていたのに比べ、今年度は県外の依頼の占める割合が多く、担当者交代の影響が予想される。地域に貢献するためにも、今後はニーズを把握し、対応できる体制をつくっていく必要があると考えている。

しかし、一方で県外を訪問すると主催者にも参加者にも本学出身者が多く、声をかけられる。また、本学で学ぶ学生は全国から来ている。このことから、山梨県を中心に活動しながらも単純にそこで線引きするのではなく、全国とつながる意義があると考えている。

（4）教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室の公開教育講座として、今年度は以下の２講座を開催した。

1） 困ったをチャンスに変える学級経営の極意

①**日時と内容**：2007年６月23日（土）
　Ⅰ部　10:30～12:00「子ども同士のつながりを育てる学級経営の極意」
　Ⅱ部　13:00～16:00「教師のメンタルヘルス」「行列のできる学級経営お悩み相談所」
　場　所：都留文科大学２号館 2101教室
　参加者：106名
②**講　師**：河村茂雄（都留文科大学教授）、深沢和彦（大明小学校教諭）、浅川早苗（禾生第一小学校教諭）、鹿嶋真弓（蒲原中学校教諭）、武蔵由佳（都留文科大学非常勤講師）、品田笑子（地域

交流研究センター特別非常勤講師・地域教育相談室担当)

③**概　要**：Ⅰ部では、NHKの番組「プロフェッショナル」に出演した鹿嶋真弓さんに体験をもとに学級経営について講演をして頂いた。Ⅱ部の前半では河村茂雄教授に教師のメンタルヘルスについて講演をしてもらい、後半は参加者の学級経営上の悩みを募集し、それについて講師陣が総力を挙げて答えるという内容であった。

④**参加者**：この公開講座では、山梨県内外の小中学校、高等学校、養護学校、教員志望学生など、106名の参加があり、講師の学級経営のノウハウを知り、教育実践へのヒントをもらう機会となった。

⑤**参加者の感想から**：現職の教員からは、鹿嶋先生の生き方に感銘を受け、明日からの元気をもらった、OBからは河村先生の講演を聴き学ぶ姿勢を思い出した、また、悩みを抱えた現職教員や教師を目指している学生からは、不安に対応する方法についてヒントをもらった、などの感想が寄せられた。

＜参考＞　参加者の感想（抜粋）

・とても納得することが多かったです。自分が実際現場に入ってみて理想と現実の違いにとても苦しんでいました。　しかし、今回の講座のおかげで自分自身がどのようにやっていけばいいのか、何を大切にしていけばいいのか分かりました。毎日が忙しく、頭の中がごちゃごちゃになっていたのに何かスッキリしました。(20代小学校教員)

・午前中の講座では、中学校の実践の中からどの学校（小・中・高）でも大切である“人の中で人を育てる大切さ”を改めて感じ、参考になる実践が多く学べました。午後も数え切れない感動と学びがありました。(40代小学校教員)

・鹿嶋先生の言葉一つ一つにとても説得力があり、子どもを思う気持ちが込められているのが伝わってきました。具体的なエンカウンターの方法を教えていただいて「これは是非やってみたい」と思うものいくつかありました。実践に結びつけていきたいと思います。悩み出すとどうしてもマイナスの方にしかとらえられず、あれもできない、これもできない…、と悪循環に陥ってしまいやすいものですが、プラス思考とにかくやってみることの大切さを学べたし、ほんの少しの言葉の違いでとらえ方、意味合いが変わることも実感できました。(20代中学校教員)

・非常に勉強になりました。どうしたら生徒を喜ばせることができるか、一人一人を輝かせることができるか、ということを具体的に教えて頂きました。早く月曜日に学校に行きたいという気持ちでいっぱいです。河村先生の講座では「休んでもいいんだ」とほっとしました。学びがたくさんありました。(30代中学校教員)

・現職の先生の技術や考え、ぜひ盗みたいと思いました。子ども同士のつながり、子どもと先生のつながり、先生と保護者のつながりなど、今すごく複雑になっていますが、結局は情熱とか変わりなのかもしれないと思いました（初等教育学科学生)。

2）　データでメスを入る“子ども達の実態”

①**日時と内容**：2008年２月15日（金）

Ⅰ部　18:00～19:00「児童・生徒の集団参加を促す学級ソーシャルスキル・トレーニングのツボ」

Ⅱ部　19:10～20:40「５万人のデータから読み解く子ども達の実態～子ども達は本当に変わったのか～」

場　所：都留文科大学２号館2101教室

参加者：108名

②**講　師**：河村茂雄（都留文科大学教授）、品田笑子（地域交流研究センター特別非常勤講師・地域教育相談室担当）

③**概　要**：Ⅰ部では、学級集団や学校生活を活用してできるソーシャルスキル・トレーニングのミニ体験、Ⅱ部では小・中学生５万人のデータ分析から分かった子ども達の学習意欲、友達関係、規範意識についての講演であった。

④**参加者**：この公開講座では、山梨県内外の小中学校、高等学校、養護学校、教員志望学生など、108名の参加があった。

⑤**参加者の感想から**：現職の教員からは、日頃感じていた子ども達の実態についてデータという根拠を示してもらってスッキリした、学生からは教師としての心構えができた、などの感想が寄せられた。

＜参考＞　参加者の感想（抜粋）

・受講して子ども達の様子と照らし合わせてみて非常に勉強になりました。様々なことを聞いた中で一番印象に残っているのが自分の指導形態を知るということです。人と人とのかかわりがすべての仕事の中で、自分がどんな人間なのか改めて自分に問うてみたいと思いました。(20代教員)

・とても興味深い内容で、普通の大学の教職系の講義では得ることのできない経験をさせてもらいました。河村先生の面白いながらも中身の濃い話を聞くことができて良かったです。(20代学生)

・今年度初めて、Ｑ－Ｕについて、構成的グループエンカウンターについて、ソーシャルスキルについて研究をしました。学級経営のみならず高い学力を子ども達につけさせるのはソーシャルスキルがとても大切だとわかりました。
改めて人間関係づくりの必要性を実感しました。自分自身についても問いかけられた気がしました。(30代教員)

・愛媛から24年ぶりに都留の大学に来ました。そのことも感激でしたが。河村先生のお話に「やっぱり来て良かった」と思いました。本当にありがとうございました。音楽専科で全クラスの授業をしていると良い雰囲気のクラスとそうでないクラスとの授業の進め方にとまどってしまいます。自分が子ども達とどうかかわるのかも振り返りながら、先生の言われる子ども同士が学び合うことができるような授業を音楽を通して工夫していきたいと思います。(40代教員・本学OB)

・短い時間だったのですが、実際の教育現場で実施できるスキルを学ぶことができ、教師の仕事にさらに興味がわいてきました。また、グループを組んだ方が山梨の教員の方で、日頃触れない方とのかかわりが新鮮でした。(20代学生)

3）今後の課題

今年度は土曜一日と平日夜に講座を開催した。仕事を切り上げて夜の講座に参加するのは厳しいという意見と平日の3時間程度だから頑張って参加できるという意見の両方があった。確かに夜だと開始時刻に間に合わず遅刻してきたり、直前キャンセルがあったりするので、スケジュール的に大変であることがうかがわれる。しかし、一方で行事の狭間の土曜日を選び、さらに講師の都合に合わせるのは調整が難しい。参加者の都合も考慮しながら日程を決めて行きたい。

また、今後の研修内容の希望を聞くと、保護者対応についてが多い。しかし、地域に開かれている講座のため保護者を含む教員以外の参加者も予想されるので、展開が難しい。対立せずに連携を目指せるような研修会を考えて行きたい。

構成的グループ・エンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの研修会を希望する人も多い。Q－Uの結果に対応して取り入れることのできる具体的な方法を知りたいというニーズのあらわれと考えられる。今後は、Q－U基礎講座とK-13法による事例研究だけでなく、結果と実践をつなぐスキル講座について検討して行く予定である。

（5）その他教育関係団体との連携

1）　**南都留教育相談ネットワーク会議との連携**：地域の教育，福祉関係の担当者が集まって，連携を前提に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。学校と福祉とカウンセラーが一人の児童（生徒）を協力してサポートしている事例が紹介されたり、それぞれの視点で意見交換が行われたりするので有意義である。2月の会議では、本相談室が発表に当たり、Q－Uを活用して特別支援対象児の在籍する学級の状態を把握する方法について紹介した。今後も地域への貢献活動としても大切にしていきたい。

2）　**NPO親子の心Q＆Aとの連携**：山梨県内を中心に，教育相談や講演などの活動を通して児童生徒とその保護者のサポートを行っているNPO法人である。9月からカウンセラーとしての役目を前任者から引き継いだため、今年度は活動する機会が無かった。次年度は土曜日に2回カウンセリングを担当する予定である。

3）　**富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業との連携**：平成19年10月29月より平成21年3月31日までの期間、運営協議会委員を引き受けており、立場的には副代表である。会議に参加し、事例報告の際の座長を勤めたり、学校支援チームに一員として活動したりしている。発表される事例を通して現代の子どもたちがおかれている状況が分かり、スクールソーシャルワーカーの仕事内容や関連機関との連携の仕方についても学ぶべきことが多い。可能な限り協力して行きたい。

（6）活動のまとめと今後の課題

地域教育相談室がスタートして5年、私が担当して1年が過ぎた。引継ぎをする余裕が無かったため、慣れるので精一杯の1年であった。振り返ってみると計画的に仕事を進めることができず、また、飛び込みの講師依頼が入ったり、同じ時期に講演会が重なったりで事務処理が追いつかず、スケジュールがきつくなってしまったこともある。今後は仕事の質を考えて整理して行きたい。しかし、同じところから依頼がくることが多く、それは地域教育相談室の存在が必要とされていることでもあり難しい問題である。

また、来室の相談は今年度も多くなく、訪問や電話、ファックス、電子メールによ

る依頼の比率が高い。今後は訪問先で来室を勧めながらも、学校現場の多忙さに配慮して活動していきたいと考える。

さらに、本学OBからの援助要請も出てきているので積極的に答えて行きたい。

地域教育相談室では、これらの現状を踏まえ，以下の活動に取り組んでいきたいと考えている。

<H20年度の活動計画>

1）研修会の企画・運営
　・公開講座を年３回程度実施

2）講演・実技研修会などによる学校教育サポート
　・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
　・富士吉田市「問題を抱える子ども等の自立支援事業」連絡協議会への参加
　・PTA活動への協力
　・山梨県総合教育センター主催の研修会
　・校内研修会
　・学生及び大学院生を研修会スタッフとして派遣

3）相談活動
　・教師の学級経営
　・教師・教育関係者個人の臨床的問題
　・卒業生の学級経営サポート
　・大学院生の教育臨床活動のサポート
　・SCの活動へのスーパーバイズ
　・NPO親子の心Q&A

（文責・品田笑子）

Ⅱ－2－3. 地域情報教育

本学情報センターでは、平成10年に市内小中学校のISDN回線によるインターネット接続のアクセスポイントとして本学の設備を開放したことを機に、小学校・中学校の情報教育担当者、本学情報センターの教員・技術担当職員、都留市教育委員会、都留市教育研修センター職員等で構成される「都留市小中学校情報教育研究会」の一員として参加することになった。ここでは、小中学校の教育現場における情報教育に関連する諸問題に関しての討論や意見交換の場として、また、小中学校教員を対象とした情報関連知識習得研修を大学の教育設備を利用して開催してきた。その中で、平成12年には本学情報センターをインターネット接続口とする光ケーブルによる都留市地域ネットワークが設備されたことにより、教育系大学である本学と小中学校が協力した新しい情報教育ネットワークを構築して様々な取組をしてみようという提案が行われ、研究・討議を続けてきた。

このような状況の下で、平成19年度には「情報教育」という一分野をとおして、大学と都留市との地域交流プログラムを実施してきたこれまでの活動は、地域交流研究センターの活動目的である、本学の特色や資源を生かした地域貢献活動においても対応できる取組として、「発達援助部門」での一分野として認めて頂いた。

これまでの主な活動状況は次の通り。

1．平成10年度から18年度まで

・小中学校現職教員情報研修会　毎年夏休み期間中　１～２日間　大学情教育教室
・「都留市情報教育研究委員会」への定期的な出席
・都留第二中学校との遠隔授業
・平成17年12月６日：パソコンクラブとの交流
　プログラム：画面共有による画像書き

込み、沖縄出身学生による地域郷土芸能の映像による紹介、上海出身学生によるパワーポイントを使った上海の紹介

・平成18年10月17日：「特別活動」の研究授業として
対象クラス：2年3組　34名
タイトル：情報モラル「生活の中の著作権」
概要：著作権とは何か、身近な著作権に関わる問題から学ぶ

2．平成19年度の活動

☆ 平成19年6月26日（火）午後3時30分
大学附属図書館学習室
都留市情報教育研究委員会への出席
研修
・研修センターの新備品の説明　山梨リコー
・ホームページの作成について　大学情報センター　杉本
協議
・各校のホームページ状況と都留市ハートフルネットワークの利用について
・平成20年度中学校コンピュータ教室機器入替えに関する要望について
・各小中校との情報交換

☆ 平成19年7月5日（木）午後2時30分
都留第二中学校体育館
都留第二中学校「情報集会」への出席
・携帯電話に関するアンケート結果に基く状況説明
・携帯電話におけるマナーについて
・携帯電話による犯罪との関わり

☆ 平成19年8月22日（水）午後3時
東桂小学校
都留市教育協議会「情報化と教育」研究会への出席
研修「デジタルボードを使った遠隔授業の活用について」大学情報センター　杉本
実践発表
・「見えないマナーやルール―デジタルカメラを使うとき」禾生第一小学校
・「テレビゲームのルール作りから始めるメディアリテラシー」旭小学校

☆ 平成19年10月18日（木）～11月22日（木）午後7時～9時
「平成19年度県民コミュニティーカレッジ講座」の企画・協力
テーマ：「もっとパソコンを活用してみよう！」
講　師：杉本光司／アシスタント：情報センター職員、学生指導員
会　場：2402教室／参加者：75名（延べ）
・第1回　10月18日（木）「デジカメで撮影した写真を加工しよう！」
・第2回　10月25日（木）「年賀状と住所録と作って印刷しよう！」
・第3回　11月　8日（木）「デジタルビデオで撮影した映像を編集してみよう！」
・第4回　11月15日（木）「動きのある楽しいカードを作ろう！」
・第5回　11月22日（木）「動きのあるホームページを作ろう！」

☆ 平成19年12月7日（金）午後4時　東桂小学校
今年度の遠隔授業の実施に向けての協力依頼

☆ 平成19年1月21日（月）東桂小学校より遠隔授業実施の承諾
小学校5年生の児童と都留文科大学への中国からの留学生との交流授業の実施希望があり、国際交流室と協議の結果、実施に向けての了承を得る。留学生への呼び掛けにより、5名の中国留学生の協力を得ることができた。

☆ 平成20年1月29日（火）NTT東日本「大学ソリューション」から、「大学と

地域とのITを利用した教育への取組」についての取材への対応（金子学長、杉本）。

NTT東日本のホームページへ掲載。
(http://www.ntt-east.co.jp/edu/voice/index.html)

☆ 平成20年２月15日（金）東桂小学校との遠隔授業の実施

教　室：都留文科大学　2402教室、東桂小学校パソコン教室

日　程：９時40分～10時25分
５年１組
10時50分～11時35分
５年２組

内　容：事前に小学生が授業の中の調べ学習によって作成した、中国に関する質問をネットワークを通した中継の中で小学生が質問し、それに対して留学生が答えることによって、小学生も身近に中国を理解することができ、留学生も地元の小学生との交流に非常に好感のもてた時間であった。

☆ 平成20年３月１日（土）・２日（日）研究実験クラス「数学小屋」の開講

初等教育学科算数・数学系寺川ゼミとの協同研究プログラムとして、都留第二中学校の１年生を対象とした学力支援を目的とした、対面型授業、遠隔型授業による「数学小屋」を開講した。授業内容は中学校担当教員との協議の結果、中学一年生の「平面図形」と「空間図形」の一部とし、対面型、遠隔型とも同じ日程で実施した。

【対面型授業】３月１日（土）
９時～12時30分
場　所：都留文科大学2102教室
受講者：９名

【遠隔型授業】３月２日（日）
９時～12時30分
場　所：都留文科大学2402教室・都留第二中学校コンピュータ教室
受講者：16名

【日　程】
９時00分～９時20分
ガイダンスとプレテスト
９時20分～10時05分
線対称と点対称
10時20分～11時05分
作図
11時25分～12時10分
折り紙を使って多面体を理解する
12時15分～12時30分
ポストテスト

☆ 平成20年3月14日（金）都留第二中学校

・「携帯電話利用に関するパネルディスカッション」パネラーとして出席（杉本）
・「情報メディア演習Ⅰ・Ⅱ」受講生、情報センター職員も参加

３．平成20年度における活動予定

① 遠隔教育用機器の設置（設置校については都留市情報教育研究委員会で討議の結果、宝小学校に設置することが決定）
② 遠隔教育・交流プログラムの実施（小学校、中学校各１回以上）
③ 市内小中学校教員の情報研修会の実施（エクセルで統計、アクセスによる成績管理等）
④ 文部科学省の教員免許状更新講習事業（遠隔講習システム）への支援
⑤ 小中学校の公式ホームページの作成支援

（文責・杉本光司）

Ⅱ－3. 暮らしと仕事部門

1．はじめに―部門の性格と経過

報告の冒頭に、昨年度報告と同様、まず「暮らしと仕事部門」の成り立ちの特殊性について述べておきたい。他の部門が、先行する諸活動の蓄積や活動実態に即して位置づけられたのに対し、本部門は、地域交流研究センターとして、この地域の暮らしと産業のあり方をめぐって、何らかの提案や働きかけを行うべきであるとの認識から2004年度より取り組みが開始された新しい部門である。

2007年度は主に次の活動を行った。

2．2007年度の活動報告

（1）地域の農業に学生が主体的にかかわっていく仕組み作りを行う

①目的：都留市内には、学生たちや教員らが都留市（役所）や市民から土地を借り受けて、野菜や穀物を作っている田畑が少なくとも８箇所存在する。学生仲間で芋類を中心に三十平米ぐらいを耕作しているグループ、サークルとして本格的に200平米の菜園を手がける学生たち、朝夕の水見を交替でやりながら米をつくるチーム、自然との共生をテーマに伝統的な農法にこだわるグループ等、農に対する考え方、取り組み方も様々だが、じっくり作物を育てる中から、食のこと、地域のこと、自然のこと等、多くの発見を伴う、都留文科大学の立地を活かした特徴的な活動といえよう。

都留市ではこの十年間で、かつては383ヘクタールもあった経営耕地面積が、120ヘクタールと三分の一以下になった（都留市産業観光課資料）。それならば「耕されることを待っている農地」と「農や食に興味があるけれどきっかけがつかめない」という市民、学生とを結びつけようということで、市役所の農政担当者、清水一夫氏が熱心に相談に乗ってくださり、上記のような特徴ある活動が成立している。

しかしながら、持続的な活動としていくためには、素朴な喜びに加え、野菜づくりの手応えや見通しが必要となってくる。幸い、大学の回りには多種多様な野菜の作り手が存在する。そうした「農」の多様性にも触れつつ、自分たちの野菜づくりのスキルアップにもつながる講座を、センターと、野菜づくりのサークル、ソーシャル菜園’sが共催で二回にわたって開催した。

②経過・活動報告（「地域交流センター通信」13号に学生の感想、報告あり）

◇第１回目　加藤大吾氏　12月10日（月）

加藤氏は、パーマカルチャーの実践家であり、「エネルギーの流れを考えて畑づくりをする」という言葉から始まって、ワークショップ的な展開でお話をしていただいた。学生たちは、農業に留まらず、自然との共生や家族、地域の人々との絆の深め方に関心を寄せていたようだ。畑の様子を映像で見せていただきながら、独自の工夫やその背景にある考え方を学ばせていただいた。加藤氏は、畑を、自然の遷移の一段階と捉え、それを「よし、やるぞという気合いに充ちている時期」と表現し、畑がもつ生命力の大きさをわかりやすく示してくださった。

◇第２回目　志村浩弥氏　１月23日（水）

志村氏は、スターランドに経営的な立場で勤務する傍ら、有限会社「ストローハット」を立ち上げ、有機・無農薬野菜の生産、加工、販売を手がける。都留市の構造改革農業特区の一環で、企業とし

て農業に参入した。当初は、スターランドの建物の脇1aで、本に書いてあった通りに、有機肥料をまき、ためしに農作物を植え始め、勉強していくうちに、“農薬の恐怖”を知り、「今の子供たちに良い食べ物を食べさせたい」という願いのもと、事業を開始した。それ以降の苦労や創意工夫について、農業を事業とする際の厳しさも含め、学生たちにわかりやすくお話をいただいた。

学生たちは「50年間に栄養価が1／3になっている。農薬、化学肥料漬けにしてきたつけは大きい」といった議論に頷くとともに、より身を乗り出して聞いていたのは、数々の失敗と試行錯誤だった。例えば、きゃべつ（青虫に食い尽くされて芯だけに（全滅））、きゅうり（アブラムシの大量発生（半減））、とうもろこし（アワノメイガ、アブラムシで全滅）、なす（テントウムシの幼虫に実をかじられる（半減））等の実体験を踏まえて、様々な、自然成分による忌避剤を開発。これらの成分と調合については、学生から事細かい質問が出された。また、農産物の流通についても詳しい紹介があり、有機栽培作物の場合、通常の流通ルートには乗ることができず、しかも利幅が少ないなど、事業としての成立可能性が厳しいことも講じていただいた。

③今後の課題について

こうした講座は、「農」を多様な視点で捉えることにつながり、栽培技術や知識の豊穣化とともに、「農」を守るための自然の仕組み、社会の仕組みを広く学ぶことができ、実践知・経験知とともに社会科学的な関心の醸成と役立つものと思われる。

（2）地域の自営的な仕事について、学生が理解を深め、都留における地域づくりの取組に対する関心を醸成する

①**目的**：地域の「自営」的な仕事への着目を通じて、商工者の現状や当事者の取り組み、施策上の課題を考える。

②**経過・活動報告**：2005年までは、スポット的に取り組んでいた課題であるが、2007年度から社会学科の環境・コミュニティ創造専攻が始まるにあたって、あらためて、地元商店街や観光振興公社の協力のもと、地域の産業や自営の現状に触れる

表1　社会学科環境・コミュニティ創造専攻「フィールド体験」（街の賑わい創出）授業概要

第1回目：地元商店街の成り立ちと、地域で商業を営むということについて概略を理解する
①商店街によって構成される三町商店街振興会の方々からお話をうかがう
②商店街に設けられた共同スペース（三町亭や湧水）等の見学を含め、街歩き
③都留市商工会の方々から、都留地域における商（工）業の概況、商業圏調査をもとにした、都留地域自営業の特徴の把握

第2回目：商店経営についてじっくりお話をうかがいながら、インタヴューのポイントや留意点をつかむ
①飲食店「まあと」、衣料品店「大国屋」等、商店街振興会の役員を対象とした個別経営に関わるインタヴュー
②学生たちが4人ずつのグループに分かれ、各商店に依頼状を持参して、インタヴュー交渉

第3回目：実際にインタヴューを行い記録にまとめ、地域の商工業の課題、可能性について考察する

※三回の授業を一つの単位とし、25名ずつ実施

機会を拡大し、これを新専攻のカリキュラムの一つとして取り入れた。授業内容は表1に見るとおりである。

商店街でのインタヴューを行った学生からは商店街活性化のための試案として「小回りがきくことは小規模商店の強みだが、負担でもある。この点でのネットワークを」や「季節行事を軸とした小中高との連携を」などのアイディアが示された。

③**今後の課題について**：授業実施の途上では、なかば強制的に商店街との関係を作りだすところにとどまっていたが、都留市の「お茶壺道中」の復活に寄せる市民の苦労と情熱について優れたインタヴューを行うなど一定の成果が得られた。また2005年7月の授業総まとめとなる発表会では学生の発表を聞いてくださった来賓の三町商店街振興会元事務局長国井武彦さんと都留市商工会経営アドバイザー鈴木浩史さんからは学生の提案に対し「興味深く、積極的に検討したい」などのコメントをいただいた。

（3）山梨魅力メッセンジャー事業を活用して「地元学」を試みる（「地域交流研究Ⅲ」）

① 目的：この授業の目的は二つある。第一は、水俣市職員の吉元哲郎氏が提唱する「地元学」を手がかりに、地域社会における「資源」や「社会関係」の存在と連鎖を発掘する目を養うこと。第二は、山梨県の魅力メッセンジャー事業とタイアップをしながら、県内の産業・仕事・文化的資源に触れ、そこに携わる人々の言動に学び、「地域との関わり方」を習得すること、である。

② 経過・活動報告：2007年度の「地域交流研究Ⅲ」では、山梨県観光部主催の「山梨魅力メッセンジャー事業」と連携し、「「地元学」を考える」というテーマの下、二回の県内フィールドワークを含む計15回の授業（表2参照）を1月末に終了した。

表2　2007年度都留文科大学「地域交流研究Ⅲ」「山梨魅力メッセンジャー事業」講師一覧

富士山信仰	堀内　亨氏	山梨県史編纂室
富士山の自然	中川雄三氏	動物写真家
環境保全型農業	田中　進氏	（農）サラダボウル社長
山梨の農村都市交流	曽根原久司氏	えがおつなげて代表
山梨のワインづくり	大村忠雄氏	丸藤葡萄酒工業代表
山梨の和紙産業	一瀬美教氏	（株）大直社長
郡内織物の歴史	前田富男　氏	前田源商店専務
山梨の精密工業	小笠原則雄氏	大月精工（株）
観光・環境・地域活性	山本あずみ氏	キープ協会コンシェルジェ
富士五湖地域の観光活性	小佐野常夫氏	富士河口湖町長
フィールドワークⅠ 富士北麓方面（10/27）	①環境科学研究所（自然解説） ②郡内地域地場産業振興センター（見学） ③富士吉田市歴史民俗博物館（解説） ④富士河口湖町根場（災害跡集落復旧）	
フィールドワークⅡ 峡東・峡中方面（12/1）	①メルシャン勝沼工場・ワイン博物館 ②山梨県立博物館（学芸員による案内） ③桔梗屋一宮工場 ④道の駅とよとみ	

（4）行政における自主的な政策立案活動の見学を通じ、自治体の仕事を知る

①**目的**：山梨県庁「森と水の保全に関する条例」研究会の活動を見学し、そこでの意見交換や観察を通して、地域を活かす行政について考える。

②**経過・活動報告**：2007年末山梨県庁の同研究会メンバー青山将英氏（富士・東部林務環境事務所）、小峰泉氏（同）から、大学の学生、教員らと同条例に関する研究を継続的に行いたいとの打診を受けた。2008年2月22日に同研究会と暮らしと仕事部門で甲府市において山梨の森と水に関する講演会を行った。周知が不徹底だったため残念ながら学生の参加は0人であった。

③**今後の課題について**：今後は都留においてインフォーマルな学生と県職員との交流の場を持ちたいとの提案がなされた。また2009年度以降、PIFが導入されている県内施設等で学生インターンを積極的に受け入れたいとの要望が出された。学生が主体的に関れるようなバックアップが必要であろう。

3．2008年度活動計画

1）　県民コミュニティーカレッジ講座の企画・協力（担当：高田　研）

2）　「地域交流研究Ⅲ」：例年通り、「山梨魅力メッセンジャー事業」とタイアップし、外部講師を迎えての講義を計画。同事業の事務局は「NPO大学コンソーシアムやまなし」。

3）　森林再生研修会の開催：外部講師を招き、大学周辺の里山整備についての講話、さらに整備の方法を実習形式で学ぶ。

4）　地域で仕事と関わるきっかけ作り：大学周辺で学生のインターンを受け入れ可能な企業・団体などの開拓を通して、学生が地域で仕事を体験できる下地づくりを行う（平成21年度開講科目社会学科「フィールド・インターンⅠ」の準備を兼ねる）。

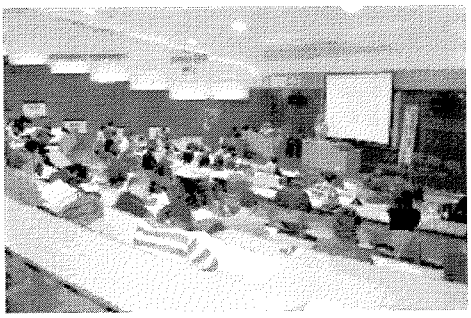
（文責・田中夏子／泉桂子）

Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－1．第4回地域交流研究フォーラムの開催

第4回地域交流研究フォーラムが2008年2月23日（土）に開催された。「つなぐ・はぐくむフィールド・ミュージアム」というテーマの下で、フィールド・ミュージアム活動のこれまでと今、そして今後の在り方を市民とともに共有・議論することを目的として開かれた。企画・運営はフィールド・ミュージアム部門担当。

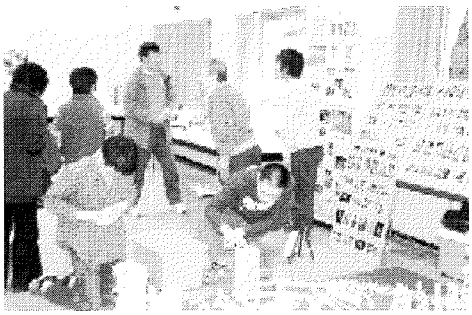
午前中は西本センター長による開催の挨拶、坂田によるGPの概要とフォーラムの趣旨説明の後、今泉吉晴氏による基調講演「バラは何と呼ばれようとバラだ」がおこなわれた。今泉吉晴氏の講演はフィールド・ミュージアム活動の思想、ムササビ観察から始まった実践の歴史、自然を探求することの意味を問いかけるもので、聴衆は、今泉氏の実践に根付いた鋭い洞察力とユーモアを織り交ぜた語りに熱心に聞き入っていた。



午後は、シンポジウム、展示、総合討論がおこなわれた。シンポジウムでは、地域の自然、農業、暮らし、文化を長年みつめ、独自の実践を重ねてこられた北垣憲仁氏、奥隆行氏、小宮正廣氏、杉本清氏、小口尚良氏らに、自らの活動実践内容や今後の夢について語っていただいた。それぞれの発表は非常に個性的かつ示唆に富んでおり、地域で実践を続けることの意義と大変さ、実践をとおして見えてきたことを熱くあるいは静かに語る演者らの姿に会場の参加者も興味深く聞き入っていた。

シンポジウム後の展示・休憩では、初めての試みとして、これまでもおこなってきたフィールド・ミュージアム活動の展示を大幅に拡大し、市民参加型・カフェ式展示をおこなった。

参加団体は、薪ストーブの岡部鉄工所、つみ木広場の木楽舎、シオジ森の学校、市立図書館、フィールド・ミュージアムカフェ、星の里工房、フィールド・ノート編集部、生物ゼミ、プロジェクトX'の9団体。展示会場の設営、カフェの運営は学生らによって2ヶ月前から準備がおこなわれ、その努力の甲斐あって参加者からは大変好評だった。



午後の最後のセッションでは、加藤大吾氏（アースコンシャス）の司会進行によるワークショップ形式の座談会がおこなわれた。参加者が発言しやすく楽しい雰囲気の中で、フィールド・ミュージアムのこれからについて意見交換をおこなった。

参加人数はスタッフも含め110人、都留市民、NPOスタッフ、他大学や企業、本学OB、本学学生、本学教職員など多様な方々に参加いただいた。フィールド・ミュージアム活動の輪を今後に“つなぐ”市民参加型フォーラムとして大変内容の濃いフォーラムであった。なお、本学元学長である大田堯氏がフォーラム当日に来場・参加され、エールを送ってくださったことを記しておく。

今回のフォーラムでは11月から準備を初め、ポスター・チラシの作成と発送、演者の手配とコーディネート、会場・展示・カフェの企画と準備、フォーラム当日と、北垣氏を始め多くの関係者と学生スタッフにお世話になった。彼らがいなければこのフォーラムは成功していなかっただろう。彼らに敬意と感謝の意を表して報告の最後としたい。

＜資　料＞　参加人数とその内訳

表１．職種別

職　種　別	人数
学生	31
卒業生	2
市民	14
教員	
（大学教員）	10
（中学校教員）	1
（小学校教員）	5
都留市職員	8
NPO	8
会社員	2
その他団体	
（森番インタープリターズオフィス）	2
（木楽舎つみ木研究所）	2
（乙女高原ファンクラブ）	1
（三好協力まちづくり会長）	1
（かとうさんち）	1
（多摩動物公園）	1
無記入	21
合　計	**110**

表２．地域別

地　域　別	人数
山梨県	
都留市	44
大月市	6
富士吉田市	6
中央市	1
山梨市	1
北都留郡	1
南都留郡	4
甲府市	2
東京都	4
静岡県	3
愛知県	1
埼玉県	1
無記入	36
合計	**110**

表３．所属一覧

都留文科大学学生	都留文科大学教員
都留文科大学卒業生	東京農業大学多摩川源流大学教員
大月短大地域ゼミ	日本福祉大学教育開発室教員
自営業	河口湖北中学校教諭
市民	八王子市由木西小学校教諭
保育園園長	谷村第二小学校教諭
三好協力まちづくり会長	富士市立原田小学校教諭
村松新聞店	富士急行
都留市郷土史研究会	東芝
学生課職員	木楽舎つみ木研究所
都留市職員	森番インタープリターズオフィス（MIO）
都留市中央公民館	多摩動物公園
都留市立図書館	NPO（団体名不明）
宝の里ネイチャーセンター	NPOシオジ森の学校
アースコンシャス	乙女高原ファンクラブ

<付　録>

アンケートから見えてきたこと

＊評価された点＊

・今泉先生の基調講演が良かった

・シンポジウム：市民が発表したこと。シンポジウムの人選が良かった。

・カフェ：美味しいお茶と蒸パン、学生のホスピタリティーが良かった。

・展　示：個性がそれぞれ出ており面白かった。
一日で閉じてしまうのがもったいない

・座談会：司会進行が良かった。参加者全員で参加できる形式がよかった。楽しかった。

＊反省点＊

・座談会の最後に意見の総括がなかった。主催者としても何か一つの結論を導こうという意思がなかった。（まとめても、形骸化しそうだったので）

・シンポジウムの演者の声が聞き取りにくいという声があった。

・ポスター、チラシの作成・送付、新聞への掲載等、広報に努力したが、参加者のほとんどは、くちコミでフォーラムの開催を知った方々で、次いで、ちらし、新聞、ホームページ、ポスターの順であった。広報の仕方を今後工夫した方が良いかも。

・学生の参加が少なかった。

・展示会場が手狭だった。

（文責・坂田有紀子）

Ⅲ－2. 各種講座の開催

（1）都留文科大学現職教員教育講座

1．講座の趣旨（案内チラシ掲載の趣旨文）

夏季集中講座では、ここ３年ほど教師の子ども理解をめぐる問題を中心に行ってきましたが、今回も『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで開催いたします。

2004年末にPISA調査結果が発表されて以来、日本の子どもたちの学力をめぐってはさまざまな角度から「問題」とされてきました。とりわけ、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのか、一方でフィンランドの子どもたちの「学力の高さ」をどう評価するのかなどが、常に話題の中心にあったことはご承知の通りです。しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策がそれぞれの学校や教師に求められているのが現状だといわざるを得ません。

それでもPISA調査をはじめとしてさまざまな調査によって、一人ひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることが決定的に重要であるということが次第に明らかになってきました。したがって、教師には、授業の場面だけでなく、地域や家庭での生活も視野に入れ、子どもの現実をトータルにとらえながら、学習の意味や学習指導のあり方を深めていくことが求められています。同時に、子どもが楽しく、学ぶことに意味があると感じながら行う学習と、そうではない学習とでは自ずとその効果に違いが出てくることは明らかですが、そのためには深い教材理解と教育方法についての工夫がますます強く求められているといえます。

今回の講座ではこうしたことがらを意識した企画を準備しておりますので、ぜひふるってご参加下さい。

2．日程と内容

①テーマ：教師の子ども理解と学習指導
②日　時：平成19年８月１日（水）
　　～３日（金）
③場　所：都留文科大学
④プログラム（次表の通り）

【第１日目】８月１日（水）　　会場：本学２号館101教室

午前 9:30～午前 9:45	受　講　受　付　（本学2号館）
午前 9:45～午前 10:00	『講座の趣旨について』 説明：佐藤　隆（地域交流研究センター次長）
午前 10:00～午前 12:00	『子ども理解を学習指導につなぐ』－学力問題をどのように見るか－ 講師：佐藤　隆（本学初等教育学科教授）
午前 12:00～午後 1:00	休　憩（昼　食）
午後 1:00～午後 3:00	『子ども理解を学習指導につなぐ』－子どもの心に懐かしさを刻む教育実践－ 講師：山崎隆夫（東京都公立小学校教員）

【第２日目】８月２日（木）　　会場：本学２号館101教室

午前10:00～午前12:00	『国語教育と児童文学』－ファンタジー教材の読み－ 講師：牛山　恵（本学国文学科教授）
午前12:00～午後 1:00	休　憩（昼　食）
午後 1:00～午後 3:00	『国語教育と児童文学』－金子みすずを教室で読む－ 講師：藤本　恵（本学初等教育学科講師）

【第３日目】８月３日（金）　　会場：本学２号館101教室

午前10:00～午前12:00	『数楽しよう！』－暗号を作ろう－ 講師：植村憲治（本学初等教育学科教授）
午前12:00～午後 1:00	休　憩（昼　食）
午後 1:00～午後 3:00	『数楽しよう！』正多角形・正多面体－プラトンとガウスに学ぶ－ 講師：寺川宏之（本学初等教育学科教授）

3．概要と総括

（1）各開催日ごとの参加者は下表の通り。過去に比べて、若干少なめのものとなっている（例年100名程度）。

特に3日目の参加が少なかったことについては、原因を探る必要があるかもしれない。山梨県教育委員会の10年目研修を兼ねており、これとの関係が推測される。また、教職員の現在の勤務実態から見て、もう少し早い時期（7月末）の開催が要望されてはいる。

（2）第1日目を総論的なものとし、2日目・3日目を教科とした。これはこの講座をセンターと初等教育学科との共催としたことにより、各教科の研究成果を今後の講座に反映させるためであり、次年度以降新たな教科に広げていく予定である。各講座の内容に関してはおおむね好評であった。

（3）来年度以降、免許更新講習とのかねあいのなかで本講座をどのように位置づけていくかは検討課題となる。

表：参加者の状況

開催日	事前申込者数	受講者数
8月1日	55名	74名
8月2日	50名	66名
8月3日	34名	32名
合　計	139名	172名

（文責・佐藤　隆）

（2）都留文科大学市民公開講座

1．講座の主旨

「平成19年は、源氏物語が成立して千年目に当たる。それを記念して、源氏物語の魅力を多視点からわかりやすくお話しする」という総合テーマと主旨のもと、下記の次第で講座が展開され、講師も受講者も共に有意義な時を持つことができたことをご報告する。

2．日程と内容

①テーマ：千年を生きる源氏物語―多様な展開―
②主　催：地域交流研究センター
　共催（企画）：国文学科
③場　所：都留文科大学附属図書館4階学習室
④プログラム（以下の通り）
◇第1回　10月10日（水）午後7時～9時
演題：「源氏物語の原点－光源氏と女君たち－」
講師：加藤静子（本学国文学科教授）受講者23名
◇第2回　10月17日（水）午後7時～9時
演題：「源氏物語の光と色－万葉からの文学的系譜－」
講師：鈴木武晴（本学国文学科教授）受講者21名
◇第3回　10月24日（水）午後7時～9時
演題：「おもしろおかし江戸の源氏」
講師：楠元六男（本学国文学科教授）受講者36名
◇第4回　10月31日（水）午後7時～9時
演題：「近代文学の中の源氏物語　谷崎潤一郎と志賀直哉」
講師：古川裕佳（本学国文学科准教授）
　受講者　　25名
　受講者計　105名
⑤受講者の市民の方からは、「講師陣のお話に引き込まれた」「源氏物語を多面的に学ぶことができた」などの感想が寄せられた。

（文責・鈴木武晴）

（3）県民コミュニティーカレッジ講座

今回のテーマは、『今や、家庭にパソコンがある状況は、ごく普通の家電製品がそこにあるような気さえします』ということから始まった。しかし、そのほとんどは電子メールのチェックやホームページの閲覧のみに使われているというのが、その実情ではないだろうか。そこで、パソコンをもっと楽しい作業のできる便利な道具として活用して欲しいと考え、新たにソフトを購入するのではなく、パソコンに初めから入っているものを利用したり、フリーソフトと呼ばれる無料ソフトウェアや、デジカメやデジタルビデオ付属のソフトを利用して、身近な題材を使った画像・映像処理の方法を中心に開催した。木曜日の午後７時からの講座にも関わらず、市外から通ってくる方もおり、また年齢も幅広く、特に高齢者の方々の熱心さには指導アシスタントとして参加した学生たちにも非常に良い刺激を与えて頂いた。

【テーマ】もっとパソコンを活用してみよう！
【講　師】杉本光司
【アシスタント】情報センター職員・学生指導員
【会場】2号館4階2402教室
【時間】午後7：00 ～ 9：00

◇第１回　10月18日（木）参加者：19名
「デジカメで撮影した写真を加工しよう！」
・自分で撮ったデジカメ写真のサイズや解析度を変更する。
・写真に文字を入れる。
・画像の補正（明るさ、コントラスト、色合い等）をする。
・画像の一部を選択・消去・拡大・縮小・回転・変形する。

◇第２回　10月25日（木）参加者：15名
「年賀状と住所録を作って印刷しよう！」
・Excelを使って住所録を作成する。
・Wordを使って年賀状の文書面をデザイン（文字・画像）する。
・住所録を基に年賀状の宛先を印刷する。

◇第３回　11月８日（木）参加者：15名
「デジタルビデオで撮影した映像を編集してみよう！」
・デジタルビデオで撮影した映像を読みこむ。
・映像を編集（タイトル挿入・クリップの編集・特殊効果や切り替え効果の挿入）する。
・ムービーを保存する。

◇第４回　11月15日（木）参加者：14名
「動きのある楽しいカードを作ろう！」
・パワーポイントを使ってバースデイ・カードを作成する。
・イラストを作成する。
・アニメーション効果を挿入する。
・OpenOffice.orgのImpress（プレゼンテーション用フリーソフト）の紹介

◇第５回　11月22日（木）参加者：12名
「動きのあるホームページを作ろう！」
・Flashとは？
・フリーソフト"Suzuka"の紹介。
・決められた枠の中で文字やイラストをスムーズに回転させる。
・アニメーションをマウスで操作する。
・イラストを変形させる。
・ホームページ上で再生させる。

（文責・杉本光司）

Ⅲ－3. 『地域交流センター通信』の発行

1．はじめに

2007年度は、当初計画通り12号（2007年10月24日発行）と13号（2008年３月24日発行）の２号分を発行した。発行部数（3,000部）と配布箇所は例年通りである。

2．第12号の発行について（この項のみ文責：西本勝美）

（1）2007年度前期は畑編集長が学外研究で不在のため、第12号はセンター長の西本が編集を兼担することになった。内容の大枠は畑編集長の原案があり、第３回地域交流研究フォーラム（2007年３月17日）を特集の下敷きにする方向が出されていたが、数回の編集小委員会を持ち検討するなかで、同フォーラムのテーマ「地域にとって大学とは何か」に基づく編集は難しいとの判断に至り、テーマを再設定した。また、センター新体制の立ち上げも重なって準備開始が遅れ、当初の発行予定からは大幅にずれ込み、10月の発行となった。

（2）不慣れな編集体制と力量不足も勘案して、無理のない16ページでの発行とした。特集の柱は、上記フォーラムの論点の一つでもあった「自然学校」の設立ブームに発し、「人と自然をつなぐ」（最終的な特集テーマ）取り組みが大きな広がりを見せる社会現象の一角に、担い手たちの想いと生き様を介して踏み込んでみたい、というところに設定した。特集を兼ねた巻頭言は上記フォーラムの基調講演者であり、現在は本学社会学科の高田研氏に依頼し、以下、二つの自然学校の若き担い手、さらに都留市在住のお二方に特集原稿を依頼した。全体として、現代日本における自然学校の潮流が、社会づくり、地域づくりそのものの潮流でもあるという事情を浮かび上がらせ得たのではないかと考えている。

（3）その他の内容としては、「第38回つる子どもまつり」の記事、社会学科環境コミュニティ創造専攻の新科目「フィールド体験」の紹介・報告、2007年春先に作成した当センターの紹介リーフレットの案内、フィールド・ミュージアム部門による富士急・都留文科大学前駅での展示企画の紹介、を収録した。本学および当センターの地域活動を多様な角度から照らし出すものとなった。

3．第13号の発行について

（1）編集スケジュールの設定

地域交流センター通信の発行は、地域交流研究センター事業の推進にふかく関わり、多くの方の協力を得ながら行なうもので、編集のスケジュールや作業はかなり複雑なものとなる。13号については、2007年の10月中の編集会議で特集などの基本的な事項を検討し、12月末日までの原稿依頼、１月中の原稿入手という作業スケジュールを設定した。しかし地域交流研究センター事業の展開状況と通信特集の趣旨からみて、年明けの第４回地域交流研究フォーラム（2008年２月23日）を大きく取り上げる必要性が膨らんだ。具体的にはこの地域交流研究フォーラムを4ページの紙面で紹介する対応をとったということもあり、編集作業はスケジュール的に厳しいものとなった。

（2）発行ページ数など

13号のページ数については、秋に入ってから編集の検討を始めたということがあり、編集小委員会の原案では20ページ台を設定していた。しかし編集作業の進行とともにさまざまな実践が視野に入るようになり、紙面構成を繰り返し変更しつつ拡充させ、結局36ページのものとした。

また、このような紙面構成の変更を行なったため、一部の方に慌しい原稿依頼の仕方をした。そのような要因と原稿依頼実務に不行き届きの部分があって、お断りしたはずの二つの原稿が最終入稿の段階に到って届き、紙面の増減は4ページを単位とするという条件もあり、どうしても使えないという申し訳ない結果になってしまった。今後は原稿依頼に関しては、メイルでの返答がない場合は、電話などで直接確認していく必要がある。

（3）内容について

編集の基本的なねらいは、これまでの地域交流研究センターの活動実績に光を当てること、採用された「現代GP」の取組を紹介し広く参加を呼びかけること、第4回地域交流研究フォーラムを報告し社会的なものにしていくこと、の三点であり、これら三点を総合的に捉えていくように内容、紙面構成を考えた。巻頭文も事前に時間をかけて相談し、執筆者（今泉吉晴氏）はそれによく応えてくださったし、「現代GP」特集の紹介・呼びかけ文（坂田有紀子氏）も充実した内容のものとなり、編集趣旨が全体に行きわたったよい号になったと思う。

また、社会学科の環境・コミュニティ専攻がスタートするなど、学内外の環境・条件が動きつつあるなかで、地域交流研究センターの課題を適格に把握していく必要性があるが、通信13号は、このことを具体的に考えていく重要な位置を占める号になったといえよう。

なお、これまでの号でも、大学と地域とがもっている広範な「交流」の事実・実績に光をあて発信しつつ共有していくということを続けているが、13号でもその方針を継続している。

4．地域交流センター通信のホームページでの公開など

①この地域交流センター通信は、各号を大学のホームページで公開しているが、その読者から出版物が送られてくるなど、ホームページ公開は少しずつ重要性を増してきているように思う。

②本年度の12号より、大学関係者以外の執筆者に原稿料を出すようにしているが、13号からはカットにもお礼をすることを考えた。謝礼金の単価の設定には戸惑うものがあったが、低価格の発行事業であることも考慮し、暫定的に、12号で設定した原稿料と紙面面積との関連をそのまま適用した。しかし本来はもう少し単価を上げるのが妥当であろう。

5．地域交流センター通信の編集に関わる基本事項

①この地域交流センター通信のそれぞれの記事の背後には充実した実践があり、こうした多くの尽力によって成り立っているということに、この通信の特質があると思う。

②本学をめぐる諸環境はさまざまに動きつつあり、それだけに地域交流センター通信を全学の公共のものとしていくことの重要性は増している。そのためには、地域交流研究センター会議に拠る編集という原則をより重視していく必要がある。

③この地域交流センター通信は、第１号発行以来５年を経過し、すでに地域交流研究センターの存在を学内外にアピールする役割を果たすものになってきているといえよう。当面は、編集におけるマンネリに陥らないように意識しつつ、紙面の充実を図っていくことが課題である。

６．2008年度の発行計画など

①14号（2008年11月発行予定）、15号（2009年度３月発行予定）の２号分の発行を予定している。

②予算編成に関わって、巻頭文とカットの謝礼金基準を再検討しておく必要がある。

（文責・畑　潤）

Ⅳ．地域貢献活動

Ⅳ－1．概説

この章では、本センターの全体活動として、またセンター長が直接の担当者として携わっている活動を二つに絞って報告する。もちろん、本年報で報告されるすべての活動が「地域貢献活動」に位置付けられるべきものであり、さらに言えば、センターらしい「地域貢献」のあり方を表示してもいる。

また、各部門の判断で、もしくはセンター担当教員が個人の判断で携わった地域貢献活動、たとえば講演会や研修会への講師派遣、各種協議会や委員会への委員派遣などは、各部門やプロジェクトの活動とも重なりつつ、年間を通じて枚挙に暇がないことを報告しておきたい。

（文責・西本勝美）

Ⅳ－2．山梨県地域教育フォーラム南都留集会

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の構成員であり、毎年晩秋に開催される「山梨県地域教育フォーラム南都留集会」では、各分科会の助言者として本学教員が参加・協力してきている。本センター設置以後は、本センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度（平成19年度）は11月２日（金）、富士吉田市立明見小学校を会場に第10回目の集会が開催された。日程については、一昨年度来依頼していた、本学教員が参加しやすい桂川祭期間中の開催を実現していただいた。

今回の第10回集会は、「子ども達の教育は地域全体で担う～地域連携・地域交流を深めるために」を全体テーマに、第１分科会：幼保小部会「幼稚園・保育園（所）と小学校との接続を考える」、第２分科会：小中部会「心身共に健やかな成長を願って」、第３分科会：中高部会「授業交流と部活動の交流を深める」、第４分科会：小中高児童生徒部会「小中高の接点を考える」、第５分科会：行政・地域団体・学校部会「地域で子どもの教育を考える」、第６分科会：特別支援教育部会「コーディネーターを中心とした特別支援教育」、第７分科会：PTA部会「心と環境から子どもの安全を考えるⅢ」、第８分科会：特別分科会「人権教育を地域で考える」の８つの分科会が設置され、それぞれ２本程度の実践レポートをめぐって検討・討議がおこなわれた。本学からは、助言者として、第１分科会に高田理孝（初等教育学科）、第２分科会に筒井潤子（初等教育学科）、第３分科会に寺川宏

之（初等教育学科）第４分科会に佐藤隆（初等教育学科）、第５分科会に西本勝美（初等教育学科）、第６分科会に森博俊、第７分科会に吉住典子（初等教育学科）、第８分科会に三井須美子（初等教育学科）と、すべての分科会に本学教員を充てることができた。

本集会は、構成員・構成団体が官民含めてきわめて多岐に渡り、「地域教育」をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有していると思われる。したがって、本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留というより広域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。ただし、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。ここ数年、本学教員が特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつくれないかとの事務局提案も出されている。

この点で、本年度は昨年度に引き続き、10月中旬に、分科会毎にレポーターおよび役員と、本学からの助言者が事前打ち合わせをおこなう機会を設定していただいた。これは主催者側、本学教員側の双方から好評であり、連携が一歩進められたと言える。また、分科会によっては継続的に関わりを持つ教員も出てきている。

事後に事務局がまとめたアンケートによると、各分科会参加者の満足度はきわめて高く（「良かった」の回答が88.5%）、とりわけ助言者の発言や役割を高く評価する回答が目立った。今後さらに、事務局（富士・東部教育事務所地域教育支援担当）との連携を深めながら、より実質的で継続的な共同のあり方を追求したいと考える。

（文責・西本勝美）

Ⅳ－3. 都留市子ども教室事業

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、「都留市子ども協育連絡協議会」（都留市教育委員会社会教育課生涯学習担当）が推進母体となって実施している４年目の事業である。「学校の体育館やグランド、コミュニティセンターなどに安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、文化活動などの様々な体験活動を行う」もの。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、本学教員の西本勝美（初等教育学科・地域交流研究センター長）が大学側のコーディネーターを担当している。

今年度（平成19年度）は、昨年度までに教室を開設した東桂小、谷二小、宝小に加え、後期からは旭小でも教室が開設され、実施地域および学生指導員への要請が拡大した。学生派遣の要請があった年間で計75回の活動に対し、計45回、延べ69名の学生を派遣することができた。

学生指導員の活動の中心を占める「遊び」は、小学校の体育館およびグランドにて放課後に実施されている活動で、小学校低学年の子どもたちを主な対象とし、保護者が仕事を終えて迎えに来るまでの学童保育的な性格も有している。多いときには40名ほどの子どもの参加があり、学生活動指導員がリーダーシップをとる形で、ドッジボール、ポートボール、フラフープ、バランスボールなどの活動を、安全面に配慮して、思いっきり動き回りながらおこなっている。

日程の制約もあって参加できる学生の実数は比較的少数ではあるが、多くの学生が

継続的な関わりを持ち、昨年度に引き続いて参加している学生も少なくない。市側のコーディネーターからも、学生への高い評価をいただいている。学生にとってはささやかな取り組みではあるが、3年次以降の教育実習やSATとはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる2年次推奨の活動として定着しつつある。

なお、今年度から本事業は文部科学省の「放課後子どもプラン」に引き継がれ、従来の委託費事業から補助金事業への切り替えに伴って市町村が費用の3分の1負担を強いられることとなり、県下の多くの事業が存続の危機に晒されているなかで、都留市がいちはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値する。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになると思われる。

（文責・西本勝美）

V．地域交流研究教育プロジェクト

（1）地域の自然と地域の人々から学ぶ実践的環境教育：「シオジ森の学校」との連携

プロジェクトメンバー

・坂田有紀子（本学初等教育学科）
・一柳英隆（本学非常勤講師・財団法人自然環境研究センター）
・協力：シオジ森の学校

1．プロジェクトの目的と概要

小学校における環境教育の重点の一つとして、自然体験を積極的に取り入れ、豊かな感受性を育成することが挙げられている（文部省　環境教育指導資料）。一方、小学校における環境教育の問題点として、専門的知識・技能を持った教員が少ないこと（H13年度　神奈川県体験的環境学習推進事業報告書）が挙げられている。これは現場の教員、元をたどれば教師の卵である学生の自然環境に関する知識や自然体験が圧倒的に少ないことが原因の一つであると思われる。そこで、本プロジェクトでは、教員の卵である本学初等教育学科の学生が、「シオジ森の学校」に大学生スタッフとして参加し、自然環境教育についての実践的な経験を得ることを目的とする。

2．活動内容とその成果

H19年度は、プログラム作成委員兼講師として坂田が、講師として一柳氏が、現地ボランティアスタッフとして学生17人（うち生物ゼミ生9人）が参加した。苗木を育てよう、森を育てよう、つみ木の王国、森のキャンプ、間伐材で椅子づくり、オープンキャンパス等、9つの講座に述べ45人の学生が参加した（表1）。

シオジ森の学校への参加はH17年度から始まったものであるが、過去2年間、学生はスタッフとして講座当日のみ参加し、企画・運営には携わってこなかった。当初、森の学校が学生スタッフに期待したのは、高い専門性、つまり、“自然観察の指導や補助”であったが、実際は指導というより、“子どもの話し相手、講師のアシスタント”が主な役割となっていた。学生たちは子供たちに積極的に話しかけ、子どもたちと上手にコミュニケーションを取っていたという点では、一般参加者やスタッフの都留文科大生に対する評価は非常に高かった。しかし、当初期待されていた専門性を活かした指導という点では不十分な点が多かった。そのためH19年度は、参加学生の意識と指

表１　シオジ森の学校　　平成19年度講座一覧

講座名	講座対象者と内容	期日	講師
AⅠ森を育てよう	①シオジの森散歩 ②小金沢黒岳～湯ノ沢峠登山 ③雁ケ腹摺山～シオジの森登山	5/26, 7/21, 10/27	安富　芳森 (森林インストラクター)
AⅡ森を育てよう	間伐材を活かした椅子づくり	6/23, 11/10	橋村　純吾 (木工作家)
AⅢ森を育てよう	積み木の王国	6/10	下澤　直幸 (大月市教育相談センター)
B苗木を育てよう	植樹をし、その木を育てる活動	5/12, 8/25, 11/10	天野　立実 (大月森林組合参事)
CⅠ森のキャンプ	上野原市西原での手作りテント生活や間伐体験	8/1～2	中田　無双 (北都留森林組合)
CⅡ森のキャンプ	都留市鹿留における動物観察	7/28～29	坂田　有紀子 (都留文科大学)
D枝のオブジェ	枝を使ったオブジェづくり	5/12	千葉　一夫 (画家)
E大きな枝を使って	ゆったり座れる椅子づくり	5/12, 8/25, 8/26, 9/29	伊藤　仁 (画家)

導技術の向上を課題として掲げ、学生に対する事前・事後指導を充実させ、少しずつ学生の役割や責任を増やすことを試みた。その試みの一つとして、H19年度は学生の企画・運営による動物観察キャンプを都留市鹿留川でおこなった。学生12人、一般参加者９人（うち子ども７人）、森の学校スタッフ２人、講師２人（坂田・一柳）の参加があった（表２）。

表2　動物観察キャンプのプログラム

時刻	7月28日　(土)	時刻	7月29日　(日)
9:00	集合　(都留文科大学守衛所前)　・出発	6：00	ムササビ帰巣観察
		6:30	朝食の支度
10:00	開校式と説明（キャンプの趣旨、日程の説明、自己紹介等）	7：30	朝食（オープンサンド）
		9：00	自由時間（クラフト、散歩、川）
10:30	散歩＆クラフト（箸とスプーンの作成）	11:00	後片付け
12:00	昼食（弁当持参）	12:00	閉会式＆解散（参加者の感想、記念撮影、アンケート）
13:00	テントの設置、　風呂準備		
14:00	川遊び＆川の生きもの観察ドラム缶風呂		
16:00	夕食の支度（カレー、サラダ、飯盒炊飯）		
17:30	夕食		
19:00	動物の観察＆ナイトウォーク（ムササビ、野ネズミ、昆虫トラップ）		
21:00	就寝		

3．活動の評価と今後の予定

企画、段取り、事前学習、準備、当日の指導などを全て学生主導でおこなうことは学生にとって大きな試練となったが、一般参加者からは概ね好評をいただいた。また学生自身も大きく成長したように思う。反省点としては、テントの設営、火おこし、ドラム缶風呂の設置など幾つかの活動に関して、事前の準備や練習が徹底していなかったこと、学生のテントが夜騒がしかったこと（スタッフとしての自覚が足りなかった)、等が挙げられる。しかしこれらも結果的には、一般参加の方々に助けていただいたり、教えていただくことで乗り切ることができ、まさに「地域の人々から学ぶ」活動となった。

その他として、「つみ木の王国」では、手作りの紙芝居による『森のおはなし』をしたり、司会のアシスタントもおこなった。3月に開かれたオープンキャンパスでは“森の生きものクイズ”の司会進行や、つみ木の王国の司会進行までもおこなえるようになった。

総合的には、学生にとって森の学校に参加することは、環境教育の実践の場で子供たちとふれ合いながら、様々な分野の専門的知識や技能を習得できる非常に良い経験となっている。また、キャンプの企画・運営や、つみ木プログラムにおける司会進行等を経験することによって、企画力・実行力が少しずつ身に付いてきているように思う。H20年度も同様に、学生によるキャンプの企画・運営、各講座への学生の派遣をおこなう予定である。

(代表者／文責・坂田有紀子)

（2）学校個別サポート

（1）プロジェクトの目的と概要

・いじめ、不登校、学級崩壊などの問題を抱え、校内での独自対応が困難になっている学校及び学力向上、心の教育の推進などの校内研究をより系統的に推進していきたい学校等に対して専門的、継続的なアドバイス、スーパーバイズ等のサポートを行う。
・直接依頼のあった学校と事例の打ち合わせをし、各学校の年間計画に沿って定期的に検討会もしくは研究会を開催し、問題への対応を図っていく。

（2）サポート対象校とサポート形態

① 山梨県上野原市立島田中学校：訪問（担当：品田）
② 富士吉田市立下吉田第一小学校：来室（担当：品田）
③ 神奈川県横浜市立並木第一小学校：訪問（担当：品田）

（3）サポートの概要

・1学級につき年2回のQ－Uアンケート結果の分析と対応のアドバイス
・事例検討会の指導
・延べサポート回数：36回

島田中学校 3学級	下吉田第一小学校 3学級	並木第一小学校 12学級
1－1 2－1 3－1	4－1 4－2 4－3	1－1　1－2 2－1　2－2 3－1　3－2 4－1　4－2 5－1　5－2 6－1　6－2

（4）成果と課題

① 山梨県上野原市立島田中学校

＜成果＞
・1学期に3学級の状態を把握しスーパーバイズと事例研究で対応策を検討し、2学期にかけて実践した結果、2学級ではルールと人間関係が確立し始め、子ども達の満足度が上昇した。しかし、1学級では、ルールの低下が見られたため2学期の事例検討会で対応策を検討し学級経営の修正を図った。
・小規模校だからこそ取り組める集会のアイデアを提供した。

＜課題＞
・幼少期から人間関係が固定している単学級での取り組みについては今後集団の状態と対応させて工夫していく必要がある。

② 富士吉田市立下吉田第一小学校

＜成果＞
・来室により1学級ずつ丁寧に事例検討をした結果、適切な対応策を提示することができ、どの学級もルールが定着し、人間関係が形成されつつあった。また、担任が丁寧な個別サポートを受けた結果、学級分析や対応のスキルの向上が認められた。

＜課題＞
・担任が交代した後の継続的な指導の引き継ぎについては今後の課題となった。

③ 神奈川県横浜市立並木第一小学校

＜成果＞
・12学級の全てが学級の状態を公開し、お互いに事例検討を重ねた結果、どの学級も1学期の状態よりルールや

人間関係が確立傾向となった。
・事例検討や対応策のアイデアをみんなで考える作業を通して、経験の浅い教員とベテランとの交流が可能となった。
＜課題＞
・毎年学級編成をするため１学期の前半はその定着に時間が使われ、ルールの定着が手間どっている。
・個別支援が必要な児童が多すぎ、担任の許容量を超えている学級が複数ある。
・Ｑ－Ｕの基本的な理解が不十分な教師もいるため教師同士の事例検討が問題からずれてしまうことがある。

（５）次年度のサポート活動についてとその理由

・当初の計画では平成19年度から21年度までの３年間の予定であったが、今年度で中断とする。
＜理由＞
・当初予定していた人数のサポートスタッフの確保が難しくなり、サポート体制を維持していくことができない。
・責任者である河村茂雄が退職することになったため特別プロジェクトを継続するのが困難になった。
（代表者・河村茂雄／文責・品田笑子）

（３）障害を持った人びとの、地域での就労にむけた支援のあり方について

プロジェクトメンバー

・田中夏子（代表・本学社会学科）
・森　博俊（本学初等教育学科）
・平林祐子（本学社会学科）

１．プロジェクトの目的

就労機会の創出や就労環境の改善は、障害者を持った人びとが、地域で暮らしていくために不可欠の要件の一つである。本プロジェクトは、障害者就労支援の実践的な研究と、地域の人々との学びあいを目的とする。具体的には、障害を持つ当事者及びその家族、支援者、さらに事業者を含むネットワークの形成によって、立場の異なる関係者が意思疎通を深め、狭義の福祉的就労にとどまらない働き方をめざした、実験的取り組みを行っていく。また、そのプロセスに学生の参加を促すことによって、理論的にも、経験的にも「共生」に対する学生たちの理解を深め、市民としての、共生的な生き方を考える機会とする。

なお、プロジェクトの遂行にあたっては、外部協力者として、「親の会」の皆さん、知的障害者通所授産施設　東部授産園関係者、都留市社会福祉協議会、東部圏域地域療育事業関係者より、協力、アドバイスをいただいている。また、2005年以降、上記協力者と大学関係者とで、「地域で、障害を持つ人たちの働く場を創るためのネットワーク」を構成し、日常的な交流および学習会、視察研究等の開催を行ってきた。

２．2007年度活動概要とその成果

（１）活動課題

本プロジェクトは、2005年度までは「地域交流研究センター」の「暮らしと仕事部門」として位置づけられていた活動を、2006年度以降、プロジェクトに移行して継続的に取り組んできたものである。したがって、2007年度以前の経過については、『地域交流研究』第3号をご参照いただきたい。

昨年度末の段階で、2007年度については、次の三点を課題とすることとした。

◇課題１　「共生の地域づくり」をめぐる講座の企画・開催

第一の課題は、地域から、様々な局面で学生によるボランティア活動の要請があるものの、これまでのようにボランティア募集の貼り出しをしたり、個別に心当たりの学生に働きかけをする、といった手法では、対応として不十分であるため、やや系統的な学びの場が必要ではないか、との認識で設定した。また学生のみならず、市民に対しても、「共生的」な視点を共有してもらえるよう、働きかけをすることとした。

◇課題２　「就労支援」をめぐるスタディーツアー、学習会の企画・開催

第二の課題は、就労支援ネットワークの活動として、障害者に対する理解・関心が必ずしも高いとはいえない都留地域において、各地の先進的な取り組みや考え方を紹介しながら、「共生のまちづくり」への志向を高めることを目的として設定した。特に事業関係者に、就労支援の優れた実践を一緒に見てもらうことで、ネットワークの仲間となっていただき、実践的なアドバイスを得ようというねらいがあった。

◇課題３　「新しい働きかた」を考える回路づくり

第三は、上記の第一、第二に比して、長期的視野にたった課題である。第一の取り組みによって、日常的に「共生」が意識され、また第二の取り組みによって、「就労支援」のあり方が、必ずしも「福祉的就労」から「一般就労」という回路に限られず、むしろ「一般就労」の側にある通常の働き方のほうを相対化したり、「福祉的就労」そのものを仕事創出につなげたりといった可能性が共有されるならば、その次の段階として、障害のあるとなしとに関わらず、人々が大事にされる働き方への関心が高まることとなろう。こうした、「働き方」の見直し意識が、若い層（学生はもとより地域の高校生）にとっての仕事に対する考え方や、キャリア教育に対する問題提起にもつながればと考えて設定した。

（２）2007年活動報告

①問題関心、情報の交換・共有（課題２，課題３）

１．に述べたネットワーク関係者による月例ミーティング８回によって、当事者、関係者の関心や行政の動向等について情報交換を行った。ミーティングの実施日は以下のとおり。開催時間は夜７時～８時半、場所は授産施設「みとおし」。４月19日、５月17日、６月21日（県外研修プログラム第一回目の検討）、７月26日（ボランティア養成講座の検討）、９月27日（市民及び学生むけに障害を持った人と仕事を支え合う活動入門講座の検討）、10月25日（東部圏域の地域療育コーディネータより、「東部自立支援協議会」についてレクチャー）、12月13日（県外研修プログラム第二回目の検討）、１月17日（マナー講座の検討、県外研修に関する情報交換）

②学生を交えた活動・学習会（課題１、課題３）

学生に対し、ボランティアやフィールドワークを通じて、市民としての共生的視点を醸成することを目的に、以下３つの活動に取り組んだ。

１）　第二土曜日のレクリエーション活動（学生の自主的な活動）へのサポート

２）　イベント補佐（４月28日「みとおし」都留市ボランティア祭り出店のための仕込み手伝い（学生参加者２名），４月29日当日手伝い（学生参加者２名）

３）　学生による県外でのヒアリング、視察

・8月21日　都留文科大学社会学科地域社会論ゼミで、木更津市のコミュニティビジネス拠点「Lets木更津」にて、障害のある青年が運営する喫

茶店（精神障害者共同作業所hana）の見学とヒアリング。

・8月22日　都留文科大学社会学科地域社会論ゼミで木更津市のNPO組織「サポートあゆみ」ブルーベリー農園にて、知的障害者とともにブルーベリー農園経営をする飯田喜代子さんからヒアリング、農園見学。

③山梨県版ジョブコーチ養成講座への参加・意見交換　（課題１，課題２）

1/12	障害者就労支援施策	厚生労働省障害福祉課
1/26	障害者雇用概論①	伊勢丹ソレイユ／NPOジョブコーチネットワークスタッフ
2/2	視角障害を持つ人びとへの就労支援	有）アットイーズ／日本通訳士協会
2/16	知的障害を持つ人びとへの就労支援	株）共進／有）ヴィ王子
2/23	身体障害を持つ人びとへの就労支援	ピアサポート（株）／ライフサポートなごみ
3/1	精神障害を持つ人びとへの就労支援	住吉病院／有）吉原
3/22	発達障害を持つ人びとへの就労支援	宇都宮大学福永教授／（株）オギノ
3/29	障害者雇用概論②	NPO浜松ネットワークセンター

上記講座は山梨県が主催したものだが、ネットワークのメンバー3名が常時出席をし、全国の就労支援の動きや、地元、山梨での取り組み状況について、第一線で活動する当事者や支援者から直接話しを聞き、知見を深めた。また、講座開催後の話し合いで、全国で行われているこうした活動を、どのような形で都留に根付かせることができるのかの議論もあわせて行った。

④県外への視察研修（課題２）

全国の先進的な取り組みを実地に訪ねることで、都留で活かす方途を探ることを目的として、二回の県外視察研修を開催した。

1）　神奈川県横浜市－2007年7月30日：社会福祉法人電機神奈川福祉センター障害者雇用部会「ぽこ・あ・ぽこ」50名の通所授産施設

労働組合が主体となって立ち上げた雇用促進の組織。企業を定年退職した人が職業指導者として関与。福祉的な活動経験はなくとも、「企業的環境」を高める点で協力してもらう点が特徴。「福祉」以外の入り口が大きいことを確認できた。特に治具の開発など、生産効率を上げる創意工夫が多くなされていた。平均工賃は一人3万円。額は三ヶ月に一回見直し、本人と話し合いながら、決定していく。すべて外部からの委託。自主製品はもたない。夕方以降は、料理教室、金銭管理教室、パソコン教室などを開催し、生活面の充実をはかっている。

2）　長野県上田市－2008年２月17日：シェイク（生活・就労支援センター）

ハローワークとの連携、生活支援を重視した就労支援の実態、地元民間業者との提携等ヒアリング。たとえば、地元の民間ホテルが宿泊客減という現実的な課題もあって、客室の一部を知的障害のグループホームとしてスペース提供（個室だけでなく共有スペース

を含む)。特に地域資源の活用の際、それぞれの関係者(市町村、親の会、学校、保育園、医療機関、民間企業)とどのような関係づくりをしていったらよいか、示唆いただいた。

⑤自主講座「マナー講座」の企画・実施(課題1)

第1回「接客の仕方」講師　都留市バーミヤン店長(2008年2月実施)

第2回「電話のかけ方・受け方」都留市元NTT電話交換手コンクール審査員　関口幸恵さん(2008年3月実施)

第3回「フラワーアレンジメント」(2008年4月実施)

上記は、仕事をめぐるさまざまな課題について、地域の人に講師になってもらい、授産施設で働く人たちと積極的な関係を持ってもらうという企画であった。いずれの企画にも、授産施設の社会人のみならず、外部からの参加者も加わって賑やかな講座となった。

これらは、第一に働く側から出された素朴なニーズ「電話が鳴ると怖くて取れない」「お客さんとうまくかかわれるか心配」「お洒落なセンスを磨きたい」等に対応する企画だが、それ以上に、地域の人たちに、その人の得意とするものを媒介として、自然な形で障害を持った人たちのもとに立ち寄ってもらうこと、「あの後、どうだった?」と気にしてもらうことを願ってのことである。たとえば、第1回の講師となっていただいたファミレスの店長さんには、その後、職場研修の受け入れを検討いただくところまでとなった。

3. 2007年度課題の達成度および2008年度の活動計画

(1)「共生の地域づくり」をめぐる講座の企画・開催

当初検討していたボランティア学習講座の開催は実現しなかった。大学が場所を提供し、企画はネットワークで担う予定だったが、関係者からは授業の枠外で、学生がこうした講座に自主的に参加する可能性について危ぶむ声もあり、また企画内容についての十分な合意形成が困難であったことから、年度初めに予定した形ではできなかった。

代替的な活動として、講座に関係者をお招きするのでなく、ゼミナール等の活動で、就労支援の場を実際に訪ね、支援者や当事者と直接対話する場を、フィールドワークの中で設けた。

しかしながら、そこで見聞きしたことを、都留に持ち帰って地元での活動につなげることはできなかった。

上記の経過を踏まえ、2008年度は、田中が担当する社会学科一年の選択必修科目「現代社会と市民参加」の中で、当初予定していた講師に入っていただき、実践活動の紹介、「共生」に必要な地域的課題、学生への呼びかけ等を行っていただく予定である。

(2)「就労支援」をめぐるスタディツアー、学習会の企画・開催

スタディツアーの開催は、二回実施した。しかしながら、視察報告会およびそこで得た示唆を都留でどう活かしていくか、といった検討の機会を失してきた。2008年度のスタディツアーにおいては、研修の総括と地元での活用方法について話し合う機会を持つよう、心がけたい。

（3）「新しい働きかた」を考える多様な回路づくり

第三の課題については、未達成であった。上記（1）の取り組みを通じて、就労支援をめぐる学生の多様な活動を喚起することで、2008年度も引き続き追求していくべき課題と考える。具体的には以下のことを予定している。

①本ネットワークはこれまで、「地域で、障害を持つ人たちの働く場を創るためのネットワーク」という名称を用いていたが、2008年度最初の関係者の話し合いによって、「就労支援」に限らない機能（例子育てに不安を抱える市民の悩みを「親の会」の相談事業につなぐ／生活上のリスクについて学ぶ機会をつくるなど）の必要性が出された。通常、地域においては「生活・就労支援センター」や関連NPO等、障害をもった人たちをトータルに支える専門機関が存在するものだが、当地にはそうした総合的な窓口がなく、また地元の役所や社会福祉協議会といったフォーマルな窓口を利用するよりは、むしろ匿名性の高い地域の相談窓口を求める家族も少なくないとされる。

②したがって当ネットワークも「就労」に限らず、様々な相談に応答するべく、名称も「仕事と暮らしネット」とし、さらには「障害を持つ人」を対象としつつも、地域に暮らす人びとすべての暮らしや仕事のあり方を射程に入れるという意味で「障害を持つたちの」といった規定も取り払うことで合意した。

③上記のネットの性格を反映すべく、当面、以下の二つを計画・実施することとなった。

●「生活上のリスク」を取り除くにはどうしたらいいか：障害を持った人たちをターゲットとした悪質商法への対処を、寸劇を通じて学ぶ。

これは、一般学生にとっても必要な知識であり、山梨県民生活センターに協力をいただいて、昨年社会学科の授業の中で取り上げた経過もある。同テーマについて、障害を持つ人とともに学ぼうという企画の要請があったため、学生が県民生活センターから一定の知見を得た上でそれを寸劇化し、授産施設関係者、地域の発達障害のメンバーに見てもらい、さらに障害を持つ当事者のロールプレイを織り込んだ学習会にすることとした。

●地域で「就労の場」を広げる：市民協力者の開拓を通じて、職場研修の場を広げる。

市民むけ講座は、関心のない市民の人に足を運んでもらうには有効性が薄いということで、2-（2）-⑤で接点ができた市民の方に中心になってもらい、ネットの人間が出向いていって、職場研修に関心を示していただけそうな関係者を囲みつつ、じっくりこちらがお話を聞くという機会を持つこととした。第1回目はレストラン経営者にお願いする。

（代表者／文責・田中夏子）

4．本年度の予算

本年度に必要な予算 → 決定額		
・資料収集	4万円	関連書籍、資料
・備品	2万円	文具、レク活動等の必需品
・専門家からの知識提供に対する報酬5名	15万円	講演料、ヒアリングの際の謝礼
・見学等、交通費	2万円	レンタカー、高速料金等
・役務費	7.5万円	講演会開催などのテープ起こし代
		計 30.5万円

（付）2007（H19）年度地域交流研究センター担当教員

西本勝美	初等教育学科教授	地域交流研究センター長
佐藤　隆	初等教育学科教授	地域交流研究センター次長・ 発達援助部門担当
畑　潤	社会学科教授	地域交流センター通信編集長
坂田有紀子	初等教育学科准教授	フィールド・ミュージアム部門担当
河村茂雄	初等教育学科教授	地域教育相談室担当
泉　桂子	社会学科専任講師	暮らしと仕事部門担当
今泉吉晴	本学名誉教授・センター特別非常勤講師	フィールド・ミュージアム部門担当
北垣憲仁	センター特別非常勤講師	フィールド・ミュージアム部門担当
品田笑子	センター特別非常勤講師	地域教育相談室担当

2008年７月18日　発　行

編　集　者　　都留文科大学地域交流研究センター

発　行　者　　都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原３-８-１
電　話　０５５４-４３-４３４１

印　刷　者　　株式会社　佐野印刷
〒402-0052　山梨県都留市中央２-７-３
電　話　０５５４-４３-１６１１